

れば佛蘭西の死亡率の低下は頗る遅々たるものであつた、而して又獨逸はどうかと云ふと獨逸は三十九年間に於て一年平均〇・九六三といふ非常の低下し方を致して居ります、即ち獨逸は英吉利よりも更に一層大きい死亡率の減少があつたのであります、さて斯ういふことが見えた、それに就て全體此總死亡率の低下は各年齢者のドノ部分に低下があつて來たのであつたか、そこで各年齢者の下り方を觀察しますと、第一に英吉利の材料に於ては零歳といふ小兒に於て仲々低下して居ますが併し其低下し方は餘り著明ではありませぬ、それよりは五歳より十歳、十歳より十五歳、十五歳より二十歳、二十歳より二十五歳、それから三十五歳四十五歳に至る少年及壯年者に於ては非常なる死亡率の低下がありました夫故に英吉利の總死亡率が近き四十年間に於て年々〇・六三七といふ大低下を爲した其主なる原因は少壯者の死亡率が非常に下つたことに歸さなければなりません、勿論幼者の死亡率の下つたことも何分かの働を爲して居るには相違ないが其働きよりも少壯者の死亡率の低下したことが殊に重大なる働を爲したのであつたと云ふことは争ふべからざる事實であります、又佛蘭西に於てはどうかと

云ふと、之は英吉利と反對に幼者及少年者の死亡率の下り方が非常に著しく、即ち零歳より一歳及一歳より五歳までの幼者―並に五歳より十歳までの少年の死亡が大に低下したことが總死亡率を低下せしめたる重大の原因で勿論茲にても中年即ち少壯者の死亡率が下がつたことは下がつたのでありますが、併し其下り方は幼者の如くに餘り大きくなかつた、されば英吉利とは稍反對の現象を呈して居りまして、英吉利に於ては少壯者の死亡率の下つたことが最も著明であつて、幼者の死亡率の下つたことがそれを何分か助けて居る、然るに佛蘭西に於ては幼者の死亡率の低下が著明の原因であつて、中年者の死亡率の低下は左までに著明でない、而して獨逸はどうかと云ふと幼者の死亡率の下り方も非常な勢で下つて居りますが、此幼者にも劣らずに少壯者の死亡率が又著しく低下して居る此二の原因の併せ働いたものと見られます、されば歐羅巴の此三大國の死亡率が何れも下つて居りますがそれには二の重大なる原因がある、即ち少壯者の死亡率の低下したことも總死亡率を低下する原因として大きな力であつたが、又幼者の死亡率が低下したことも大なる働きを爲して居る、而して獨逸に於て

は此二つながら大なる働きを爲して居りますから、斯様に總死亡率の大低下がありましたが、佛蘭西に於ては幼者の死亡率が下つたことが著明であるけれども中年者の死亡率の低下は餘り著明でなかつた、それ故に總死亡率の低下はあつたが獨逸の如く大でない、又英吉利に於ては幼者の死亡率も下つて居るが、それよりも中年の死亡率の低下して居ることが著明であるから、矢張一原因のみ強き働きを爲したから總死亡率を低下することが獨逸の如く大でないと思ひます、特に此處で注意しなければならぬことは、英吉利に於ける幼者の死亡率には餘程注意して觀なければならぬことがあることです、即ちそれは、英吉利に於ける出生の届出期間が甚だ長い、生後四十二日以内に出生届を提出することになつて居ることであり、殊に英吉利は御承知の通り死産を認めて居りませぬ、死産が全く無登録でありまして任意の處置を爲し得ることになつて居るのであります、夫故に私に想像を下して見れば未だ出生届を出さざる生後四十二日以内に死亡したものがあつたとすると或部分の人は或は公には認められざる死産と做して任意の取扱を爲して居る者が又必ず尠なからずあるであらうと思はれます、

夫故に英吉利の出生率そのものが既に他國と嚴密なる比較が出来ないものであります、況んや英吉利に於ける小兒死亡に至りては逆も他國と完全の比較の出来ないものであります、夫故に英吉利の小兒死亡が低下したことは低下したには相違ないでありましやうけれども、此點に於て稍躊躇して見なければならぬのであります、又佛蘭西に就ても注意することがあります、それは佛蘭西の制度として生後三日以内に出生を届出ることになつて居りますが、其生後三日以内には未だ届出ない間に死亡した者があれば、それは死産として取扱へと云ふことになつて居るのであります夫故に佛蘭西は歐羅巴に於ける随分死産の多い國の一であります、されば佛蘭西に於て小兒死亡の數が非常に低いと云ふことは茲に原因する所がないとは言はれませぬ、又縦しや此關係がなくとも佛蘭西に於て小兒死亡の低くなつた、それを直に小兒の保護が行届いた爲めと速断することは出来ませぬ、茲にも亦大分注意を要する點がある、それは生産率が低くなると小兒死亡の割合が同時に低くなる、生産率が高くなると小兒死亡の割合が同時に高くなる、それには殆ど一定の規則立ちたるものがあつて、極つた率を

以て高くなり低くなりして居るやうに思はれる、私の極く粗雑な計算に依ると人口千に對する小兒死亡が一だけ減つたといふ場合には、生産の千に對する一歳未満の乳兒死亡の割合が約そ二だけ減つて來るやうに思はれる、それは邦國に依つて段々違ひがありまして全く減の無い所もありますが、大體に於て多くの國の事實を算へて見ますと、其様になるやうであります、夫故に佛蘭西の小兒死亡率の減つたと云ふことは、佛蘭西に於ける生産率の非常なる減耗が與つて力あると云ふことを先づ第一に考へて行かなければならぬ、勿論佛蘭西に於ても近く小兒の保護が行届くに至つた制度施設等の進歩があつたには相違ありませぬけれども、縦しや小兒の保護が左までに行届きませぬでも、生産率の減耗の影響としても小兒死亡率の非常に低下することが有り得るのであります、されば佛蘭西の小兒死亡率の低下したことは必ずしも大に羨むべきでないかも知らぬのであります、併し今申上げましたやうに歐羅巴の三國の中で二つの原因が特に著明に働いて總死亡率が頗る低下して居るものは獨逸でありまして、佛蘭西、英吉利に於ては其二つの原因の何れかが餘り充分に働いて居らぬ、夫故

に随つて獨逸に於ける總死亡率の低下は非常な勢を以て低下して居りますが、其他の兩國の死亡率の低下は獨逸の如く著明でない、佛蘭西に於ては殊に高年になつては死亡率が少しく上つて居るやうな状態であります。

それは他國のこととしまして、然らば日本の状態はどうかと云ふと、先刻申しましたやうに明治二十一年から四十三年まで二十二年間の觀察を致して見ますと云ふと、今の三國と同様に一年平均の増減歩合を算出して見ますと、斯様に〇・二五六即ち佛蘭西の減じた歩合よりは少し大きく日本は死亡率が増加して居るのであります、日本の死亡率は僅か二十二年の觀察でございますけれども、年々に割當て見ますと〇・二五六といふ歩合を以て死亡率が増加して來たといふことになり、而して其死亡率の増加はどの年齢者に依つて増加したかと云ふと、零歳より五歳といふ小兒の死亡率が非常に高くなつた、それを又分解して零歳より一歳、一歳より二歳、二歳より五歳又一歳より五歳と爲し再掲しますと、一歳未満の乳兒の死亡が非常に高くなつて居ります、それから中年者たる十五歳より二十歳、二十歳より二十五歳等の年齢者も亦此

幼者に劣らなく高い死亡率の増加が見られます、それから初老者は幾らか下つて居りますが、又老年になつて死亡率が幾らか上つて居ります、さう致しますると他の三國に於ては各其内容に於きまして多少の差はありますけれども、總死亡率が低下した其原因は小兒死亡率とそれから中年の死亡即ち少壯者の死亡率が低下したことが重大なる原因を爲して居りますが、日本に於てはそれと反對に總死亡率が増加して來た、其増加の原因は、他國に於て死亡率を低下するやうに働きましたもので、日本に於ては反對に死亡率を増加させるやうに働いて居ることが見られる、丁度歐羅巴の三國就中獨逸の殆ど其裏を行つて反對なる形勢を日本に於て現はして居ると云ふことを考へなければならぬ状態であります。

第十 歐洲に於ける死亡率の低下と死亡原因

扱て是まで申し上げますと云ふと、次には死亡原因の推移に就て研究しなければなりません、即ち先づ是を獨逸に就て調査しましょう、獨逸が今申た様に各年齢者の死亡率が非常に低下した、それに伴ふて總死亡率が頗る低下した、それは如何なる死亡原因が少なくなつた爲めに死亡率が下つたのであるかと云ふことを、もう一步進んで見なければならぬと思ひます。

茲には材料の関係上千八百七十七年以降每五年平均の獨逸に於ける人口一萬五千以上の地の事實を掲ぐることにしました、即ち人口十萬に對する死亡原因別死亡數であります。

獨逸に於ける人口一萬五千以上の地の死亡原因別死亡數比較 (人口十萬比例)

死亡原因別	一八七一年	一八八六年	一八七九年	一八九六年	一九〇一年	一九〇六年	一九一二年	一九二二年
	二七・一	二五・三	二四・九	二四・〇	二四・五	二〇・九	一六・三	一四・五
死亡總數	二七・一	二五・三 <td>二四・九</td> <td>二四・〇</td> <td>二四・五</td> <td>二〇・九</td> <td>一六・三</td> <td>一四・五</td>	二四・九	二四・〇	二四・五	二〇・九	一六・三	一四・五
產褥熱	一四・四	一一・五	八・〇	六・六	五・一	五・三	五・五	五・四
猩紅熱	五六・八	四三・〇	二二・二	一七・九	二〇・〇	一九・五	二四・八	二〇・一
麻疹	二七・六	三五・五	二七・六	二三・九	二二・三	二二・六	一六・八	一四・〇
チフス	九八・八	一三三・三	九九・七	八四・一	三二・一	二四・一	二四・九	三三・六
百日咳	—	—	—	—	—	二二・二	一六・八	一六・二
チフス	四三・六	三〇・二	二〇・六	一一・一	一〇・四	六・五	五・一	三・六

發疹チフス	二・六	〇・六	〇・二	〇・一	〇・六	〇・三	—	—
結核	三・七	三・六	三・〇	二・五	二・八	三・〇	一・八	一・六
呼吸器病	三〇・六	三二・五	二七・五	二七・一	二九・五	三三・九	三三・九	三〇・四
胃及腸カタル	一四・三	一七・七	一三・〇	一一・六	一七・一	一七・〇	一九・六	二四・八
霍亂(一九〇四) 年迄	二六・八	一五・四	一三・二	一五・〇	一五・七	一〇・〇	—	—
痘瘡	一・五	一・四	〇・四	〇・二	〇・四	〇・三	〇・三	—
自殺	三・〇	二九・〇	二五・四	二六・一	二四・五	二五・八	二六・三	二七・九
外因	三・二	三五・九	三四・九	三四・七	三六・四	三七・二	三九・四	四一・二
其他	一四・七	一三・四	一六・六	一七・一	二二・八	九・六	八・九	八・三

備考 結核は千九百四年までは肺結核のみ千九百五年以降は全結核性疾患数なり、又呼吸器病は千九百四年までは急性呼吸器疾患数のみ千九百五年以後は全呼吸器疾患数なり、又胃及腸カタルは千九百四年までは霍亂を含まざる急性腸カタル数のみなるも千九百五年以後は胃及腸カタルと霍亂とを合せたる数なり。

人口一萬五千以上の地なるが故に全國の事實とは多少の相違はありませうが、以て大體の趨勢を窺ふに足ると思ひます、此處に掲げました急性傳染病は何れも非常の勢を以て減少した、日本には公に知られたるものが餘り多くありませぬが此猩紅熱は小兒死亡の最も重大なる原因の一であります、獨逸に於きましては三十六年間に約六

分に減じた、窒扶斯の如きも非常の減少で近來伯林には殆ど窒扶斯無しと云ふ有様だ
 そうで三十六年間に十二分一になりました、其他實扶的里亞でも、麻疹でも百日咳でも痘疹でも皆減ぜざるもの無しでありまして、此急性傳染病の總數が觀察したる三十六年間に於て人口一萬に付て二三・一九から非常の勢を以て減少して今は僅に六六五にまで減少しました、是寔に非常なる働きと言はなければなりません、斯の如きは畢竟獨逸の防疫策が正鵠を得た近世學術の權威であると思はれます、次に尙一の非常なる減少をしたものがあります、それは此結核性疾患であります、此項は備考にもある通り千九百四年までは肺結核のみの數、それから以後は肺結核を始め腸の結核、腦膜の結核其他骨の結核等總ての結核性疾患を包含して居るのであります、其結核性疾患が三十六年以前に於ては人口一萬に付肺結核のみで三五・七七でありましたものが三十六年間に非常に減少して千九百十二年には總ての結核性疾患を合せて一六五・六に減つてしまつた、即ち半數以下に減つたのであります、それから産褥熱の死亡も、約三分一に減少して居りますが其全量が大でない爲めに餘り著明でない、其次は呼吸器

病の死亡、是も備考にある通り始めは急性肺炎、急性気管支炎就中小兒の毛細気管支炎等急性病が擧げられたのでありましたが、後には總ての呼吸器病を合算した、其呼吸器の疾患が三十六年前には人口一萬に付三〇・八六でありましたが、二〇・二四に減つてしまつた、其次には胃腸病就中は小兒の腸カタルが主なるものであります、是も備考にある通り近頃までは小兒の夏期下痢(霍亂)を別にして算へて居りましたが、此夏期下痢を合算して見ますと是亦斯様に非常な勢を以て減つて來た、即ち二六・四一であつたものが三十六年間に一・一四八といふ二分一以下に減りました、斯様なことでありまして先づ大體に獨逸に於ける死亡原因のどれが最も著明な減じ方をして居るかと言ふと、第一に結核性疾患が非常に少なくなつた、第二には急性傳染病が少なくなつた、第三には呼吸器の疾患が少なくなつた、第四には胃腸病殊に小兒の下痢が少なくなつた、此胃腸病が少なくなつたことは獨逸に於ける小兒死亡が非常な勢を以て少なくなつたといふ著明なる證據であります、御承知の通り普佛戦争の後獨逸の工業の盛んに勃興しました時分には獨逸に於ける小兒死亡は非常なものであります、生

産千人に付て一歳未満の乳兒の死亡がバイエルンでは四百人に達した地方もある普魯西などでも二百以上になつたことが屢あります、それが今日に於ては百四十六―戦争中どんなでありますか知れませぬが、千九百十五年の統計を見ますと矢張り乳兒死亡率は高くならない、百四十餘で百五十には満たない位であります、即ち此胃腸病の減じた大部分は小兒の下痢、腸炎の減じたのであると言ふて差支ないと思ひます、それから殊に冬に於て小兒の毛細気管支炎で斃れる者が少なくなない、然るにそれが獨逸に於て非常に減じた、其關係が呼吸器病の減少となつたので是も主としては小兒死亡の減少したる徵證であります、此呼吸器病と年齢との關係は一寸おかしいものであります、氣管支炎のやうな輕微な病氣で人が多く死亡することは變なやうに見えますが、小兒の日齡月齡年齢の長ずることと呼吸器の病氣との間には餘程面白い關係がありまして生後間もない嬰兒は鼻カタルを起しても、もうそれが重大なる死亡原因になります、それが稍長して來ますと鼻カタルでは死なぬが、喉頭カタルを起しますとそれが重大の死亡原因となる、それから最早喉頭カタル位では死なくなると今度は

氣管支カタルに罹るとそれが重大な死亡原因になる、又稍長じますとモウ少し深部の毛細氣管支炎が死亡原因として重大なるものとなり、更に年齢が進むと肺炎に侵されたことが重大の死亡原因になります、即ち日齡月齡年齢が若かければ若いほど呼吸器の浅い部分の疾患でモウ重大のことが生じて來ます、然るに老年になると恰もそれと反對でありまして段々年老ゆると段々呼吸器の浅い部分の疾患が既に重大なる死亡原因に爲ります、尋常の氣管支炎が早既に死の重大なる原因になりますのみならず極く老年になると至て輕微なる鼻カタルが人の生命を斷つ原因として強くなります、それでありますから小兒の養育の上にて榮養の不完全なることは何時でも胃腸病として現はれますし、取扱の不完全なることは何時でも呼吸器病に依つて現はれて來る、此呼吸器病と胃腸病は壯年者には餘り重大なる死亡原因でなく幼者と老者に取つて重大なる死亡原因であると見えます、夫故に其減じたことは幼者と老者との死亡率に重大の影響を及ぼします、さうしますと壯年者に於ける死亡の一般に減少したる重大の原因は何であるかと云ふと結核性疾患、急性傳染病と答へなければならぬ、併し急性傳

染病も其大部分は小兒死亡原因として働くことが多ございますからして、先づ結核性の疾患が最も著明なる原因でありはせぬかと思はれます。

もう一つ英吉利の材料に就て詮索します、私の有つて居ます英吉利の材料は獨逸と同じやうな比較をすることは出来ませぬから、一寸おかしな形のものになりましたけれども斯ういふ比較を致しました。

英吉利に於ける死亡原因別死亡數比較 (人口十萬に付)

死亡原因別	總數	
	一八九一—一九〇〇年	一九一二年
總死亡數	一八一九・四	一三三二・一
急性傳染病	一四二・一	九七・〇
結核性疾患	二〇一・〇	一三七・〇
癌及其他の惡性新生物	七五・八	一〇二・一
心臟の器質的疾患	一六五・七	一三〇・七
呼吸器病	三四〇・九	二三一・二
		七一・三
		四七・六

下痢	七一・三	三二・三	一・七	四・〇
腎臓炎	四六・一	三九・九	二一・八	一六・九
産に因する疾患	一五・二	九・五	三二・〇	一九・五
外因	六六・〇	五四・一	四五・六	三七・八
其他	六九四・七	四九九・三	一五〇・七	一〇五・四

備考 一八九一—一九〇〇年の心臓の器質的疾患は血行器病の總數にして同腎臓炎は泌尿器病の總數なり

一方は千八百九十一年—九百年までの十年平均他は一千九百十二年唯一年の事實でありますから少しく不備を免れませぬが、併し一千九百十二年は甚しき變動原因の働かない至て靜平の年でありますから不備と知りつゝ斯う比較致しました、それで總死亡に付て各死亡原因を觀て行きますと、第一に急性傳染病はどうであつたかと云ふと、前の人口一萬に付一四・二一であつたものが餘程少なくなりまして約三分の二なる九・七〇に減つた、第二には結核性疾患は矢張り人口一萬人に付二〇・一〇から一三・七〇に減じて十分の七と爲つた、第三の癌はどうであるかと云ふとは増加して居ります、併し癌の増加は注意して見なければならぬものでありまして、癌が實際

に増加したのであるか、或は癌の診斷が明確になつて來たのであるかと云ふことは深く考へねばならないと思ひます。其次には心臓の器質的疾患も餘程減じて參りました、其次に呼吸器病も前後の調査に於て餘程減つて來た、それから下痢はどうかと云ふと總量が少なくはあるが是も著しく減じました、それから腎臓炎日本に於ては増加しつゝあるが、英吉利では減じた、それから産に因する疾患及不慮外傷等も總て減ぜざるものはありません、然るに唯今申たのは幼者も老者も包含したる總數であります、此總數中の十五歳以上四十五歳迄の年齢者即ち青年壯年に就て觀ますと此幼者老者を含むだ場合と大に異なつて來る、即ち總數に於て最大なりし死亡原因は呼吸器病でありましたが、十五歳以上四十五歳迄の青年壯年に就て觀ますと、呼吸器病は左まで重大でありませぬ最も重大なるものは結核性疾患であります、其結核性の疾患は僅かの間隔ある前後の調査に於て二一・四六でありましたものが一五・三〇に減ずるといふ非常な減じ方をして居ります、其外各死亡原因は皆減じて居ります、急性傳染病なども減じては居りますが、其減じた總量の約三分の一は結核性疾患の減じたのであり

ました、して見ると獨逸に於ても青年壯年の死亡率の低下は此結核性疾患の減少したことに歸さねばならなかつたのであるが、英吉利に於ても矢張り同様に結核性疾患が減じたといふことに最も重きを置かねばならないやうに見えるのであります。

第十一 日本に於ける死亡率の上昇と死亡原因

然らば日本に於てはどうか、あるかと云ふと、寔に残念ではあります、日本に於ては漸く明治二十二年から始めて此死亡原因に依つて別けましたる細かい統計が見られることになりました、其以前に於ける死亡原因別の統計は殆ど見られないのであります、そこで僅の年間でありますけれども明治三十二年以來の各死亡原因の消長を觀ますと大體斯様なものが出來ます。

日本に於ける死亡原因別死亡數比較 (人口一萬比例) (抄録)

總死亡數	明治三二年 三三〇・五	同三五年 二〇八・五	同三八年 二一〇・九	同四十二年 二〇七・七	同四十四年 一〇三・〇	同四十五年 大正元年 一九八・八
------	-------------	------------	------------	-------------	-------------	------------------

急性傳染病	一〇・三	七・五	六・二	六・九	五・八	五・九
肺結核	一三・六	一四・三	一六・〇	一五・五	一五・七	一五・七
其他の結核性疾患	二・六	三・六	四・二	四・五	五・八	六・二
癌及其他の惡性新生物	四・四	五・三	五・六	六・二	六・六	六・五
脚氣	二・〇	二・四	二・五	二・二	一・六	〇・九
腦神經系の疾患	四二・三	四〇・二	三七・六	三五・四	三五・三	三四・〇
心臟の器質的疾患	四・八	五・二	五・四	五・八	六・一	五・九
呼吸器病	二五・六	二八・〇	三〇・四	三〇・九	二九・〇	二九・四
急性及慢性氣管支炎	一〇・四	一一・二	一一・六	一一・六	一〇・〇	一〇・三
肺炎及氣管支肺炎	九・八	二・六	一三・六	一三・四	一三・五	一四・二
(掲再) 其他の呼吸器病	五・四	五・二	六・二	五・九	四・九	四・九
胃の疾患及下痢腸炎	二八・九	二六・五	二七・九	二七・〇	二九・七	二八・〇
腎臟炎	三・〇	三・四	四・二	四・九	五・六	五・九
妊娠及産に因する疾患	一・四	一・三	一・三	一・四	一・二	一・二
先天性弱質	八・一	九・五	八・四	一一・一	一〇・六	一〇・一
老衰	一一・五	一一・五	一三・七	一二・〇	一一・〇	一一・一
自殺	一・三	一・九	一・七	一・七	一・八	一・八

其他の外因	四・九	四・四	四・四	四・五	四・五	四・六
以上列記外の疾患	一七・九	一八・七	一七・六	一九・三	二〇・三	一九・五
不明の診断死因不詳	二七・九	二四・七	二四・〇	一九・四	二二・四	二二・一

日本に於ても矢張り急性傳染病が大に減じて居ます、近年になりまして赤痢の流行することが少なくなつたといふだけでも、餘程死亡數が減じた譯であります、日本に於ける衛生の事業といふものは以前に在りては要するに急性傳染病を防ぐこと或は急性傳染病を防ぐといふよりは急性傳染病を追ふて行くと云ふ方が適切だといふ人もあります、夫故に日本に於ける衛生の働きの全部が此急性傳染病を驅逐したことに在るのであります、茲には急性傳染病大流行の終末期からの事實を擧げたのであるから著明でありませぬが若しも十六七年頃からの事實を掲ぐる事が出来れば此線は非常に著明に低下して居ることが見ゆる筈です、夫故に急性傳染病は獨英二國と同様に大に低下して居る即ち日本も防疫上に於ける近世科學の應用に於て人後に落ちぬと云ふことが出来る、然るに其次の結核性疾患はどうかと申しますると、明治三十二年には人

口一萬に付一五・二であつたものが四十二年には最も高くなつて二二・八になり、最近の四十五年大正元年に於ては二一・九であります、四十二年四十三年から四十四年には少しく下つては居りますけれども、次の四十五年大正元年は又上つて居るのであります、大體に於て結核性疾患は非常なる増加を爲して居る。第三に癌はドウか是は英吉利などでも多少多くなつて居りますが日本も矢張癌は年々増加して居ります、斯く癌の多くなることは癌が實際に増加するのであるか、將た英吉利あたりと同じやうに醫師が癌の診断を爲すことが確實になつたのであるか考へなければなりません、尤も社會生活の状態がどう變つて來た爲に癌が多くなつたかと云ふやうなことは一寸今日に於ては言ひ悪い様であります、追々病理學者の研究が進んで今日では人工に癌を發生させることが出来るかと承りますが、併し未だ癌の病理が明瞭に知られて居らないやうでありますから、果して癌が増加するのか夫とも診断が能くつくのかそれが明確に判りませぬが先づ今日では癌の診断が能く付くやうになつた爲であらうとして置く方が安全かと思ひます、次に日本固有の病氣とも言ふべき脚氣があります、脚氣は一種の

風土病だと申す其發生の狀況からのみ見ますと恰も傳染病のやうな觀がありました或は高くなり或は低くなつて居ますが矢張り大體に於ては幾分か多くなつたか知れませぬが併し餘り大差はない、其次に腦神経系の疾患が大分減少しました、單に腦神経系の疾患が減少したと云ふと何か目出度いやうに思はれますけれども、實は一向目出度くもなんともないらしい、此腦神経系の疾患といふものゝ内容を吟味しますと其大部分を占むるものは老人に於ては腦出血其れから幼年者に於ては腦膜炎といふものであります、試に前記明治四十五年大正元年の三四・〇を分解すると腦出血腦軟化が一二・九腦膜炎が一三・〇腦膜炎に近似なる瘧子癩が二・三其他が五・八であります、之を最近英吉利の事實が腦出血、腦血栓、腦卒中七・七四、腦膜炎腦炎一・一九であるのに比すれば彼是の間に頗る大差あるものと言はねばなりません、然らば日本には腦出血や腦膜炎やが多數にあるのかと申すと實際はそうでないらしい、其腦膜炎と稱するものゝ中には結核性腦膜炎も包含せられて居るらしいし又眞の腦膜炎でないものが少なからず含んで居るらしい、又腦出血と稱するものも眞の腦出血のみなるやと云

ふと醫師は誰でも然りと云ふ答を爲し得ない、何故かと云ふとどうも是は日本の醫師中に皇漢法醫などがあつたりして診断の錯誤が頗る多いからであります、即ち小兒が腦症ある疾病で死亡すると之を直に腦膜炎と診断するに躊躇しない、然るに其中には眞の單純腦膜炎もありましたやう又結核性腦膜炎もありましたやうそれから又胃腸病から反射的に腦症を發した者も少なからずありませうが總てそれを腦膜炎と診断する、又其死者の家族も腦膜炎と診断せられて少しも怪しまない状態であります、それから腦出血も其通りでありまして老年の者が若しも腦症ある疾病を發して死にますとそれを總て腦出血或は腦卒中と診断して其儘通つて行くのであります、其腦出血の中には眞の腦出血も無論あらうが時に或は慢性腎臓炎の尿毒症を發したのを尿の検査もせず、誤診して居る者があるかも知れませんが、夫故に私共は此腦出血及腦膜炎といふものを一種の不明の診断の集團であるとして置きまして、餘り眞面目に之を研究しないやうに致して居ります、夫故に此項の死亡が減少したことを左迄に目出度い徴候であると思ひませぬ、其次は心臟の器質的疾患であります、心病が日本に於て

は段々多くなつて來ました、最近少しく減じたやうではありますが、併し以前に比すれば遙に多くなつた、但し此心臟病が多くなつたといふ中には所謂心臟麻痺と稱するものは包含してない、心臟麻痺と名けられるものは随分澤山ありますが、其心臟麻痺は如何の疾病ありて死の刹那に心臟麻痺に陥つたのであつたか其疾病を言はずして死の直前の症候なる心臟麻痺とのみ稱しても、要するに不明の診断であつて何れにも分類することが出來ません、承る所によると人間が死にます場合には心臟麻痺を起すか、然らざれば虚脱に陥るか、又然らざれば窒息するか、此三つの外に出ないものだとか申す、夫故に心臟麻痺とのみ記したものは單に死亡したといふのと何等撰む所がない、仍て私共の方では之を不明の診断を附したるものとして取扱つて居ります、此處に挙げました心臟の器質的疾患には此不明の診断を包含しませぬ、其内容は例へば心臟内膜炎又は心臟瓣膜諸病等であります、それが結局日本に多くなつて來ました、其次に呼吸器病、此中に結核性の疾患は包含しませぬ、而して其の主なるものは急性氣管支炎、慢性氣管支炎、急性肺炎、氣管支肺炎即ち加答兒性肺炎肋膜炎等でありま

す、獨逸の死亡原因別死亡統計の肺炎の項には加答兒性肺炎が包含してない、併し日本の中には加答兒性肺炎が包含されてあります、餘り専門的のことを申やうであります、彼此の程度を示す一例として述べて置きます、加答兒性肺炎は要するに獨立の疾病として見ることが出來ない、彼の嚙下性肺炎といふものがあるけれどもそれは一種の外傷である、其他の總ては何か他の原病があつて、例へば麻疹に罹つたとか或はインフルエンザに罹つたとか若くはデフテリアに罹つたとか、百日咳に罹つたとか云ふやうな其の特別の原因があつた場合に其一の症候として加答兒性肺炎が起る、夫故に獨逸の死亡原因類別の選擇方には特に原病を示さずして單に加答兒性肺炎とか或は氣管支肺炎とか記したるものは不明の診断を附したるものとして取扱ふことになつて居りますが、日本に於ては其の不明診断を附したるものと獨逸に於て取扱はれるものが獨立したる疾病として一項に舉げてあります、尤も私共も躊躇しまして特に某大家に御尋致しましたのでありましたが、日本に於ては加答兒性肺炎と急性肺炎とが混同せられて居る場合が多いから今遽に之れを棄つるの英斷に出でぬが宜か

らうと云ふことでありまして即ち呼吸器病の項目中には加答兒性肺炎が擧げてあるの
であります、其の呼吸器病死亡を見ますと一上一下をして居りますが、矢張り大
體に於て増加して居ります、其の次には腸胃の疾病即ち胃疾患及び下痢腸炎であり
ます、是れ亦た年々一上一下して居りますが最近幾分か減少したやうにも見えます
けれども、併し大體に於て以前よりは多くなつて居ます、其の次は腎臓炎、此の腎臓
炎に就ても大分議さなければならぬことがあります、今は多く申ませんが、茲に言ふ
腎臓炎は急性腎臓炎と慢性腎臓炎とを包含して居るのであります、日本の腎臓炎に
あつては段々細かに分解して見ますと歐羅巴にない奇怪な現象が日本の腎臓炎にあ
る、それは何であるかと云ふと日本には小兒の腎臓炎死が非常に多い、それから
う一つは腎臓炎は男の罹ること多き疾病としてあるのに、日本に於ては女の腎臓炎
が男に比較すると寧ろ多い、此の奇觀を段々調べて見ますとそれには自ら據ところ
のあることであります、即ち腎臓炎が或る急性傳染病の症候として又た續發症として
起ることは何人も御承知の通りであります、殊に猩紅熱に於ては發疹のない猩紅熱が

あつても腎臓炎のない猩紅熱はないなど、申す位に腎臓炎を發する者が多い、而して
斯くの如く原病ありて發したる腎臓炎の爲めに死亡したる場合には世界共通類別では
之を其の原病に編入することが普通になつて居ます然るに日本の醫師の死亡診斷書の
記載を見ると、何時でも續發症なる腎臓炎を主なるものとして、其の腎臓炎の原病で
あるデフテリアとか猩紅熱とかいふものが輕んぜられて居る、統計局で收受しました
死亡票の記載を見ると腎臓炎兼デフテリア腎臓炎兼猩紅熱と書いてありますものが多
い、夫故に若し單に一病名のみを書く場合には是等は、腎臓炎とだけ記してデフテリア
とも猩紅熱とも書かぬであらうと思ふ、されば腎臓炎とのみ書いたものあつた場合
には夫が急性傳染病の續發症であつたのか獨立に來たのか全く區別がつきませんから
之を單に腎臓炎として取扱より外致方がないのであります、斯様な状態でありますか
ら日本の小兒が急性腎臓炎で死亡するものが多い、其の中には急性傳染病の結果であ
る者が少なくないと想像せられます、それは他國に於ては傳染病として取扱はれるも
のが日本に於ては其の續發症なる腎臓炎が主なるものとなりて取扱はれて居るのであ

ります、此の錯誤の裏面には醫師の急性傳染病を隠蔽する悪弊あることに注意せねばならぬといふ人がある、其の言によれば法定の傳染病なるデフテリアや猩紅熱を隠蔽治療して居たものが腎臓炎を續發して死亡すると之が死亡診断書には唯腎臓炎と記して原病なるデフテリア猩紅熱は全く隠蔽せられて終るのであると、是れは實に厭ふべき一種の弊害と思ひます、次に女に腎臓炎の多いといふことは何故であるか不明であります、が妊娠の末期に於て屢腎臓炎を發することがある、それは物質變更機に生ずる産生物の中毒であらうと言ふ人がある、所謂妊娠腎臓炎又は妊娠蛋白尿といふものが、それであり、世界共通類別では之を妊娠に因する疾患として取扱ふのであります、日本に於ては是も亦た妊娠とも何とも原因が示されてない爲めに之れを總て腎臓炎として取扱ふ爲めであらうと思ひます、此の想像は女の腎臓炎が男よりも多いのは其の妊孕年齢者であることによりて確からしく思はれます、斯様に急性傳染病の續發症たる腎臓炎やが多く腎臓炎として取扱はれて居るにも拘はらず、老人の慢性腎臓炎が尠ならず脳出血と誤診せられて居りはせぬかと思はれます、夫は前にも述べまし

たが此場合にも一言して置きます、次は産褥熱及其他の妊娠産に因する疾患及不慮是は餘り大差はありませぬ。其次は先天的に弱く生れた者即ち先天性弱質です、著明ではありませぬが増加して居ります、此先天性弱質及畸形は世界共通の死亡原因類別で取扱方法が定まつて居りまして、生後十五日以内に他に認むべき疾病なくして死亡したものの、それを此先天性弱質の項に編入することになつて居ります、夫から老衰死者は大差がない自殺が増加の傾向を有して居る、其他の外因の死亡も大差がない、或は戦争の影響がありはせぬかと思はれる方もありまじやうが、實は國境外の死亡は茲に含ぬので其影響は判りません、最後に大に少なくなつたものがあります、それは不明の診断であります、此不明の診断が段々少なくなることは實に喜ばしい、畢竟是は醫師の注意が行届くやうになつたのと、又當局者も段々注意した結果からであらうと思ひます、其不明の診断の中にはどういふ種類のものがあるかと云ふと随分抱腹絶倒に堪へぬものが是までありました、先日或る所で此不明の診断が少なくなつたといふことを御話しまして、其中の可笑しいものゝ例を一二擧げて申しましたところが、それが新聞

に書かれて今現にさういふ不良の記載が澤山來るので人口の動態統計が甚だ不信用のものであるかのやうに書かれましたので頗る迷惑致しました、明治三十二年に初めて死亡原因の調に著手した時分には非常に此不明の診断を附したものがありません、それをどんなものかと云ふと、例へば「熱三十七度五分」と書いたものがあつたり、或は全く死の原因とはならない「角膜のバンヌス」で死んだなどと云ふのがありましたり、或は又症候ばかり書きまして「惡寒發熱頭痛眩暈の症」などといふものがありましたしたり、甚しきに至りましては六十五歳の老爺が「子宮周圍炎」で死亡したと云ふのがありました、餘り不思議に存じまして段々尋ねて見ましたところ夫れが男に相違なかつたのでありますが、どういふ間違でありましたかさういふことがありました、或は二歳の小兒が自殺したと云ふ、それは明治三十二年の人口動態統計に歴々と印刷してありますので、今でも其汚點を拭ふことは出来ませぬが其二歳の小兒が自殺したといふ事實は椽側で匍匐して遊んで居つた小兒が其椽側から轉げ落ちて頭を石か何かで打つて其翌日死んだといふのでありまして、その解説に誰も落したのではなく自ら

落ちて死んだのであるから是は自殺だとありました、それから八十五歳の老婆が産褥熱で死んだと云ふ、是も明治三十二年の動態統計に印刷せられある、それなども段々問合せで見ましたところが、醫師の死亡診断書には褥瘡と書いてありました、其記載も素より不完全で其褥瘡を發するに至りたる原因を記さなければ矢張り不明の診断たることを免かれませんが、それを役場の書記が褥瘡などとするが多分産褥熱の間違だらうと親切に書直して呉れた爲めに八十五歳の老婆が産褥熱で死亡したと云ふ珍談が出來たのでありました、又是は全く戸籍の錯誤から來たものと思ひますが、生後二日の嬰兒が慢性腎臟炎で死亡したのでありました、生後二日では早過ぎると思ひまして尋ねて見ましたところが、それは實際の年齢が二十幾歳かの者でありました、どうして二十幾歳の者が生後二日となつたかと云ふと愈死亡した時に、其者の出生届がしてなかつたと云ふことが知れて、それを出生の届漏れといふことに正直にして呉れますと二十錢かの料を出せば濟むのでありますけれども、さうせずに昨日生れたといふ届を出して今日死亡したといふ届出をした、然るに主治醫は自分の診断は慢性腎臟炎に

相違ないから別の病名は書けぬと云ふことで正しく慢性腎臓炎と書いた、仍て生後二日の慢性腎臓炎が出来たと云ふ珍現象が現はれました。

以上掲げました各死亡原因に就て簡單の解説を致しました、之に由て見れば目前の問題である日本の死亡率の增高の傾向ある、それに就て何の死亡原因が多くなりつゝあるか、換言すれば總死亡率增高の働きを爲す原因は何かと詮索しますると、結核性疾患、癌心臓の器質的の疾患、呼吸器病胃腸病、それから腎臓炎、先天性弱質、此七種の死亡原因がそれであると答へなければならぬ、而して其中の癌は高年者の疾病であつて四十歳以上の者に發するを常とします、尤も晩近に至り若い年齢者殊に女のそれにポツ／＼發見せられますけれども、それは甚だ多いものでありませんから、先づ四十歳以上即ち初老以後の疾病として青年壯年の死亡を統計的に觀察する場合には癌に大なる注意を拂はぬでも宜い、又先天性の弱質及畸形は生後十五日以内の死亡者に限つてありますから、乳兒の死亡を論ずるには見逃すべからざる重要な死亡原因でありますけれども壯年の死亡を觀察する場合には必ずしも注意を要さぬと思ひます、そ

こで死亡率增高の原因として最も注意を要するものは前に挙げました七種の中結核性疾患、心臓の器質的疾患、呼吸器病、胃腸病、腎臓炎、此五種の死亡原因が殊に注意して見なければならぬものと思ひます。

第十二 主なる死亡原因の男女別人口比例

右申述べましたのは男女を合せた總數の増減であります、更に之を男女に分けて、さうして累年の人口比例を算出しまと大體は總數と趨向を異に致しませんが、男女の關係の大に見るべきものが明かになります、其第一は結核性疾患です即ち肺結核と其他の結核性疾患とに分ちまして其男女の人口比例を累年に列擧しました、之に由て見ますと肺結核に於ては觀察の最初なる明治三十二年には、女の比例が男の比例よりも低くかつた、其次年には男女殆ど同位で尙女の比例が僅に低くかつたのが、三十四年以後最近に至るまで總て女の比例が高く一も男の比例が女を超過したことがなす。

累年各性結核性疾患に因る死亡 (人口千に付)

年	肺結核		其他の結核性疾患	
	男	女	男	女
明治三十二年	一一・八	一一・五	二・三	二・九
同 三十三年	一三・三	一三・二	二・五	三・〇
同 三十四年	一三・五	一三・八	二・八	三・六
同 三十五年	一三・九	一四・八	三・〇	四・一
同 三十六年	一四・〇	一五・一	三・一	四・三
同 三十七年	一四・三	一五・〇	三・二	四・六
同 三十八年	一五・四	一六・五	三・四	四・九
同 三十九年	一四・九	一六・四	三・五	五・〇
同 四十年	一四・八	一六・二	三・五	五・一
同 四十一年	一四・九	一六・二	三・六	五・三
同 四十二年	一六・〇	一七・一	五・二	七・三
同 四十三年	一五・八	一七・〇	五・一	七・一
同 四十四年	一五・二	一六・二	四・七	六・九
同 四十五年	一五・三	一六・三	五・二	七・二

又肺結核以外の結核性疾患即ち腦膜の結核、腸の結核及其他の結核の集團を見ます

と、是は又最初の年から總てに於て女の比例が男を超過して居る、殊に其超過の歩合は肺結核に於けるそれよりも迥に大であります、斯様に女の結核に罹りて死亡する者が男よりも多い邦國が何處にありますか、歐洲の多くは男の結核が女を超過し居る、男よりも女に多いのは稀に見る現象である是れ本邦の死亡統計に於て大に注目すべき一であります。

それから次に注意を要する疾病として癌を見ます。

累年各性癌に因る死亡 (人口千に付)

年	男		女	
	男	女	男	女
明治三十二年	四・三	四・三	五・七	五・六
同 三十三年	四・四	四・五	五・七	五・七
同 三十四年	四・七	四・九	六・一	六・一
同 三十五年	五・二	五・三	六・四	六・三
同 三十六年	五・四	五・四	六・四	六・三
同 三十七年	五・四	五・四	六・五	六・四
同 三十八年	五・五	五・四	六・五	六・四
同 三十九年				
同 四十年				
同 四十一年				
同 四十二年				
同 四十三年				
同 四十四年				
同 四十五年				

癌は男よりも女に幾分か多き疾病としてあります、それは女は男よりも侵さるべき臓器が多いからだと申す、然るに前表によれば三十五年までは女が男を超過し、三十六年から四十一年までは男の多いこともあつたが、大體に併行した、四十二年以後は明に女よりも男が多いことになつた是れ果して何の故か、追て立入りたる調査の必要あることと思ひます。

それから呼吸器病を見ます。

累年各性呼吸器病に因る死亡 (人口千に付)

年	急性及慢性 気管支炎		肺炎、氣 管支肺炎		其他ノ呼 吸器病	
	男	女	男	女	男	女
明治三十二年	一〇・八	一〇・〇	一〇・五	九・一	五・九	四・九
同 三十三年	一二・六	一一・五	一〇・七	九・三	六・四	五・二
同 三十四年	一一・七	一〇・六	一一・六	一〇・二	六・〇	五・〇
同 三十五年	一一・六	一〇・九	一二・二	一一・〇	五・七	四・八
同 三十六年	一一・〇	一〇・三	一一・〇	九・八	五・五	四・五

同 三十七年	一一・四	一一・〇	一一・六	一〇・五	六・四	五・三
同 三十八年	一二・〇	一一・四	一三・〇	一二・一	六・八	五・六
同 三十九年	一〇・九	一〇・六	一一・六	一〇・八	六・四	五・四
同 四十年	一二・一	一一・七	一三・五	一二・二	六・五	五・五
同 四十一年	一一・八	一一・二	一四・一	一二・八	六・三	五・四
同 四十二年	一二・二	一一・六	一四・八	一三・五	五・九	四・九
同 四十三年	一二・〇	一一・四	一四・四	一三・二	五・七	四・八
同 四十四年	一〇・九	一〇・三	一四・〇	一三・〇	五・五	四・四
同 四十五年	一〇・七	一〇・一	一四・七	一三・六	五・四	四・四

呼吸器病は之を急性慢性の気管支炎と肺炎、気管支肺炎と其他の呼吸器病とに分ちしました即ち此人口比例に由りて、男と女とを比べますと、其總てに於て男が多く之に罹りて死亡し女の方が少ない、此事實は歐洲に於ても同様でありまして、縦しや小兒に於ても男の活動的外部的であることが然らしめるのであると申す、日本に於ては殊に是が又他の研究の端緒を爲します、御記憶置きを願ひます、
次には心臓の器質的疾患を見ます。

是は又呼吸器病と正反對に總てに於て女が高い、此現象は歐洲に於ては餘り見ない所でありまして日本の死亡統計に現はれたる一特徴である、それが聽て研究の價値ある所であります。

次には腎臟炎を見ます。

累年各性腎臟炎に因る死亡 (人口千に付)

年	男	女	年	男	女
明治三十二年	二・九	三・一	明治三十九年	四・一	四・五
同 三十三年	二・九	二・九	同 四十年	四・五	四・八
同 三十四年	三・〇	三・二	同 四十一年	四・七	五・一
同 三十五年	三・三	三・六	同 四十二年	五・二	五・六
同 三十六年	三・七	三・九	同 四十三年	五・〇	五・五
同 三十七年	三・八	四・二	同 四十四年	五・五	五・八
同 三十八年	四・二	四・三	同 四十五年	五・七	六・二
			大正元年		

是は實際に腎臟炎が増多するのであるか、將た醫師の診斷が正確になるのであるか明瞭でありませんが、又女に多くして男に少きことは前にも述べましたが、事實は斯く

の如くであります。

次には先天性弱質を見ます。

累年各性先天性弱質に因る死亡 (人口千に付)

年	男	女	年	男	女
明治三十二年	八・五	七・六	同 三十九年	九・四	八・七
同 三十三年	九・五	八・五	同 四十年	一一・〇	一〇・〇
同 三十四年	一〇・一	八・九	同 四十一年	一一・七	一〇・五
同 三十五年	一〇・一	八・九	同 四十二年	一一・二	一〇・二
同 三十六年	九・九	九・〇	同 四十三年	一一・二	一〇・一
同 三十七年	九・一	八・四	同 四十四年	一一・〇	一〇・一
同 三十八年	八・八	七・八	大正元年	一〇・六	九・七

先天性弱質は女よりも男に多い、それは各年總てに於て然りであります、嬰兒の死亡は何故に女よりも男が著しく多いか、試に死産兒を男女に分けて見ますと男の死産兒が多く女の死産兒が少ない其割合は此先天性弱質死の男女の割合と略ぼ相似て居ます、即ち明治三十二年より同四十一年までの死産兒の男女比例は女百に付男一一〇・

三八に當りまして、之と同一の十年間の先天性弱質死の男女比例は女百に付男一一〇・九七で略ぼ同一であります、而して又此年間に於ける一歳未満の乳兒死亡の總數に就て男女の比例を求むると是も亦女百に付男一一三・一八で餘り隔たらざる男の多數を示して居ます、何故に男は既に胎内に於て又生後間もなく斯くは淘汰せらるゝと女よりも甚しきや、是は好個の研究問題であると思ひます。

第十三 年齢別五種死亡原因の觀察

日本人の死亡原因中殊に注意を要す可き五種の疾病あることは前に述べました、即ち結核性疾患、心臓の器質的疾患、呼吸器病、胃腸病、腎臓炎此五種が殊に著明に働きて日本人の總死亡率を高めるものと認められました、而して此五種の疾患が如何の年齢者を多く侵すか、又如何の年齢者に於て増減があるか、それを觀察する爲めに次の表を製しました。

五種死亡原因に因る年齢別死亡の人口比例前後期比較

(前期は明治三十四年より三十八年に至る五ヶ年平均後期は同)
(三十九年より四十一年に至る五ヶ年平均、各人口一萬比例)

總死亡率 年齢別死亡率 〇—五歲	結核性疾患		心臓の器質的疾患		呼吸器病		胃腸病		腎臓炎	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
五—一〇	六・三七	七・五七	一・一六	一・三七	六・七九	七・四六	六・五三	六・六〇	二・三三	二・六九
一〇—一五	一〇・六六	一二・九一	一・六八	一・八八	三・八六	四・一三	三・一九	三・一六	一・一五	一・四〇
一五—二〇	二六・二六	三三・三六	二・四五	二・八一	七・〇五	七・九二	四・六四	四・四九	一・一四	一・四三
二〇—二五	三二・七七	三九・七八	二・六六	三・〇五	七・六五	九・〇六	五・六四	五・二一	一・三六	一・七五
二五—三〇	二六・八九	三三・七五	三・一一	三・三七	七・三八	七・六九	六・四五	五・九六	一・五四	二・〇一
三〇—三五	三三・六三	四〇・一六	三・七六	四・一五	七・七九	七・三五	七・六五	六・七四	一・八三	二・二六
三五—四〇	一八・八三	二二・三三	四・五四	五・四六	七・七九	八・〇七	九・〇一	八・五〇	二・一三	二・八八
四〇—四五	一八・九四	一九・三三	六・〇七	六・一九	一〇・三〇	八・九六	一二・八三	一〇・五三	二・六四	三・一八
四五—五〇	一八・六五	一九・九四	七・一〇	八・三三	一二・六八	一二・五三	一六・八五	一五・九五	三・〇七	四・二七
五〇—五五	一八・七三	二〇・三二	八・八四	一〇・四五	一八・九一	一七・八六	二八・〇七	二二・八八	四・三六	五・六八
五五—六〇	一八・八四	二〇・二九	一一・七五	一二・八七	二九・四三	二八・八三	三九・三四	三五・七一	六・二九	八・四六
六〇—六五	一六・三五	一八・九六	一五・三三	二〇・五三	四四・三七	四四・八一	五八・七八	五六・四六	九・五五	一二・八八

六五―七〇	一五・四五	一四・九四	三・三五	三三・六五	七〇・八八	六四・五四	九五・九一	八三・九三	一五・四三	一九・三三
七〇―	一〇・九七	一〇・五九	二六・二九	三二・七四	二〇・七〇	二〇・三五	一八・五・五六	一七・六一	三三・元	三三・八一

死亡原因別統計は明治三十二年以降存する所でありませんが、此處には年齢別の人口比例を算出する必要の爲めに明治三十六年調の年齢別人口及四十一年調の年齢別人口、此二調査を基本として、三十六年を中心としたる五箇年平均年齢別各病死亡率、及四十一年を中心としたる五箇年平均の年齢別各病死亡率を算出し、此二平均死亡率を比較して各病は何れの年齢者を多く侵し何れの年齢者に於て著しき増減を爲したかを觀察しました、即ち是で見ますと下痢腸炎は總數に於て約九%の増加であります、之を各年齢別に見ますと、零歳より五歳迄の幼者に於て最も著く増加して居る、即ち約四四%の増加であります、此増加が總數を動かすに至つたので、此幼者以外には五歳より十歳迄の兒童が僅に増加したるのみで他の總ては減少して居ます、全體胃腸病は老年者に多き死亡原因で幼者よりもより以上に老年者が多く死亡して居る、即ち七十歳以上が最も多く前期は之に次ぐ者は矢張老年者であつたのであるが、後期に於ては最

幼者が第二位と爲つた、若し夫れ少壯なる十歳以上十五歳、十五歳以上二十歳、二十歳以上二十五歳等の年齢者に於ては其死亡數甚だ微少であつて殆ど算ふるに足りません、又前期と後期とを比べますと、此少壯者は何れも後期の方が少ないのを見ては、少なくとも少壯者の死亡率増加には胃腸病が寧ろ反對の働きを爲したことが知られます、此前後期の比較に於ては獨り幼者に於てのみ増多の働きを爲したので幼者と共に此病を重大なる死亡原因とする老年者には其働が見えなかつた、要するに此胃疾患及下痢、腸炎は乳兒及小兒死亡の増加の原因として注目せらるべきものであります。次には腎臟炎を見ます、腎臟炎は總量としても少なく素より胃腸病の比ではない、而して總數に於ては前期と後期との間に後期の増加したること約三〇%で前述の如き特別の事情ありとは言へ仲々に長足の歩武を取つて居ります、之を年齢別と爲すと最幼者に著しく多いのは彼の急性傳染病の續發症として來る腎臟炎が可なり多くあることを示したものでありませう、而して青年壯年に至りては腎臟炎に因りて死亡する者は洵に僅少であります、それ故に此前後期間に各年齢とも總て増加して居ますが其青年

壯年の總死亡率に及ぼす影響は甚だ僅少のものと思はれます、又死亡原因としての腎臓炎は老年者に於て最も重大であつて、日本に於て或る錯誤がある爲めに幼者にも腎臓炎の注意を缺くことは出来ませぬが、少壯者に取りては左まで重大なるものではありませぬ。

次には呼吸器病であります、呼吸器病も亦胃腸病と同じやうに、幼者と老年者とに對して重大なる死亡原因でありまして、此青年壯年の者に餘り重大でない、併ながら胃腸病とは餘程趣きを異にして居ます、其總數に於ては前後期の間約5%の増加であります、五歳までの幼者は約25%増加し茲にも乳兒及小兒の死亡の増多せる大なる原因が認められます、然るに此増加は青年壯年にも亦認められまして十五歳以上二十歳は約一二%二十歳以上二十五歳は約一八%の増であります、それ故に幼者老年者に於て重大なる死亡原因なることは勿論であります、青年壯年に於ても亦全く打捨てて顧みないことの出来ないものと思ひます、其理由は後で申します。

心臓の器質的疾患はどうか、此死亡原因は五十歳前後から重大に働く者でありまして、青年壯年の之が爲めに斃るゝ者は餘り多くはない、其總數の増加は約一四%で各年齢總て増加し殆ど平等的に増多して居ます何れにしても總量の多くないものでありますから是が爲めに總死亡率を動かす程の力は無いと思はれます。

最後に結核性の疾患を見ますと、其總數に於て前期と後期との間に約一四%の増加をして居ますが、既に總量の多いそれだけに其影響は大であります、更にそれを年齢別に見ますと、小兒に於ては結核性腦膜炎が隠れて居るだけ他國に比して多くはなく、又老年者に於ても左までに重大ではありませぬが、青年壯年の十五歳より三十五歳に至る四階級即ち十五歳より二十歳、二十歳より二十五歳、二十五歳より三十歳、三十歳より三十五歳に於て著しく高い、茲に一の山が出来て居る、其高い山を前期と後期と比較しますると、後期の高さこと一〇—二五%でありまして結核性疾患が如何に青年壯年を殘害するかと知れます、既に獨逸の死亡原因の推移を観察したる場合に、其總死亡率の低下の原因として、結核性疾患の減少が最も重大なる働きを爲したといふことが見え、又英吉利の同一觀察に於て殊に青年壯年の死亡率は結核性疾患の

減少に由りて低下したことが確められました、今や日本の事實を見ますといふと總死亡率を支配する最も重大なるものが矢張り結核疾患であることが知れますが英獨に於ては總死亡率を低下せしむべく働きたる、それが日本に於ては反對に總死亡率を高める原因として働いて居るといふことは寔に悲むべき現象と言はねばなりません、何故に日本は今既に歐洲に於ては減少しつつある結核の蔓延を被むりつつあるか、之が原因を探りて防止の策を講ずることは刻下の急務である、即ち其原因探究の順序として次に此現象を青年壯年の男女に別ち就て觀察しやうと思ひます。

第十四 各性少壯年者の五種死亡原因に死亡の前後期比較

更に進んで各性少壯者の前來述べ來れる五種の重要なる死亡原因に因る死亡數の人口一萬比例を三十四年から三十八年の五年平均即ち前期と、三十九年から四十三年の五ヶ年平均即ち後期とを比較して見、さうして各性の前期と後期との間に如何の差があるか、又各期の男女の間に如何の差があるかを見ようと思ひます。

各性少壯者の五種死亡原因に因る死亡の人口一萬比例

其前後期比較及其各性比較

患疾的質器の臓心	前期(三四—三八年)		後期(三九—四三年)		前期に對する 後期の高(低)	
	男	女	男	女	男	女
胃の患疾及下痢腸炎	51.10	6.21	7.77	5.98	15.1	10.1
	101.15	2.53	3.86	2.36	10.1	10.1
	15.20	3.70	5.61	3.59	10.1	10.1
	20.25	4.45	7.18	3.86	10.1	10.1
	25.30	5.11	7.85	4.53	10.1	10.1
	30.35	6.21	9.16	5.34	10.1	10.1
	35.40	7.93	10.14	7.77	10.1	10.1
心臓の患疾	5.10	1.10	1.33	1.00	10.1	10.1
	10.15	1.33	1.98	1.66	10.1	10.1
	15.20	1.48	2.81	2.28	10.1	10.1
	20.25	2.08	3.59	2.27	10.1	10.1
	25.30	2.31	3.93	2.46	10.1	10.1
	30.35	2.97	4.55	3.08	10.1	10.1
	35.40	3.77	5.34	3.77	10.1	10.1

腎		臟		炎		呼吸器		病		結核	
五・一〇	二・三九	二・二四	一・〇・五	二・四九	二・九〇	〇・四一	〇・一〇	〇・六六	一〇・一五	〇・九八	一・三三
一〇・一五	〇・九八	一・三三	〇・三三	一・一六	一・六五	〇・四九	〇・一八	〇・三三	一五・二〇	〇・九六	一・〇七
一五・二〇	〇・九六	一・三〇	〇・三三	一・二〇	一・六七	〇・四七	〇・二二	〇・三七	二〇・二五	〇・九六	一・八一
二〇・二五	〇・九六	一・八一	〇・八五	一・二六	二・二九	一・〇一	〇・三三	〇・四八	二五・三〇	一・〇七	二・〇三
二五・三〇	一・〇七	二・〇三	〇・九六	一・四〇	二・六三	一・二三	〇・三三	〇・六〇	三〇・三五	一・〇七	二・〇三
三〇・三五	一・三二	二・四五	一・一四	一・六〇	二・九三	一・三三	〇・二九	〇・四九	三五・四〇	一・三二	二・六三
三五・四〇	一・六三	二・六七	一・〇四	二・二四	三・六五	一・五一	〇・五一	〇・九八	五・一一〇	一・六三	三・二二
五・一一〇	六・二二	七・四七	一・三五	六・六二	八・三三	一・七一	〇・四〇	〇・八五	一〇・一五	二・八六	四・八二
一〇・一五	二・八六	四・八九	二・〇三	二・九九	五・二九	二・三〇	〇・一三	〇・四〇	一五・二〇	五・五七	八・五六
一五・二〇	五・五七	八・五六	二・九九	五・八〇	一〇・一〇	四・三〇	〇・三三	一・五四	二〇・二五	五・八七	九・五一
二〇・二五	五・八七	九・五一	八・一〇	一〇・〇五	一〇・〇五	一・九五	二・二三	〇・五四	二五・三〇	六・三一	八・四七
三〇・三五	六・三一	八・四七	六・六五	八・七三	八・七三	二・〇八	〇・三三	〇・二六	三五・四〇	六・六五	八・二二
三五・四〇	七・六〇	八・二二	六・四三	八・二一	八・二一	一・六九	一・〇・三三	一・〇・一〇	五・一一〇	七・六〇	七・九八
五・一一〇	五・二三	七・四三	七・六九	七・六九	八・四七	〇・七八	〇・〇九	一・〇・七九	一〇・一五	五・九二	七・四三
一〇・一五	五・九二	一・五・五三	六・九七	一・八・九九	九・二七	三・三五	〇・七九	一・八・四	一五・二〇	一・五・五三	七・四三
一五・二〇	二・八二	三・四五	二・五六	二・五六	三・五六	二・四三	一・八五	三・二六	二二・八二	二・八二	三・四五
二二・八二	三・四五	四・三三	一・三・六五	二・五・六六	四・三・三五	一・七・六九	三・八・四	八・七〇	三五・四〇	三・四五	四・三三

性		疾		患	
二〇・二五	二六・六四	三三・九七	〇・六・三三	三六・一八	四三・四六
二五・三〇	三三・九五	三九・九二	〇・五・九七	二八・三三	三五・二二
三〇・三五	二二・三四	二四・〇八	二・八・四	二・四・〇	二・七・〇二
三五・四〇	一八・二九	一九・四〇	一・一一一	二〇・四	二・三・五六

之を先づ胃の疾患及下痢腸炎から見ます、即ち前五年と後五年との前後各期の平均に於て、今観察することを重要としたる青年壯年の胃疾患及下痢腸炎死者を比較觀察するに、前期に於ては男は最高七・九三最低二・五三、女は最高一〇・一四最低三・八六で總てに於て女の率が高い併ながら其差の最大なるが二・九五で最少なるは一・一六であるから甚しい懸隔はない、又後期に於ても男は最高七・二七最低二・三八女は最高九・七八最低三・九五で是亦總てに於て女の率が高いが其差の最大は三・一〇最少一・二七で略ぼ前期に同じく餘りに甚しくはありません、而して男の率の前期と後期とを比較すると總てに於て後期は低く最大の懸隔なる三〇―三五歳は〇・八二を示し女の率も亦同様にして一〇―一五歳のみ後期が僅に高いが其他は總て前期が高い、其最大なる懸隔は三〇―三五歳であつて〇・九八の差があります、それ故に乳兒及小兒死亡の問

題に對しては最も重要な此胃疾患及下痢腸炎も今の青年壯年の多死の問題に對しては餘り重要でない、殊に前期より後期の少ないに依りて然りである、併し是は後に申べきことをござりますが、胃疾患及下痢腸炎で死亡する者が、男よりも女に多いといふことは、頗る注意して頂く値があるのであります、歐羅巴各國の統計を見ますと、此下痢、腸炎等で死亡致しまする者は男の比例が高く女は男よりも低きを常とする、然るに日本に於ては此胃腸病で死亡する者が女に多くて男は比較的少ない、それが何故であるかを知らねばなりません、それから次に心臓の器質的疾患を見ます、是も中年の死亡者の増加する原因としては影響が少ない様であります、其男女の比例を比較して見ますと男の比例に對する女の比例が何れも高い、それは前期に於ても後期に於ても同様でありまして二十歳以上の各年齢級に於ては前期よりも後期が女の高い割合が増加して居ます、而して男又は女の前期と後期とを比較しますと共に僅かではあるが後期の方が前期よりも高い、殊に面白いことは其前期よりも後期の高い割合が男に於ては青年に著しくして壯年は左ほどでないのに、女に於ては其反對に壯年に著

しくして青年は男ほどでもないことあります、何故に斯様の變つた現象があるか、今それを解説することは出来ませぬか、懸て注意を要する一事項かと思ひます、兎に角今知られて居る所では日本の青年壯年の死因としての心臓病は男よりも女に幾分か多い而して男女別々の年齢に於て強弱があつて多少づゝ増加の傾向はあるが、併し夫あるが故に青年壯年の死亡率が高まるといふ程著しい原因ではないといふことである、又腎臓炎を見ましても是亦青年壯年の死亡原因としては甚だ重大のものではない、前期は男女共に、各年齢者の腎臓炎死亡は心臓器質的疾患死亡の約半數であります、併し十歳未満者は男女共に腎臓炎の方が心臓器質的疾患の倍もある、後期も男は略ぼ前期と相似たる形勢であるが、女は二十五歳以下が著しく高くなつて前期と餘程趣きの異なつたものが見ゆる、それから男女の關係を見ますと、前期の五—一〇歳の外は總てに於て前期も後期も女が多い男女の腎臓炎死亡が此青年壯年に於ては甚だ重大ではないが、男よりも女の方が高い、而して其女の高い割合が前期よりも後期が高い、それから男女の前期と後期との比較は甚だ僅かでありませんが、何づれも後期が増加し

て居まして而も其増加は女の方が男の多くなつた割合よりも其割合が高くなりました、而して此變態の原因を探りますと、臆げながら事實が知れるやうであります、それは日本の醫師の申告を見ますと、先刻の小兒の腎臓炎の場合に急性傳染病の續發症たる腎臓炎を、單に腎臓炎として報告する者が多いと云ふことを申しましたが、女の場合に於てもそれと相似たことがあるやうであります、其事は前にも述べましたから再び詳述することを避けませんが、妊娠の末期に來る所謂妊娠腎臓炎、或は妊娠の蛋白尿等がありました場合に日本の醫師の申告は單に腎臓炎としてのみ申告せられることが多くてそれが妊娠に因するや否やの別が記されてない、それ故に之を取扱ふ者は普通腎臓炎の項に編入して居ます、それが壯年の女に腎臓炎の多い、即ち男よりも多い所以でないかと思ひます。次に呼吸器病を見ます、呼吸器病は此場合に心臓の器質的疾患や腎臓炎に於けるよりも注意して見なければならぬと思ひます、此青年壯年の年齢者の呼吸器疾患を見ますと、男よりも皆女が高い、呼吸器病全體から言ふと男の方が高い、それは前にも申ました通りどの年に於ても、男が高くて低い、然るに青年壯

年を見ますと、どの年齢を見ましても皆男よりも女の方が高いさうして其高い割合は腎臓炎や心臓病の比でなくして胃腸病と略ぼ同じく或る年齢者は寧ろそれよりも強いのであります、又前期と後期とを比べますと男女共に後期が高くて女が男を超過する割合も二十歳までは後期が強いのであります、さて此現象が何に因するか、それを呼吸器疾患だけで見ても進で結核性疾患を見て再び呼吸器病を見ますと思ひ半ばに過ぐるものがあります、即ち結核性疾患を見ます、是亦どの年齢者を見ましても皆女が高い、全體としても矢張り女が高かつたのであります、此青年壯年者に於ては殊に著るしく女が高い、男に對する女の割合を見ると前期の一五—二〇歳では最高較差が一三・一五である後期は更に一層男を超過して女の結核性疾患死亡が高い、其最高較差は矢張一五—二〇歳で一七・六九だけ女が高くなりて居る、然るに結核性疾患は甚だ人の嫌疑する病でありますから若し結核性疾患で死亡した者があつても、夫を正直に結核で死亡したと醫師が死亡診斷書に書くことを遠慮する場所があるらしい、其場合に如何なる病名が記載されるか、それは分りませぬがどうも人間は斯かる際に

餘り飛び離れた嘘の言へないものと見えまして、肺結核で死亡した者があつた場合に、肺結核と書くことを遠慮すると、多くは慢性氣管支炎とか肋膜炎とか稍近い器官の病名を書くものらしい、要するに夫は人の心理上の興味ある點で虚言が良心に牽制せられた状態とも申しませうか、それに就て可笑しい一例があります、今は故人になられた某醫學博士の提出せられた死亡診断に急性腹膜炎？と書いたのがあつて其疑問標が變だといふことで警察の醫師が實地に就て調べました所が其死者は卵巣か子宮の疾患で腹壁切開を行ふた其結果がマヅクて腹膜炎を發したのであつたさうでした、疾病の分類の技術から言へば斯の如きは其腹壁切開を行ふに至つた疾患を取らねばならぬのでありますが、まさかに其専門の大家が有りのまゝに書き兼て急性腹膜炎とは書いたが、茲で良心に牽制せられて疑問標を附したのと思はれます、兎に角死亡原因の記載に故意の誤記あることは東西同様であると思えます、今は過去の事實であります、ブタペストのキヨロジイと云ふ有名なる統計家、是は皆様御承知の通り近年物故された人ではありますが、其存生中は随分ブタペスト市に對して非常なる働を致されま

した、ブダペストの死亡が減少したのはキヨロジイの献策に出たのであるキヨロジイはブダペストの恩人であると言はれて居ります、此キヨロジイがブダペストに於ける醫師の死亡診断書の甚だ正確ならざるものあるを慨嘆し、之を二た通り提出せしむることを献策したことがあります、それは何故かと云ふと、醫師が例へば結核と申告す可きものを誤れる俛心からか若くは爲めにする所ある惡意からか、之を結核と因に溯りて矯めねばならぬ即ち從來死者の遺族に與へる死亡診断書が其儘市に於て統計の材料に用ゐられる、それが間違の來る原因であるからといふことで醫師の死亡診断書を二た通りに書かせる、其一通りは死者の遺族に與へるのでそれには死亡原因の病名は何んとでも適宜に書いて差支ない、其外にモウ一通の死亡報告を直接に市役所に提出させる、それは死亡者の氏名も住所も書くに及ばぬけれども、死亡の原因だけは明瞭に、主治醫の信ずるところを有のまゝ書いて出せと斯う云ふことを極めたことがある、以て彼の國の事態が推察せられます、今日も猶ほ此規定が繼續して行はれて

居るかどうかは知りませぬが、日本などでも無論故意の誤記があるものと考へなければならぬ、さう考へまして結核性疾患死亡の男女の比較を見、さうして呼吸器病死亡の男女の比較を見ますと、唯大小こそあれ全然結核と呼吸器病とが同様であることが知れます、就中男の前期と後期との關係並に女の前期と後期との關係を見ますと唯呼吸器病が小さいだけで其形は結核と同一であります、それ故に呼吸器病死亡の中には結核死亡と同一のものが含まれて居る、換言すれば何程かの核結性疾患死亡が名を呼吸器病の如く呼ばれて茲に隠れ居るのでありはせぬかと思ふのであります、斯うして見ますと、唯今挙げた此五病の中にも、段々詮索して參りますと青年壯年の死亡率を高める死亡原因としては何れも多少の働きはあるが其多くは甚だ弱い唯一つ強く働くものは結核性疾患である、されば結核性疾患のみが最も注意を要するものゝ如くに思はれるのであります、そこで結核性疾患が如何なる状態に日本にあるかと云ふことを是から少しく見ようと思ひます。

第十五 日英各性年齢別肺結核死亡率比較

結核性疾患死亡を細觀するのに先づ日本全國の肺結核死亡を此處に挙げます而して之と比較する爲めに英虞蘭威爾斯の同一の事實を見る、それから大都會の狀勢を示す爲めに東京市と大阪市の事實を挙げ夫に比する爲めに倫敦の事實を挙げます、右はいづれも各年齢階級の人口一萬に對する比例でありまして、日本の事實は明治三十九年から同四十三年に至る五ヶ年の平均でありまして英國の事實は一千九百十二年と十三年との平均であります。

日英各性年齢別肺結核死亡比較 (人口一萬比例)

年 齡 別	日 本				英 虞 蘭 威 爾 斯			
	全 國	東 京 市	大 阪 市	全 國	倫 敦	全 國	倫 敦	
總 死 亡 數	男 一五・二	女 一六・五	男 三・七	女 四・二	男 二四・七	女 三六・六	男 一・七	女 八・四
一五—二〇	男 三〇・四	女 三三・一	男 四八・五	女 六三・七	男 三三・九	女 五七・三	男 六・八	女 九・六
二〇—二五	男 三〇・四	女 三三・一	男 四八・五	女 六三・七	男 三三・九	女 五七・三	男 六・八	女 九・六
二五—三〇	男 三〇・四	女 三三・一	男 四八・五	女 六三・七	男 三三・九	女 五七・三	男 六・八	女 九・六
三〇—三五	男 三〇・四	女 三三・一	男 四八・五	女 六三・七	男 三三・九	女 五七・三	男 六・八	女 九・六
三五—四〇	男 三〇・四	女 三三・一	男 四八・五	女 六三・七	男 三三・九	女 五七・三	男 六・八	女 九・六
四〇—四五	男 三〇・四	女 三三・一	男 四八・五	女 六三・七	男 三三・九	女 五七・三	男 六・八	女 九・六
四五—五〇	男 三〇・四	女 三三・一	男 四八・五	女 六三・七	男 三三・九	女 五七・三	男 六・八	女 九・六
五〇—五五	男 三〇・四	女 三三・一	男 四八・五	女 六三・七	男 三三・九	女 五七・三	男 六・八	女 九・六
五五—六〇	男 三〇・四	女 三三・一	男 四八・五	女 六三・七	男 三三・九	女 五七・三	男 六・八	女 九・六
六〇—六五	男 三〇・四	女 三三・一	男 四八・五	女 六三・七	男 三三・九	女 五七・三	男 六・八	女 九・六
六五—七〇	男 三〇・四	女 三三・一	男 四八・五	女 六三・七	男 三三・九	女 五七・三	男 六・八	女 九・六
七〇—七五	男 三〇・四	女 三三・一	男 四八・五	女 六三・七	男 三三・九	女 五七・三	男 六・八	女 九・六
七五—八〇	男 三〇・四	女 三三・一	男 四八・五	女 六三・七	男 三三・九	女 五七・三	男 六・八	女 九・六
八〇—八五	男 三〇・四	女 三三・一	男 四八・五	女 六三・七	男 三三・九	女 五七・三	男 六・八	女 九・六
八五—九〇	男 三〇・四	女 三三・一	男 四八・五	女 六三・七	男 三三・九	女 五七・三	男 六・八	女 九・六
九〇—九五	男 三〇・四	女 三三・一	男 四八・五	女 六三・七	男 三三・九	女 五七・三	男 六・八	女 九・六
九五—一〇〇	男 三〇・四	女 三三・一	男 四八・五	女 六三・七	男 三三・九	女 五七・三	男 六・八	女 九・六

二〇—二五	三〇・四	三〇・七	五三・〇	五七・八	三二・〇	五四・八	一一・八	一一・五	一五・〇	九・五
二五—三〇	二四・五	二八・七	四〇・三	五五・九	二三・六	四六・二	一四・八	一一・一	一八・三	九・九
三〇—三五	一九・〇	二二・九	三八・〇	四六・〇	二〇・三	三六・四	一七・八	一一・七	二四・〇	一一・九
三五—四〇	一八・〇	一八・三	三六・七	三五・五	二〇・八	三三・三	一九・九	一一・〇	二九・〇	一一・四
四〇—四五	一七・六	一五・二	四三・九	三三・九	二四・五	二九・七	二二・五	一一・一	二四・八	一一・七
四五—五〇	二〇・〇	一四・八	五〇・九	三三・四	三三・六	三三・四	三三・七	一一・二	三六・八	一六・一
五〇—五五	二二・〇	一四・三	六六・八	三八・三	四二・〇	三三・八	三三・五	九・八	三七・〇	一五・〇
五五—六〇	二二・一	一三・二	七三・四	四〇・六	五六・八	三四・五	二二・八	九・三	三八・二	一一・八
六〇—六五	二〇・七	一一・三	六三・三	三三・一	五一・二	二四・〇	三〇・一	八・七	三六・三	一一・二
六五—七〇	一七・四	八・六	五八・五	二九・二	三九・五	二二・三	一五・一	六・九	三三・一	一一・五
七〇—七五	一四・五	七・四	四四・三	二四・一	三三・四	一四・八	九・八	五・五	一八・九	九・七
七五—	八・三	五・六	二四・三	一五・七	一九・九	一三・三	—	—	—	—
七五—八〇	—	—	—	—	—	—	五・七	三・八	一三・六	六・五
八〇—八五	—	—	—	—	—	—	四・一	二・九	一八・七	五・〇
八五—	—	—	—	—	—	—	二・四	二・〇	二・二	三・六

此比較は一見して明瞭であります、即ち日本全國に就て肺結核死亡を見ますると男

は零歳より五歳の幼弱階級に於ては略ぼ女と同高にして僅に高く、五歳から十歳の階級では女は前階級と同高であるが男は其半ばに足らぬ、此階級が結核死の最も少い階級である、十歳以上十五歳の階級でも男は増高せず僅に前階級より高いのみであるが、女は著しく増高し前階級の三倍弱になつた、次の十五歳より二十歳の階級は男女共に著しき肺結核死亡があつて殊に女に高く、二十歳より二十五歳は男も高くなりて最高點を現じ女は前階級と略ぼ同高にして是亦此階級を最高と爲す、二十五歳より三十歳になると男女共に下降するが併し女は下降の度が尠ない、それから女は漸次其比例を低くめて高年は高年ほど低くなるが、男は四十歳から四十五歳の階級まで結核死亡減少し四十五歳から増高して又五十五歳以上六十歳で小山頂が出来る、之に由つて見ると、日本の肺結核死亡者は男女共に少壯者に著しく多く殊に女に多きものあり、女は爾來年の長ずるに従て減少するのみなれども男は少壯者に於て女ほどに高くないと共に老年に及びて又増高して山を築く、此點に於て男女の肺結核死亡に相違する所が見出されるのであります、其異點は別として兎に角日本の此状態は果して肺結核死亡

の常態であるか如何、肺結核が性と年齢との關係に於て斯様な死に方をするのが當然であるか如何と云ふことを更に進んで觀察しなければならぬ、そこで比較對照の爲めに、英吉利及獨逸の結核死亡數を列擧しやうと思ひます、茲には づ前記の如く英吉利の事實を擧げました、何故英吉利の事實を比較の料に供したかと云ふと夫には多少の理由があります、皆様御承知のコツホ氏の高弟で結核の研究家として名高いコルネットと云ふ人があります、其コルネット氏が結核と年齢との關係を論述したものに斯う云ふことを言つて居る、世人は往々にして結核は少壯者に多いと云ふが少壯者は全體に其人口が多いのであるから、従つて結核に罹るべき者も多く實際患者も多いのであるが、併し少壯者は結核に罹つても夫れが治癒する場合が多いから死者としては比較的少ない、然るに老年の結核罹病者は其死亡率が高いから、結核死亡者を年齢別と爲し其年齢の人口に比例して見ると、何時でも老年の率が高く少壯者の率が低いと、コルネット氏の此言はプロイセンの事實に依りて證せられて居りますが、而して又英吉利に於ける年齢別の結核死亡の人口比例が殊に頗るよくコルネット氏の理論に適合

して殆ど一の模型的状態を示して居ります、それで英吉利の肺結核死亡の事實を取出して日本との比例の料に供することにしました、即ち總數に於ては男高く女が低い、是が既に日本と反對である、而して女は三十五歳より四十歳といふ階級が山の頂巔を爲し、男は五十歳を中心としたる二階級即ち四十五歳より五十歳、五十歳より五十五歳が最も高い頂上を爲して居る、女の結核死亡が男よりも高いのは唯五歳より二十歳までの三階級に過ぎないので他の總ては男が、女を超過して居ます、此英吉利の事實と日本の状態とを比べると、如何に相違があるか一見して明瞭である、即ち日本の男に於ては三十五歳迄、女に於ては四十五歳迄の少壯者の率が英吉利よりも著しく高い、若し是を切捨てることが出来れば大體に於て英吉利と一致するやうになります、即ち少壯なる者に結核死亡が甚だ多いそれが英吉利と異なる點であつて、所謂コルネットの模型とも大差ある所であります、而して此相違が結核死亡の誠に悲むべき特徴であると言はねばなりません、殊に此相違は、都會を見たる場合に於て一層著明になる英吉利の都會に於ける事實と、比較する爲めに倫敦の肺結核死亡數を擧げて見ますと、

一般に率が高くなつただけで大體の形に於て英吉利全國と大差は無い、唯仔細に檢すれば英吉利全國よりも幾らか最高點が後れて來た、即ち男に於ては五十五歳から六十歳の階級、女に於ては四十五歳より五十歳の階級に換りました、それから男の卅五歳より四十歳の階級小高點があるといふだけであります、されば大體に於ては英吉利全國を大きくしたと云ふに止まるのであります、然るにそれに對すべく日本の東京市を見ますと大分違ひがあります、男に於て二十歳より二十五歳女に於て十五歳より二十歳が高いことは全國と同一であります、女はそれより漸次減少して四十五歳より五十歳で谷が出來再び上りて五十五歳より六十歳で小さい山頂を形つくり、是は甚しい相違でありませぬが、男は少壯の山から一旦三十五歳以上四十歳で谷が出來それから著しく上昇して五十五歳以上六十歳即ち女と同年齢に於て非常に高い山を現出するのであります、前掲の日英肺結核死亡は何れも各年齢の人口一萬比例にしてあるであります、其内容の吟味は別としても如何に日本に結核死亡者が多いかと言ふことは是でも知れます、東京は都市として倫敦に比し多くの事柄が優つて居らぬらしい

が、併し唯一の結核死者が多いと云ふことだけは確に倫敦に勝つて居る是が大に誇るに足る所ではないかと思ひます（笑聲起る）次に大阪市を見ますと、略ぼ東京市と違ひがありませぬ、唯少壯なる女が男に比して多い割合が東京市よりも一層著明であります、私は此大阪市の状態が寧ろ東京市のそれよりも日本の大都會の真相に近いものでないかと思ふ、何となれば此東京市の男の老年階級に結核の多いと云ふことに付てはもう一段考慮を要することがあるからであります、それは近頃發見したことであります、東京の此老年階級の男の結核中には、東京市の都會生活が産んだ結核死者で無いものが尠なからず包含されて居るのであります、明治四十一年に東京市が市勢調査を致しました、其結果として職業別年齢別の人口が知れました而して三十九年から統計局の調査で職業別年齢別の各死亡原因別の死亡數が知れて居るのであります、日本の人口調は戸籍に依るのでありますから職業別の人口調へはない、夫故に市勢調査とか區勢調査とかを行つた地以外には職業別人口の信すべきものは分りませぬ、斯様に觀察の基本と爲すべき人口がないのであるから職業と健康との關係の如き

は正面から知ることが出来ぬのであります、然るに、幸に東京市の四十一年の市勢調査がありましたので私どもは誠によい材料を得たことを喜んで居ます、そこで此人口に對し東京市の死亡とを結合して、職業別の死亡率を調べました、それに就て見ると驚く可き事實がありました、それは東京市に於ては農業が非常に高い死亡率であるのであります、農業は全體死亡率の低かる可き筈のものである、それが非常に死亡率が高いといふことは何か理由がなくてはならぬと思ひまして、それを段々調べました先づ各區に分け、各町に分けて見ますと、日本橋の真中にも或は京橋、或は神田區あたりにも農業者の死亡が澤山ある、而して農業の人口があるのかと見ますと、全然農業の人口は無い一人も無い所でも而も農業の死亡者が澤山ある、尤も市勢調査の巡調員が採録したる職業名と、醫師が死亡診断書に記載する職業名とを全然吻合するものと見ることは出来ませぬが、それに於て甚だ可笑しいので、それから段々死亡の場所を調べて見ますと、例へば本郷區元富士町であるとか、或は神田區西紅梅町であるとか、或は芝區白金三光町であるとか中には明に病院名を記したのもありまして要す

るに大病院の所在地、殊に結核性疾患の多く入院する病院の所在地に於ける農業の死亡数が多くあるのであります、それからそれを段々集めて見ますと、東京市の結核死亡の中で殊に男の有業者に於て、東京市在往者でない者が尠ならず包含してあることが知れた、然るに女は地方から疾病に罹りたる爲め病院に入るべく上京する者が餘り多くはありませぬ、其の多くは男でありまして而も其年齢は四十歳以上の者が多い、つまり家の大黒柱が仆れてはならぬといふので費用を吝まらず加養せしむるのでありませう、それ故に四十歳以上の男が全體に大いに尊重されるものであると云ふことが知れましたが、同時に女が甚だ冷遇されることも思はねばならぬと存じます、但し斯様なることは單り日本の統計に限つたことではござりませぬ、何處の國に於てもあることでありませぬ、殊に日本に於ては、都會と郡村との間に、此治療機關の備はつて居ると居らぬとの大差がありますから、從て都會に病を養ひに来る者が澤山あると云ふことが、特に都會の結核死亡を彌が上に多からしむる所以であります、併し此地方からの入院者を取除いても尙ほ東京市の結核死亡が倫敦に優つて居ることだ

けは確かでありますから、是は御安心なさつても差支ない（笑聲起る）斯様な状態になつて居ります、そこでコルネット氏は少壯者の結核死亡率は實際に於て老年のそれよりも高いものでないと斯ういふことを言つて居ります、又模型的とも稱せられる英吉利の事實もそれを示して居るのであります、然らば結核は少壯者が罹るのが本來の性であるか、或は老年が多く侵されるのが本來の性であるかと云ふことを、もう一歩進んで確めて見なければ安心の出来ないことであらうかと思ひます、即ち日本に於ける結核が其状勢から見ても歐羅巴に於けるそれと餘り違つたものではないのか、或は日本に於ける事實が大變悪い徴候であるのかと云ふことは、それを研究し得たところであらうかと思ひます、そこで結核死亡の年齢別比較を今一段進めて見やうと思ひます。

第十六 日、英、獨、普年齢別結核死亡率比較

先づ第一に英吉利の事實を比べます、唯今掲げた結核の数は、肺結核死亡のみであります、今度は結核性疾患全體の年齢別死亡数を人口一萬比例と爲し比較しやうと思ひます。

思ひます。

日英年齢別結核死亡率比較（人口一萬比例）

年齢別	日本(明治三九年)		英吉利(一九二二年)		英吉利の百に對する日本の率の指數		日本の率の百に對する英吉利の率の指數	
	總數	二〇・九三	一三・六六	一五三・一五	六五・三〇			
〇—五歳	一四・〇〇	一八・二二	七六・八四	一三〇・一五				
五—一〇	七・五七	五・五〇	一三七・六四	七二・六六				
一〇—一五	一二・九一	五・四一	二三八・六三	四一・九一				
一五—二〇	三四・三六	一〇・七九	三一八・四四	三一・四〇				
二〇—二五	三四・七八	一四・一三	二八一・五三	三五・六一				
二五—三〇	三一・七五	一五・二八	二〇七・七九	四八・一二				
三〇—三五	二四・一六	一六・八二	一四三・六四	六九・六二				
三五—四〇	二一・三二	一八・一三	一一七・五九	八五・〇四				
四〇—四五	一九・一三	一八・一四	一〇五・四六	九三・八三				
四五—五〇	一九・九四	一八・六一	一〇七・一五	九三・三三				
五〇—五五	二〇・三一	一七・一三	一一八・五六	八四・三四				

五五—六〇	二〇・二九	一七・〇五	一一九・〇〇	八四・〇八
六〇—六五	一八・三九	一五・九五	一一五・三〇	八六・七三
六五—七〇	一四・九四	一二・二五	一一一・九六	八二・〇〇
七〇—七五	一二・六八	九・〇四	一四〇・二七	七一・二九
七五—八〇	九・八五	六・四二	一五三・四三	六五・一八
八〇—八五	七・一七	四・一七	一七一・九四	五八・一六
八五—	七・三七	三・〇八	二三九・二九	四一・七九

そこで先づ英吉利に於ける近い千九百十二年の事實と日本の近い五年平均とを比較して見ます、其比較を適切にする爲めに日本の率に對する英吉利の指數とそれから英吉利の率に對する日本の率の指數とを添へて置きました、第一總數に於て日本の率の十五割三分餘の高さで、英吉利の率は日本の率の六割五分餘しかない、然るに零歳より五歳までに於ては日本の率が英吉利の率よりも遙に低く其七割七分弱に當り、英吉利の率は大に高くて日本の率の十三割餘に當ります、是は寔に奇觀でありますが併し明かなる理由のあることであります、先づ英吉利の結核總死亡を概観しますと、零歳より五歳と云ふところで一時高率がありまして、それから五歳から十歳で非常に低く

なり、十歳から十五歳で又少しく低くなりそれから段々高くなりまして、四十歳より四十五歳で零歳より五歳と略ぼ同位になり、次の四十五歳より五十歳で又少しく上りて最高點に達し、それから段々下つて八十歳以上の高齢者は十歳より十五歳の低率よりも又低くなつて居ります、然るに日本の結核死亡を見ますと、零歳より五歳では前述の如く英吉利より少なく、五歳より十歳以上は英吉利より總て高いが、併し日本の率としては五歳より十歳が非常に低く次の十歳より十五歳でずつと高くなり、英吉利の率と離ること大で其三十四割に近い高さになり十五歳より二十歳に又非常の増加を爲し、茲で英吉利の率と離ること最も大で約三十二割に達し、それから二十歳より二十五歳で又少しく上りて最高點に達し、英吉利の率の二十八割と爲り、夫から低くなつて、四十歳から四十五歳で英吉利の率に接近して一の低點を現し、それから又離れて上り五十歳より五十五歳で小山頂を形成し、再び英吉利の率と大なる懸隔を爲すやうになつてあります、そこで何故に零歳より五歳までの日本の結核死亡が英吉利よりも低いか其理由を申しませう、先刻腦神経系の疾患は眞面目に見ることが出来な

いと云ふことを申しましたが、其脳神経系の疾患中に、小児の脳膜炎といふものがある、其脳膜炎中には幾多の脳膜炎以外の疾患死者が包含せられて居ると見なければならぬ。而して結核性の脳膜炎も亦少なからず此中に包含されて居るらしいのであります、醫師の死亡診断書に脳膜炎と記載したるものは、縦しや結核性脳膜炎の死亡者でも、其結核性たる記載のない以上は之を單純腦膜炎として取扱はなければならぬ、然るに日本の此脳膜炎死亡は歐洲に比類なき多數で而して結核性脳膜炎が非常に少ないのを以て見て結核性脳膜炎が單純腦膜炎として取扱はれて居ることを思はれます、それ故に英吉利の事實に比ばして少ないのが當然である、試に英吉利の事實を見ると單純腦膜炎死亡は人口一萬に付一・一九しかないのに日本は其率が一三・八である、英吉利の結核性脳膜炎は總結核の一〇・一六%であるのに日本は五・四四%である英吉利の約半數しか現はれてない、又五歳未満の總結核死亡に對する結核性脳膜炎死亡は英吉利が一五・五八%で日本が八・二二%であるから茲で約半分は隠れて居るものと思はれる、此影響が、上記の率となりて現はれたのであらうと思ひます、併し

五歳から以上になると、全體に日本の率が高い、それは前に述べました、即ち以上の比較に依りますと、結局日本に於ては少壯者に結核死亡が非常に多いそれは英吉利の二倍乃至三倍である、初老頃には英吉利と接近して來るが老年に至ると又英吉利より日本の結核死亡が多くなると云ふことになるのであります、次に之を獨逸の事實に比較します。

日、獨年齡別結核死亡率比較 (人口一萬比例)

年 齡 別	日 本 (明治三九 —四三年)	獨 逸 (一九一〇 —一一年)	獨逸の率の百に對する 日本の率の指數	日本の率の百に對する 獨逸の率の指數
總 數	二〇・九三	一五・七八	一三二・五七	七五・四三
〇—一歳	二〇・八二	二四・二四	八五・八九	一一六・四三
一—一五	一一・〇〇	六・六一	一六六・四一	六〇・〇九
一五—三〇	三五・八二	一八・二七	一九六・一一	五〇・九九
三〇—六〇	二二・五一	二一・三九	一〇五・二四	九五・〇一
六〇—七〇	一九・六七	二四・八〇	七九・三一	一二六・〇八
七〇—	一〇・五五	一五・五三	六七・九三	一四七・二〇

私の有して居る獨逸帝國の事實は餘り年齢を細別したものでありませんでした、其粗い年齢別の材料で見ますと、是も亦英吉利に於けるが如く、一歳未満の幼者は日本のよりも獨逸が高い、是は英吉利の場合に唯今申ました、結核性腦膜炎を日本に於て大部分逸して居るからであらうと思ひます。それから一歳より十五歳の年齢者になると日本が餘程高くなります、十五歳より三十歳に於ては日本の高いこと殆ど獨逸に倍します、三十歳より六十歳に於てもまだ獨逸より高い、尤も大に接近して居ります、六十歳より七十歳の老若並に七十歳以上の高年者は獨逸が高い、斯う云ふ譯であります、さうして之を數量的に申しますと、總數では獨逸の率は日本の七割五分餘で、日本の率は獨逸の十三割三分弱でありますから、英吉利ほどの差はないが随分日本が高い、イヤ獨逸よりも結核で死亡するものが全體に於て高い、而して之を年齢別に見ると壯年以下の者に於て、日本の率が著しく高い、然るに老年になると獨逸の結核死亡率が日本の率より高くなる、さて前に比較したる英吉利に於ては少壯者に於て、日本が高く老年に於ても亦日本が高かつたのに、今獨逸と比較すると少壯者は英吉利と同

様であるのに老年者は英吉利と全く異なるのは何故であらう、是は注目すべき點である、併し前の二表で見ますと、英吉利に比しては二に對する三、即ち五割以上も多い、獨逸に對しては三割三分も日本が結核死亡の多いのでありますから、全體としても随分隔りのある筈である、されば一寸見ると此間隔の大なる獨逸、英吉利と比して何程の違いがあつたからと云ふても、夫は標準になり兼ねるやうにも思ひます、そこで日本の現在と略ほ同じ位の結核死亡率の邦國がないかと詮索しましたが、現代に於ては見出し兼ねました、乃で既往の事實を詮索しますと、千八百九十六年から千九百年までのプロイセンに於ける結核死亡率の平均が、恰も日本と略ほ等位でありました、即ち日本の率の百に對する其當時のプロイセンの率が百一餘で、プロイセンの率の百に對する日本の率は九十九と云ふ割合になりました、殆ど等位と言つても宜い、それを年齢別と爲し比較すると斯う云ふものが出来ました。

日、普年齢別結核死亡率比較（人口一萬比例）

日本（明治三九）
（一八九六年）
（一九〇〇年）

普の率の百に對する日本の率の指數
日本の率の百に對する普の率の指數

年齢別	そのおもかげ	二六二
總數	二〇・九二	二二・二
〇―一歳	二〇・八二	二二・〇
一―二	一六・五一	一六・六
二―三	一三・六〇	九・〇
三―五	九・九八	六・〇
五―一〇	七・五七	四・四
一〇―一五	一二・九一	六・五
一五―二〇	三四・三六	一五・四
二〇―二五	三九・七八	二四・三
二五―三〇	三一・七五	二五・〇
三〇―四〇	二二・九二	二七・六
四〇―五〇	一九・四八	三二・二
五〇―六〇	二〇・三〇	三八・一
六〇―七〇	一六・九六	四八・七
七〇―八〇	一一・五五	三〇・〇
八〇―	七・二五	一四・三
		九八・七三
		一〇一・三四
		九〇・五二
		九九・四六
		一五一・七八
		一六六・三三
		一七二・〇五
		一九八・六二
		二二三・一三
		一五八・一五
		一二七・〇〇
		八三・〇七
		六〇・三一
		五二・二九
		三四・八三
		三八・五〇
		二五九・七四
		五〇・七〇
		一九七・二七

零歳より一歳の幼者は例に依りて日本の率よりも普國の率が高い、次の一歳より二歳の幼者は略ぼ等位であるがホンの僅かだけ普國が高い、これで結核性脳膜炎は殊に一歳未満者を逸することが知られる、二歳以上は日本の率が高く十五歳より二十歳の階級に於て普國を越ゆること最も甚しく二十二割餘となり、夫から下りて普國に近づき二十五歳より三十歳を終りと爲し次の三十歳より四十歳は普國の方が高くなつて、六十歳より七十歳の高年者に於ては日本の二十九割と云ふ高率を示して居ります、是で見ますと、少壯者は日本の率が全體に於て高いが、三十歳より以上の年齢になると普國が高いことになり、乃で此三つの比較を沿革的の階段あるものとして觀察すると、三者を通して意義が徹底すると思ひます、即ち歐洲に於ける結核は漸次減退する、それを今見た三國の結核死亡率に當て箴めて言ふと英吉利が最近的で獨逸はそれよりも古く普魯西は更に古い有様を示したものと見ることも出来る、そこで一番遠い年の状態と見られる普國に於ては老年の者が結核で死亡することが多かつた、それから次の時代とも見られる獨逸に於ては老年の結核死亡者が餘程少なくなつたが未だ併

し可なりに高い、更に最近の徴象である英吉利に於ては老年の結核死者が一層少なくなりました、是は國を異にしたる材料を混同しての評論でありますから勿論無理ではありませんが、此想像を以てすれば段々現代的になるに従て之を別言すれば結核死亡が段々減少するに従て老年の結核死亡が少なくなる、イヤ老年の結核死亡が少なくなるのが結核死亡の全體を少なくする原因の一であるらしい、然らば結核死亡は老年者に依りて左右せらるゝものかといふと、それはさうではない、結核の消長は主として少壯者にある、結核が盛んに蔓延増加するときには最も強く侵されるものは少壯者である、然るに結核が病勢衰へて減退するときも亦第一に少なくなるものは少壯者であるらしいが其減少が一程度まで行くと今度は老年者が減少して来る、少壯者の減少する状態も今の三國の比較で見ゆることは見ゆるが、それよりも適切な例を次に御覽に入れるから今は論及しない、そこで今の三國の場合はモウ少壯者の盛んに減退する時期を經過して、寧ろ老年の結核死亡の減少が著明に見られる時期であらうかと思ひます、何にして日本の今日とは残念ながら餘程時代が違ふかと思はれます。

第十七 五十年前の英吉利との比較

そこで更に一步溯りまして舊いところの結核死亡を觀察したならば、何か此年齢と結核消長との關係に就て適切な材料を得られないかと考へまして、段々古いものを詮索して見ました、其結果として一の材料を見出しました、それは英虞蘭威爾斯に於ける一千八百五十八年及九年の年齢別總結核死亡數であります、即ちエステルレン氏の著述なる醫學統計論に載せてありました、不幸にして其當時の年齢別人口が一寸得られませんでしたから、此兩年を合せて結核死亡總數に對する年齢別の分節比例を算出しました、それと同時に英虞蘭威爾スの如き四年即ち一千九百十一年から十四年までの結核死亡を同様に處置しました、さうして之を比較しますと約五十六年に隔つた新舊兩比例の間に其推移が知られるのであります、此推移を知りました所へ前來屢申述べた日本の結核死亡の最近五年の年齢別を右と同様なる分節比例に致しまして之を新舊の英吉利の比例と比較しました、而して又此比較は管に總數に於てのみ見ずに、男のみに就て又女のみに就ても見ました即ち左の如くであります。

少の起伏高低はありますが漸次減少して居ます、即ち千八百四十一年に於ては總結核死亡は人口一萬に付約四〇肺結核死亡が同く人口一萬に付て約三六でありました、それが此處に挙げました千八百五十八九年——千八百六十年と假りに致します、千八百六十年を見ますと、人口一萬に付總結核死亡が約三四に減じ肺結核死亡は二五・五に低下して居ります、斯く廿年間に非常の減じ方を爲したる英吉利の結核は一千八百六十年から最近に至る五十餘年間に於て又非常なる減じ方をして居るのであります、即ち一千九百十四年に人口一萬に付總結核が一三・五肺結核が一〇・二に減じました、して見ますと前に掲げた新舊分節比例の解決は前段に申しました若年階級の結核死亡の減じたるが爲めに老年階級が比例上の誤差として高くなつたのであるといふことが確かにになりました、斯く申した所で老年階級も無論減少して居るのであらうが老年の減ずるよりも若い少壯者の結核死亡の減じることが、殊に著しかつた爲めであるといふのであります、新舊の英吉利の事實はさうとしまして、然らば日本の事實はどうかと云ふと、近き日本の事實は前掲の通りであります、即ち零歳より五歳の幼者の階級に

於て日本は斯様に低い、是は先刻から申したやうに、結核性腦膜炎の多くが逸せられて居ると思はるるが故に、斯様に低いものであらうと思ひます、さて斯くの如く一部に非常なる缺點のあるものを直に比較に供することは、大に不倫であるが故に殊に今は幼年の問題でなく、少壯者の問題でありますから、此五歳未満の幼者を全然削り去つて日本も英吉利の新舊も共に五歳以上の結核死亡の合計を取り其合計に對する年齢別分節比例を算出して比較することに致しました。

日英（新、舊）各性五歳以上結核死亡の合計に對する年齢別百分比例

總數	日本(三九一四三年)		英(一八五八年)		吉(一九一四年)		利(一九一四年)	
	新	舊	新	舊	新	舊	新	舊
計	一〇・一五	一五・一五	二五・三五	三五・四五	四四・五五	五五・七五	六五・七五	七五・一
男	六・八九	三三・三七	三三・七三	一一・三三	九・四九	七・四〇	二・七一	〇・七二
女	四・九五	二六・四一	二四・七四	一八・五七	一一・四九	六・一八	二・三五	〇・四四
男	五・二	四・六	一九・二五	三三・三三	三〇・八〇	一五・〇〇	八・八一	三・四九
女	三・八九	四・一〇	三〇・四四	三三・〇九	一一・九〇	九・九三	三・六五	〇・七九
男	五・三六	四・一七	二四・四六	二三・三九	一八・七〇	一三・三三	七・五七	二・七七
女	四・五〇	三・三七	一六・一九	二二・五七	三三・一八	一七・五〇	一〇・五三	三・七三
男	五・二	九・二九	三五・九一	二三・二九	一一・三〇	七・四三	五・二三	一・九〇
女	三・八九	四・一〇	三〇・四四	三三・〇九	一一・九〇	九・九三	三・六五	〇・七九

女	英	吉	利	新	舊
(一八五八)	(一九〇七)	(一九〇七)	(一九〇七)	(一九〇七)	(一九〇七)
四・五九	五・〇五	二六・二六	二六・〇三	一八・四六	九・九四
五・八六	六・四五	三・八八	三三・二九	一九・〇七	二・八六
					六・六五
					三・一九
					〇・七五
					一〇〇・〇〇

斯した所で完全の比較ではない、何となれば五歳以上の結核性脳膜炎も亦大に逸せられて居るものといはねばならぬからであるが、併しそこまでは追究し兼ねますから不完全ながら是で見ます、即ち五十餘年前の英吉利と今日の英吉利との関係は矢張り總數の比例で見たと同じやうに、若い階級が低くなつて居る但し十歳十五歳の階級はホンの僅に低いやうですが、夫を相違といはば言ふだけです、そこで日本と英吉利とを比較します、先づ五十餘年前の英吉利と日本の今日とを比較すると、四段の相違があります乃ち第一段は十歳以下に於て日本より英吉利が少しく高く、十歳以上の二階級は日本が迥に高いのが第二段の相違で、第三段の相違は二十五歳以上の三階級は英吉利が高く、第四段に五十五歳以上が又日本の比例が高くなるのであります、第一段の相違は日本に於て五歳未満者を除外しなければならなかつた其事情が此年齢にも尙残留して居るのでないかと思ふ、又第四段の日本の五十五歳以上の幾分高いのは十五

歳—二十五歳の比例數が非常に高い其比例上の影響が現はれたものと思ふ、然らば英吉利の舊比例と日本との重大なる相違は二十五歳を分界線としてそれより若い年齢者は日本が高く、それより老いた年齢者は英吉利が高いのであります、さて前には新舊の英吉利の比例に於て三十五歳を分界線にして舊比例の若い年齢者が高かつたのであるが、次の此比較では其分界線が二十五歳に變つたゞけで恰も英吉利の舊比例の地位に日本が立つことになりました、それ故に英吉利の舊比例と新比例との差を時の距りに因するとすれば、日本の現状と同一のものは英吉利の一千八百五十八九年よりモット古い時代を想像しなければなりません、次に英吉利の新比例と對照しますと其相違は舊比例に於けるより間隔が大になつたと、分界線が三十五歳に變つたゞけであります、然らば此事實が如何なる結論を産むか、其結論までにはモウ少し論究の要があるのであります但し餘り時間が長くなりますから直に結論を申して見ますと結核は其蔓延すること旺んにして死亡者を多く出す場合には先づ少壯者を侵すとが甚しい、それから老年者も亦多く侵されるやうになる、然るに何等かの防遏手段を施して結核が減少する

場合には少壯者から先きに減少して来て漸次老年者に及ぼすのである、されば日本の現状は英吉利の舊比例よりモット古い時代の状態であつて今や旺んに蔓延増加しつつある時期であらうと思ふ、隠れたる結核がドレ程あるかそれは素より不明であります、近年の最高率は明治四十二年であるが同年の人口一萬に付總結核死亡は二三・八肺結核死亡は一六・六であつて是勿論低率ではないけれども歐洲の既往に比すれば決して驚くほどの高率ではない、而して年齢上に於ける不良状態が英吉利の舊比例上であるといふことは歐洲に於ては疾くに經過し來た、英吉利の一千八百四十年代以前の盛んに蔓延する當時の状態と似通ふたものがあるのではあるまいか、假に英吉利の一千八百四十年代を極期と見れば日本の今日は其極期に入らざる以前の状態で、之に對し何等か防遏の手段が旋らされると結局英吉利の舊比例で見たるが如き状態になるのであるまいか、即ち少壯者は何ほどか減少したが其以上の年齢者は一向減少しない、否寧ろ増加の傾向がある、それから段々防遏を加へらるれば先づ少壯者が大に減少しそれから老年者の減少に及ぼして來る、前に掲げた普魯西の状態になりそれから獨逸の状

態になり、而して遂に英吉利の新比例の状態に到るのではあるまいか、然るに若しも何等の制遏をも加ふることがなかつたならば、限りなく少壯者に蔓延しさては老年者にも其餘力を及ぼし恐るべき状態を來たす者と思はれます、翻て日本の状態を見るに今日に於て一向結核に對して何等の防遏手段も行はれて居らない、近く漸く大都會に於て結核療養所が出來ると云ふことでありますが、其效果の現はれるのは何時頃かは知れませぬが、其他には結核に對して未だ何等の設備も無い、臆ては社會一般に覺醒して何等か著明な働きを見るに至らうと思ひますが、若しも今日の如く設備無しに唯々結核の蔓延するが儘に委して置いたならば、段々少壯者の結核は蔓延し遂には老年者も亦大に侵され、現在に於て獨逸に對しても英吉利に對しても約三倍佛蘭西に對しても倍の少壯者の死亡は一層劇増しかつて、加へて老年者も亦其死亡率を増加するの不祥事を招來することがありますまいか、私は轉た痛心に耐へるのであります。

以上は總數に就て申したので、之を男女に別ち觀察すると又注意すべきことがあります、即ち英吉利の新舊比例を比較すれば其男に於ては二十五歳を分界線として之よ

りも若き年齢者は總て舊比例高く、二十五歳以上は皆新比例が高い、分界線が一階級前に變つたゞけで其状態は總數と異なる所がない、然るに女は夫と同一ではなく五歳未満者は舊比例高く五歳以上は三十五歳を分界線としてそれより若き階級は舊比例高く老いたる階級は新比例が高い、此關係は五歳未満が異例であることと分界線が男より女が一階級遅れるとに注目せられます、然るに此新比例又は舊比例に就て各其男女の關係を見ると舊比例に於ては五歳未満者は先づ男が大に高く、五歳—十歳も男が高い、十歳以上四十五歳までの四階級は女が高く、四十五歳以上は男が高い、之を新比例に見ると十歳以下の二階級は反對に女が高く更に三十五歳まで總て女が高く、三十五歳から男が高くなる、之に由て英吉利の男女の結核死亡が此五十餘年間に如何に推移したるかを察すると、勿論男女共に大に減少はして居るのであるが殊に女は幼者の減少が男の減少したる割合ほどに減少しなかつたらしい、それに引き替へ二十五歳以上になると女の減少は男の減少よりも強かつたものと思はれる、それはドウしてあるかと申しますと英吉利に於ては嘗て肺結核死亡は女に多く結核性腦膜炎死亡は男に多

かつた、一千八百五十八年の年齢別にせざる總數で見ると各性の人口一萬に付男は肺結核二四・六結核性腦膜炎四・三であるのに女は肺結核二七・〇結核性腦膜炎三・〇である、然るに最近一千九百十四年に於ては此比例が變化して肺結核は男一二・〇女八・六結核性腦膜炎男一・四女一・一と爲つた、而して男女の各總結核死亡は一千八百五十八年に於ては人口一萬に付男女同率で三四・〇であつたのが一千九百十四年には男の一五・六に對し女は一一・五に減じた、されば全體としては女は男よりも大に減少したのであるが結核性腦膜炎は男の減じたるほど減ぜざるが故に幼者の比例が減じない、肺結核は女は男の減じたるより遙かに強く減少したるが故に二十五歳以上の減少が男よりも多いのである、此場合に注意したきことは五歳から十五歳の少女に於ける結核死亡の比例が低くならないことであつて、それは恐らく肺結核であらうと想像せらるゝのでありますが、前掲に於ても男より女の率が茲に高かつたのでありまして、それが舊比例の時代より増加したのではあるまいかと思ひますが、他の階級の大に減少するに比して甚だ減ぜざることが注意せらるゝのであります、次に日本の事實を見ます、之

は五歳以下を除外したる比例で見ます、其男女の關係は頗る簡單で三十五歳までは女比例のが總てに高く此分界線から以上になると男の比例が總てに高い、而して之は男の分界線以上が結核に罹かること多きが爲めの現象か、それとも女の分界線以下が多く結核に罹かるが爲めかといふと、それは各性人口に對する比例を比較するに由つて知れる、即ち若しも男の率が高かければ其原因が男にあり、之に反して女の率が高ければ女の少壯者に結核が、多い爲めであると斷じ得られる、唯今も引用しましたから最近の高率なる明治四十二年を見ますと各性人口一萬に對する比例は肺結核男一六・〇女一七・一結核性腦膜炎男一・三女一・三腸結核男一・五女二・六、爾他の結核性疾患男二・四女三・四でありまして總結核は男二一・二女二四・四になります、されば其原因が女に在ることが明かであつて、英吉利の舊比例が新比例と異なる形を現はしたのが女に原因したことに同工であることが知れた、於是乎總數で見たる危虞の念は茲に益強められ、而かも其原因が女にあると言ふに至りて殊に一層の注意を惹かねばならぬことゝなりました。

第十八 各性年齢別死亡率と配偶上の關係

以上餘り結核ばかりを彼れ是れ申上げて居りますとドウも空氣が肺病臭くなりますから、結核のことは先づ其位のことにして止めて置きまして、矢張り歸するところは結核の問題になつて來るかも知れませぬけれども先刻申上げました人口の若い年齢階級の女の死亡率の高いことが、主として何に原因するか、其に就て男よりも女の非常に多く死亡するのは、或は妊娠産が女にあるが故でありはせぬかと云ふことを疑つた學者もあると申しましたが、それをもう一步進んで確めて見ることに必要があると思ひます、近頃餘り多く用ゐられない材料を見ましやう、それは人の配偶上の關係即ち縁事身分とそれから死亡の状態とを結び合はしたものであります、他國には此研究がありませんけれども、日本には是まで殆ど無い、それと云ふものは配偶上の關係に依りて分けました人口が日本に於て甚だ不完全である、即ち有配偶者、無配偶者とのみ分けてあつて、其無配偶者中に未婚者か、鰥寡か、離婚の獨身者かの詳しき細別がしてない、それ故に死亡の數は詳しく分別した事實がありますけれども、人口の詳しいも

の、ありませぬために之を能く観察することが出来ない、それを分らせぬまゝに置くことが残念でありますからして、私は東京市の市勢調査の結果表に依りまして詳しい事實が知れるのを幸としまして、人口は其東京市市勢調査より藉り、市勢調査施行年の明治四十一年を中心と致しました、五年間の東京市の死亡を各性の年齢別及縁事身分別と爲し一年平均を取り、之を右の人口に配して死亡率を作製し此死亡率によつて如何に縁事身分別の男女が死亡するかと云ふことを調べて見ました、縁事身分の關係薄き十五歳未満者は一纏めにしまして細觀しません、縁事身分の關係深き十五歳以上七十歳までを五歳階級に分けまして七十歳以上を一纏めと爲して調べました。

東京市各性縁事身分別及年齢別人口千に付死亡 (明治三十九年—同四十三年平均)

年齢別	總 死 亡		總 數	未婚者	有配偶者	鰥 寡	離婚の獨身者
	女	男					
〇—一五	二九・一四	二九・一五	二九・一四	二九・一五	—	—	—
一五—二五	二二・二九	二二・二九	二二・二九	二二・二九	—	—	—
二五—三〇	一一・六六	一一・六六	一一・六六	一一・六六	—	—	—
三〇—三五	八・六八	八・六八	八・六八	八・六八	—	—	—
三五—四〇	一一・六六	一一・六六	一一・六六	一一・六六	—	—	—
四〇—四五	一一・六六	一一・六六	一一・六六	一一・六六	—	—	—
四五—五〇	一一・六六	一一・六六	一一・六六	一一・六六	—	—	—
五〇—五五	一一・六六	一一・六六	一一・六六	一一・六六	—	—	—
五五—六〇	一一・六六	一一・六六	一一・六六	一一・六六	—	—	—

年齢別	總 死 亡		總 數	未婚者	有配偶者	鰥 寡	離婚の獨身者
	女	男					
〇—一五	二九・一四	二九・一五	二九・一四	二九・一五	—	—	—
一五—二五	二二・二九	二二・二九	二二・二九	二二・二九	—	—	—
二五—三〇	一一・六六	一一・六六	一一・六六	一一・六六	—	—	—
三〇—三五	八・六八	八・六八	八・六八	八・六八	—	—	—
三五—四〇	一一・六六	一一・六六	一一・六六	一一・六六	—	—	—
四〇—四五	一一・六六	一一・六六	一一・六六	一一・六六	—	—	—
四五—五〇	一一・六六	一一・六六	一一・六六	一一・六六	—	—	—
五〇—五五	一一・六六	一一・六六	一一・六六	一一・六六	—	—	—
五五—六〇	一一・六六	一一・六六	一一・六六	一一・六六	—	—	—

一	女	二八・八七	八〇・〇〇	二三・四〇	二六・〇六	三四・五九
二	男	五七・六七	一二五・一〇	四二・四二	六三・三五	五三・〇四
三	女	四一・六八	一一五・九八	三一・八〇	三七・四六	四二・三七
四	男	九〇・三二	一一六・七〇	六四・四八	一〇一・二〇	八五・八六
五	女	六六・五四	一〇七・二二	四七・二九	六〇・七九	五九・六三
六	男	一六一・九一	一〇六・〇〇	一〇三・四六	一八〇・七四	一〇一・四七
七	女	一三四・九三	一九四・三〇	八五・四三	一二二・二九	一一一・〇〇

先づ其總數に就て男女の死亡率を比較しますと、先刻から御覽に入れました日本の各性年齢別死亡率と同じやうに、東京市に於ても十五歳より二十歳と云ふ階級から、四十歳までは總て女の率が高い、それが四十歳より四十五歳で初めて上下顛倒して、夫から女の率が低くなつて來ます、其後の各年齢は女の死亡率が低く男の率が高い、而して此十五歳より四十歳に至る青年壯年の女の死亡率が高い其原因が、恰も妊孕年齢であるだけに若し果して妊娠産が影響して高いのであるとしたならば、それは有配偶者に於て特に著明に高くなつて現はれる筈であります、而して未婚者に於ては餘り高く

ならないであらうと思はれる、勿論未婚者だからとて必ずしも妊娠しないと限つた譯ではありませぬけれども、先づ未婚者の妊娠するのは原則でない、それ故に原則でないものは取り除けまして、未婚者は妊娠しないものと假りに看做します、さうして有配偶者と未婚者とを比べて見ますと、そこに甚しい差違のあることが知れます、若しも有配偶者の女が非常に死亡率の高いものであるならば今の妊娠産の影響があらうと云ふことが考へられますけれども之を總數と比較しても有配偶者は全體に於て總數よりも餘程低い、さうして男女の有配偶者を比較すると、十五歳以上二十歳で一女には十五歳未満もあるが一女が二・六五高い、二十歳以上二十五歳で女が五・四二に高い二十五歳以上三十歳でも女が五・七四高く、三十歳以上三十五歳では女が四・五二高く、三十五歳以上四十歳では女が二・六五高く四十歳以上四十五歳では矢張女が一・四七高く四十五歳以上は總て男の率が高い、それ故に少壯の女は男よりも膨れて居る、所が未婚者を見ますと仲々有配偶者などの及ばざる高率であつて而も其男女の懸隔も有配偶者より大である、即ち十五歳以上三十歳では女の高きこと三・一八、二十歳以上二十五歳は同

じく六・二一、二十五歳以上三十歳は一四・〇五、三十歳以上三十五歳は一六・四一、三十五歳以上四十歳は一四・〇二、四十歳以上四十五歳は一五・四八でありまして是も亦四十五歳以上にも女の率の高いこともあるが概して男の率が高くなります、斯の如くに未婚者の死亡率が非常に高くて、さうして男女の懸隔が著しく大であります、即ち如何に未婚の少壯なる女が多く死亡するかと云ふことが知れる、若しも少壯の女が男よりも死することが妊娠産のみの影響であるとしたならば、有配偶者と未婚者が恰も反對の現象を示さなければならぬ、縦しや死亡率の高低は別としても、此男女の懸隔は未婚者が狭くして有配偶者が廣くなければならぬ、然るに未婚者の男女の懸隔が斯様に廣くなつて居ることを見ますと、此少壯者の現象は唯單純に妊娠産ばかりの影響とは無論言はれない、それから寡婦と鰥夫を見ますと、是は餘程可笑しうございまして、三十歳から既に男の率が高くなつて女の率が早く低くなる、即ち寡婦の方が餘程鰥夫より死に方が少ない又離婚の獨身者を見ますと、矢張此三十歳から男の率が高くなつて女は餘程死に方が少ない、離婚の獨身者、或は寡婦等が女の死に方が少ない

のは何故であるか、或は男よりも女の方が獨身の生活が爲し易いと云ふ關係があるかと思ひます、而して此有配偶者が一番低い、未婚者が非常に高いと云ふことは、未婚者の其獨身なるが爲めに生活に難義であると云ふよりも、未婚者で居らなければならぬ事情其ものが最も重大の關係でないかと思ふ、三十歳以上までも獨身で居らねばならぬ事情の中には蒲柳の質であるとか現に病氣を有つて居るとか言ふことが決して少なくないと思ひます、若しも獨身生活が健康を害するものであるならば寡婦も離婚の獨身者も同様であらねばならぬ筈であるのに一旦婚姻し得たほどの健康者は獨身生活を爲しても却つて男よりも早く死亡率が低くなるのを見ても、未婚で居らねばならぬ事情そのものに深き注意を拂はなければなりません、されば總數の男女の開きは此未婚者が多ければ多いほど大であるかとも思はれます、以上は主として女に就て述べましたが男に於ても見るべき特徴があります、今はそれに論及しません兎に角少壯の男女の死亡率に開きのあることは、唯妊娠産の影響のみであると思つては大なる間違であらうと思ひます、總じて男女ともに有配偶者は他の縁事身分者に比して

最も生活上有利の地位を得て居るらうございます、殊に男に其有利なる程度が強い、併し一朝離婚するか死別して獨身になりますと女やもめに花が咲きまして女が有利の地位に立ちますから女の死亡率が低くなります、一寸としたことですが茲に眞理があるやうに思はれます、併し皆様は何れも有配偶者で入らせられると思ひますから、お幸福のことゝ存じます。(笑聲起る)尙有配偶者の一般に死亡率の低い證左として全國の事實を茲に掲げて置きます、是は無配偶者の總てを混同したものと有配偶者との比較であります、別に説明は要しませんまい。

日本全國各性緣事身分別及年齢別人口千に付死亡 (明治三十九年—同四十年平均)

年齢別	總數		有配偶者		未婚者及寡婦	
	男	女	男	女	男	女
〇—一五歳	二六・二三	二五・三一	—	—	六・〇四	二六・一三
一五—二〇	二〇・三三	一九・五〇	四・二四	七・五三	七・〇四	九・六六
二〇—二五	一〇・九五	一〇・八七	四・七四	八・六六	九・六七	二二・五五
總死亡	二〇・三三	二〇・八八	一七・四九	二二・三四	二二・三三	二五・〇〇

二五—三〇	七・九四	一〇・一九	五・六四	九・八二	一〇・〇六	一二・三九
三〇—三五	七・七七	一〇・〇九	六・一五	九・四四	一〇・三六	一一・七六
三五—四〇	八・八〇	一一・〇三	七・六六	一〇・五九	一一・六一	一二・〇一
四〇—四五	一〇・二五	一一・四五	九・三六	一〇・三三	一一・七〇	一二・四七
四五—五〇	一四・六二	一三・三二	一三・五九	一一・七七	一六・六五	一四・〇四
五〇—五五	一九・二二	一五・一六	一八・一七	一三・七八	二〇・七七	一七・二三
五五—六〇	二七・二六	二〇・八〇	二六・〇〇	一八・六五	二八・四六	二二・一六
六〇—六五	三九・六六	三〇・一五	三七・五一	二五・七四	四〇・三三	三三・〇五
六五—七〇	五六・四八	四四・九二	五三・一九	三六・〇四	五九・三二	四八・三六
七〇—	一一三・〇三	一〇三・七三	一〇〇・八五	六七・三〇	一一八・四六	一一四・〇〇

然らば此少壯男女の死亡率の懸隔ある事實が如何なる原因によりて來るかと思ふことを、もう一步進んで確めなければならぬと思ひます、それを確めます爲めに、私は一種の比較法を案出しました、或は誰か既に行ふた人があるかも知れませぬけれども、私の狭い見聞では未だ嘗て行つた人が無いかと思ひます。

第十九 各性年齢別死亡率除外比較

其私が案出しました一種の比較法といふものは假りに除外比較法と名付けます、それは或る集合體からして、觀察しやうと思ふ或るものを除外しまして、其残りたるものゝ比較に依つて除外されたるものゝ値がどんなであるかと云ふことを檢出するものであります、其方法に就てはチト詳しく申上たのであります、モウ時間が大分立ちましたから驅足で私の行ひました唯其要領だけを申します、即ち茲に近き三回の人口調査の事實に依つて十歳以上四十五歳の七階級の男女の死亡率に就て除外比較を爲したる表を掲げます。

各性年齢別死亡率除外比較

(各性各年齢別人口一萬比例特に三十二年に限り前年の人口を用ゐたり)

第一、明治三十二年

年齢	加工せざる死亡率		除外したる女の死亡率	
	男	女	産に因する疾患を除外す(a)	(a)より婦人(生殖器官の疾患を除外す(b))より結核性疾患を除外したる男の死亡率
一〇—一五	三・七四	四・五五	四・五五	三・四二
一五—二〇	六・四四	七・八九	七・六三	五・〇三
二〇—二五	八・六五	九・九一	九・三〇	六・三三
二五—三〇	八・二五	一〇・一四	九・四一	六・五三
三〇—三五	八・七七	一〇・一〇	九・二八	六・七九
三五—四〇	九・八四	一一・四五	一〇・四八	八・一八
四〇—四五	一一・二二	一一・五七	一〇・九三	八・九〇

第二、明治三十六年

一〇—一五	三・六	四・五三	四・五三	二・九四
一五—二〇	六・四三	八・四二	八・一六	四・五八
二〇—二五	七・九八	九・七九	九・二四	五・四七
二五—三〇	七・三六	九・六七	八・七四	五・七一
三〇—三五	七・五一	九・九四	九・一一	六・三四
三五—四五	八・六九	一〇・五三	九・六八	七・二二
四〇—四五	一〇・八八	一一・〇六	一〇・四八	八・三三

第三、明治四十一年

一〇—一五	三・四六	五・一七	五・一七	三・三三
-------	------	------	------	------

一五—二〇	七・〇九	九・五九	九・三五	九・二四	五・二〇	四・六〇
二〇—二五	八・九六	一〇・八六	一〇・二〇	九・九九	五・八三	五・三六
二五—三〇	七・九九	一〇・二四	九・五四	九・二六	五・八七	五・二四
三〇—三五	七・五〇	一〇・三三	九・二九	八・九四	六・三六	五・四八
三五—四〇	八・六〇	一〇・八九	九・九四	九・五三	七・三七	六・六六
四〇—四五	一〇・五六	一〇・九九	一〇・三九	九・九八	八・三〇	八・五六

此第一は明治三十一年末調の人口に配するに翌三十二年の死亡の事實を以てして死亡率を算出しました、それは甚だ不當の所爲のやうであります、畢竟已むを得ざるに出でたる處置です、第二は明治三十六年末調の人口に配するに同年の死亡の事實を以てし、第三は四十一年末調の人口に配するに同年の死亡の事實を以て死亡率を作製し、さうして比較を試みました、即ち先づ第一から觀察します、斯様に第一は總ての死亡率が第二よりも高い、それは第一の基本としました人口が前年の人口であるからでありまして決して明治三十二年が明治三十六年より死亡率の高い譯でないことをお断りして置きます、乃で第一だけを見ると矢張り女の死亡が四十歳迄は

各年齢に於て男よりも高い、即ち十歳以上の年齢に於て女の死亡率が高く、四十歳から以上になると女の死亡率が低くなる、加工せざる死亡率を比較すると十歳以上五歳に於ては男女の開きが〇・八一、次の十五歳以上二十歳では一・四五、二十歳以上二十五歳は男の率が少しく高まるが故に開きは少しく狭まつて一・二六、それから二十五歳以上は最も廣く一・八九、三十歳以上三十五歳も略ぼ同一にして一・八三、三十五歳以上四十歳は一・六一夫から四十歳以上は僅に〇・〇五ではあるが男の率が高く、即ち此少壯なる男女の死亡率を線に描くと兩線の間の一の紡錘形の空間が出来る、是が問題の伏藏する所であり、そこで若しも人の言ふが如くに、此紡錘形の空間が女に妊娠産あるが故の影響で生じたものとするならば、即ち此年齢に於ける女の死亡が男よりも多い、それは女には男に全く無い妊娠産の死亡があるからだ云ふことが事實であるならば、此各年齢の女の死亡から妊娠産に因する死亡者を除外して、そうして残りの死亡數で死亡率を取り直して見たならば、男の死亡率と一致するかどうか、果して妊娠産のみの影響であるとしたならばそれは一致せざるを得ない譯であ

る、それで此各年齢から妊娠産に因する死亡数を除外して死亡率を算出して見ますと、成る程少なからず女の死亡率が低下しました、それだけ男の死亡率に接近して來ましたが、併し尙ほ大なる懸隔がある三十歳以上三十五歳に於ては一・〇一、二十五歳以上三十歳に於ては一・一六、十五歳以上二十歳に於ては一・一九の開きがあるのであります、然らば此開きは何であるか、そこで妊娠産以外に男女の間に特種の疾患があるかを尋ねますと、彼の婦人生殖器の疾患が想起せられます、即ち子宮の疾患とか卵巢の疾患とか婦人固有の生殖器病がある、勿論男にも生殖器病がありますが、男の生殖器病は死亡原因として女のそれ程重大でありません、そこで此女の生殖器病死者をモウ一度各年齢の死亡数から取り去つて死亡率を算出して見ますと、又更に男の死亡率と接近して來ましたが、併しまだ其間に少なからぬ間隔がある、それは果して何んであるかモウ一段の詮索を要します、それを私は又かと言はるゝか知りませんが、先刻から申しました、日本に於ては女の結核死者が多い、殊に青年から壯年の結核死者が多い、それは男に於ても多いのではあるが、女は更に男を超越して多い、その影

響でないかと考へました、そこで今度は女の死亡数からして妊娠産に因する死亡、それから女に固有なる生殖器病死亡を取り去つて、其上更にもう一つ結核性疾患の死亡を除外して死亡率を算出しまして、而して之に對して男の死亡数からも結核性疾患死亡を除外して死亡率を算出して、それを對照して見ますと、男女の死亡率が殆んど一致しました、併しまだ二十五歳以上三十歳は〇・三八、三十歳以上三十五歳は〇・三五の間隔があつて茲に細い空間が残りましたが、是は何に原因するかと申しますと、結核性疾患には隠れたるものがあることは前に申しました、其隠れたる者は矢張現れたるものと同様に女に多くして男に少きは當然であります、其隠れたる者が占める筈の空間が此處に残されたのでないかと思ひますが、兎に角歐羅巴に見ない、日本の特有なるところの此現象は、日本婦人の妊娠産に因する死亡並に女に固有なる生殖器病に因する死亡が一半の原因を爲すには相違ないが、それよりも以上に一層重大なる原因として、日本人の青年壯年の結核死亡が多いそれは男にも結核死亡が多いが、女は更に一層男よりも結核死亡が多い、それが他の一半の原因を爲して斯様な特異なる紡

錘形の空間を生ずるに至つたのであると言はなければならぬ、そこで更に第二の三十二年の調査を見ますと、矢張り同じことでありまして、全體の開きが第一より大になつて最大が二・四二を示すやうになつた、それだけ結核性疾患死亡が多くなつたことが知れます、又更に第三の四十一年調査を見ますと、一層空間が廣くなつて最大の開きが二・六三になつて來まして、而してまだ一致せざる殘餘の空間も亦廣くなりました、此一致せざる空間を今申したやうに單純に隠れたる結核と考へて宜いか、又其外に何等か私どもの考の及ばざる他の原因の働きがあるのではないか、是から先き尙ほ充分に研究して見なければならぬ大なる餘地が茲に存するのであります、併し大體に於て今の材料で知り得ました日本の女の此年齢者に結核死亡が多いことは、臆て日本にのみ特異なる現象を示すに至つたのであることは不完全ながら確め得たと信じて居ります。

第二十、月別死亡の定型

序にもう一の觀察を述べること、御迷惑でありませうけれども御許しを願ひたいと思ひます、それは何であるかと申しますと、唯今までは性と年齢とに依つて分けた調査を申上りました、即ち日本人の女の死亡には斯う云ふ年齢上の特徴があると云ふことを申上げました而して其特徴の由て來たる原因は斯んなところにあるのではないかと云ふことを申上げたのであります、もう一回それを他の方面から觀察する必要がある、それは、日本婦人の死亡を其死亡したる月に依つて研究したる場合に又一の特徴が発見せらるゝことであります。全體人の死亡を月別に研究することは餘り學者から注意せられて居りませぬ、彼の獨逸の碩學フォン、マイヤー先生あたりでも、人の月別死亡は緯度の高低に依つて多少異なる型を呈するとか、或は傳染病の流行ありたる場合に月別死亡に變化が來るとか、乳兒死亡の多少は月別死亡に影響するとか大分粗いことを言つて居らるゝだけのやうであります、それ故に月別死亡に如何なる規則立ちたることがあるかといふやうなことに就いて餘り今日までに著明なるリテラチュールが見當りませぬ、私は自ら揣らざる烏澁の業ではあります、先賢が餘り注意して居らない此人の月別死亡に就て少しく研究して見ました、尤も目下尙ほ研究中ではあ

りますが、其未完の中にも大分興味のあることを覚えまして、さうしてそれが重要な研究體であるやうに思はれたのであります、段々各國の月別死亡の事實を—極く狭い視野に映じましたものではありますけれども調査して見ました、さうして其特徴を發見することに努めました、目今それを記述して居ります、或は近き間に諸君のお目に懸けることが出来るかも知れませぬが其段々蒐集したる材料を見て參りますと—之を詳しく申して居ると長くなりますから唯大略のみを申すするが、從來月別の事實を比例數と爲して觀察するのには多くは一年の總數を百若くは百二十として、さうして各月の分節比例を算出することにして居りましたが、月は御承知の通り三十一日もあり三十日もあり、二十九日、二十八日もあるのでありますから、其の僅か三十日に對して三日も違ふことがある、即ち多きは十分の一の違ひがあり、少なくとも三十分の一の違ひがありますからして、其見方では公平な誤謬なきものが得られないやうでありますそれで私共は次のやうな複雑なる比例を取つて居ります、それは四年一回の閏月をも顧慮致しまして、一年の平均一日の出生若くは死亡の千又は百に對する各月の平均一

日の出生若くは死亡が幾何なるやと云ふ比例を取りまして之を比較し見ることを常と致して居ります、それで私は先づ世界各國の知り得らるゝ限りの統計に就て月別の死亡の事實を拔萃しまして、夫で今のやうな比例を算出して段々觀察して行きますと、各國區々なるが中に自ら統一し得る筋道があつて大體に四ツの定型に纏めることが出来るやうに思ひます、例へば高緯度の地なる諾威や瑞典に於ては其月別比例を曲線に描いて見ますと、一年の中に一つの山と一つの谷とが出来、而して其山は年の前半にありて谷は年の後半にあります、又少しく緯度の下りたる獨逸や白耳義や和蘭などに於ては此線が二つの山と二つの谷とを描き出す、さうして其山は年の前半に在るものが高く後半に在るものが低い、夫から又緯度が下ると同じ二つの山と二つの谷が出来、其高い山は年の後半に低い山は前半にあります、それは西班牙などの型であります、更に緯度が下りて亞熱帯又は熱帯へ參りますと一年に一の山と一の谷とが出来、其山は年の後半にあり、谷が年の前半にある型を現します、それは臺灣もさうであります、比律賓群島が殊に著明であります、斯様に四つの定型らしいものがあり

まして大體緯度の高低に應じて月別死亡の型が異なる、勿論それには中間の型も大分ありますが、大體に此四定型に統一することが出来ます、今の四定型を他の言辭で略解しますと高緯度の地でも低緯度の地でも人の死亡は素より二六時中時を限らない、併し其多數物を仔細に觀察すると自ら多死の節がある、恰も約束のあるやうに年々繰り返して或る月になると其多死の節を現する、而して其節が緯度の高低に依りて同一でない、が大體には暑さの強い時と寒さの酷しい時とに現はれるに定まつて居る、而して高緯度の地に於ては寒さの時に多死の節があつて暑さの時は却て人の健康に適するから死なない、然るに夫よりも一段低緯度の地になると寒さの影響が強くて多死の節がある、外に暑さの時も亦影響があつて多死の節を現するが、寒さが強く暑さが弱いから冬の山は高く夏の山は低い、又更に低緯度になると、寒さはさまで影響せぬから弱い多死の節があつて冬の山は低く暑さは影響が強いから夏の山は高く多死の節を現する、それから赤道直下までなくとも熱帯亞熱帯になると寒さの時は寧ろ健康に適するらしく暑さの時には多死の節が現はれて人が多く死亡する、そうして夏にのみ

高い山が出来て冬は谷となる、承る所によれば人の病に罹るといふことは、或る害因即ち其疾病の原因の働きに對する身體の抵抗力が減弱したる場合に來たる現象だと申します、又罹病者が死亡するといふことは其罹つた疾病に對して抵抗する力を身體が亡失した場合に來る現象だと申します、而して非常に暑さの強いつか非常に寒さが強いつか云ふ時には、人の身體の此害因乃至疾病に對する抵抗力が總てに於て弱められるといふことであります、されば寒さの強い時には寒地に於て高い多死の節があり、暑さの強い時には熱帯地に高い多死が現する、而して中間の地帯にては二つの節が出來るが比較的寒い所には冬の節が高く、比較的暑い所には夏の節が高く現はれる、是が四定型の由て來る所以であります、然るに此月別死亡の定型は頗る動搖し易いものであります、自然的の原因に依りても又社會的原因に依りても容易く紊亂せられます、私は其定型を紊亂する原因に就ても多少の研究を致しましたが今は時間がありませんから述べません、唯項目のみを挙げますと、先づ第一は自然山の原因であります、其自然的原因にも地勢又は海流等に由る常在的原因と或る時に限る一時的又は突

發的原因もあります、それから社會的原因是甚だ複雑で凡ゆる總ての人類生活が皆影響するといふても宜いやうであります、殊に人が多く出生する、即ち出生率の高いこと、或は乳兒死亡が高いこと、或は傳染病の流行が著しいこと、風土病が多いこと、或は都會生活の都合即ち都會と郡村との人口の分配がどう傾いて居るか云ふこと、或は年齢の構成がどんなに出來て居るかといふこと或は男女の性の權衡がどんなになつて居るかといふこと、其外職業の分配がどんなになつて居るか云ふこと等が皆影響の強い者でありまして、私は其多くは事實を擧げて證し得るだけの詮索を致して居りますが今申ません、又是等自然原因並に社會的原因の影響を日本の各地に就て段々釋ねて行きますと大分そこに興味あるようして有益なる事實が見出されるやうに存じまして目今其研究に没頭致して居りますが是も今晚は申上ぐるまでに至りませぬ、さて以上の定型中日本は果してどの定型に屬するかと云ふと第三の定型即ち二つの山と二つの谷があつて前の山が低くして後の山が高いと云ふ定型に當りますそれは緯度の高低から見ても相當の所ではありますが、併し日本は海流の關係によつて彼のス

ピタールルの緯度の公溫度に照して見ますと、常に少しく低い、それ故に公溫度より計算して何程か高緯度的の月別死亡型を現じてよい筈である、但しそれは日本全國を通じてのことであるが、何分内地だけでも二十緯度にも跨つて居る國であるから其南端と北端とでは甚だしく自然關係の異なるものがある、其自然關係の異なるものが纏て部分々々の日本國民の健康の上に大なる差異を來たすであらうと思はれます、現に表日本と裏日本と、即ち太平洋の黒潮の影響を受ける地方と日本海の寒流の影響を受ける地方とでは、氣象事實の正反對なるものすらあるのでありますから、日本全體を一括した觀察では、實は値の無い者でありまして、是非共部分々に區別して觀察しなければなりません、それは他日の發表に譲りまして、茲では大體に相當の型を現じて居ると申上げて置きます。然るに茲で申上て置きたいのは此月別死亡の男女の關係でありまして、即ち男女に分別したる月別死亡の比例を作解したる時に其死亡比例を以て描かれたる曲線に日本の特徴が見ゆる、それを申さなければなりません、男女に別ちたる日本の月別死亡の曲線は各性共に二山二谷型でありまして、前山の低い後山の高い事

は一致して居ますが、其兩線を併列して見ますと、前山即ち冬の山に於ては男の死亡率の線が高く、後山即ち夏の山に於ては女の死亡率の線が高い、それは稀なる破格を除くの外各府縣殆ど等一である、前山後山の高低に大相異なる府縣に於ても此男女の關係は同一であるさて何故に冬男の死亡する者が多いか、何故に夏女の死亡する者多いか、冬男の死亡する者多きが故に斯様な曲線が描かれるか、若くは夏女の死亡する者多きが爲に斯様な曲線が描かれるか先づそれからして未知の問題であります、そこで詮索の第一歩として是と同じ現象が歐羅巴諸國にもあるかと云ふことを詮索します、不幸にして狭い私の見聞では歐羅巴に於て公表して居る統計には、男女の死亡数を月別にしたるものが甚だ少ない、僅に瑞典、獨逸、及其各聯邦、西班牙等の事實を知り得ました位のものでありまして、英吉利の如きは從來月別死亡を公表して居らない、千九百十二年から漸く四季の数を掲げた位のものであります、又私の有して居る米國の事實も甚だ區々で大都會のみ僅に見られる位のものであります、其獨逸の各聯邦を見ますと皆多少の違ひがありますが、就中アルサス、ロートリンゲンに

於ては他の聯邦と全く異なる男女の型を現じますので、これに興味を有ちまして佛蘭西の事實を是非見たいと思ひましたが、如何せん遂に今日まで得られないで居ります。それで兎に角私の見ました各國に於ては日本の如き斯様な男女の型のものが無い、多くは死亡の高い月には女の線が高い、冬の山に於ても夏の山に於ても山といふ山は總ての女の線が高い西班牙の如きものがあつたり、或は獨逸、瑞典などで見ますと冬は女の線が高く夏は男の線が高いといふ、恰も日本と正反對のものがあつたりしまして、一國と雖も日本のやうに夏は女が多く死亡し冬は男が多く死亡する國は全くない、唯臺灣の事實を見ますと、餘程可笑しいことがある、臺灣は御承知の通り第四の熱帯型でありまして、一山一谷が現せられるのであります、而して其臺灣全體では山の上行脚に男が高く下行脚に女が高い一種の型を見ますが、臺灣に在留して居る内地人ばかりを見ますと、恰度内地の男女の型から後山と前谷と切り放して見るが如くに其谷に於ては男が高く山に於ては女が高い、それ故に全體の型は臺灣本島人と近似して居るが、其冬に於ては女の死亡が少なく、夏になると女の死亡が多いと云ふ

男女の關係は日本内地と同じ状態を呈して居ります。それは何故であるかと云ふことを、更に進んで研究をしなければなりません。兎に角歐洲各國並に亞米利加あたりの材料を段々取扱つて見ましても日本と同じものが無い、其中に獨り臺灣の内地人に於て日本と同じ形を呈して居るのを見出しましたのは餘程面白いと思ひます。殊に全體の型は臺灣の風土に適當したる一山一谷型でありながら、其男女の關係が日本と同じであることが注意せられます。されば此現象は日本人の特徴であつて、縦しや何處に住居しても日本人の生活状態に特殊のことがあつて、その反映が男女の月別死亡の上に現はるのでないかと思ひます。

第二十一 各性月別死亡の除外比較

然らば其特徴の由來する原因は何であるか、それを調査する爲めに、又各性の各死亡原因等に就て、夫々の月別比例を算出して種々に比較觀察を試みました。そこで斯様の場合に誰でも直ぐに言ひますことは、男女の間に何か時を異にして多く死亡する死亡原因の特殊なものがあるのではないかと、そうして何時でも女に妊娠産があるが爲

めに男と異りたる斯様な現象が起るのではないかとそのことを想像する人があります。それも誠に尤なことでありますが、併し若し妊娠産が影響して女の死亡が多いとしたならば、それは生産又は死産の多い時に於て女の死亡が多くなければならぬ筈であります。然るに出産は何時多いかと云ふと、日本に於ては一二三月に出産が最も多い、此一二三月に出産の多いと云ふのは、前年の三四五月頃に妊娠したのであります。是は日本に限りたることではありませぬが、人の多く妊娠する時期は所謂草木の萌る時期でありまして、春氣の發動する時期、動物などには交尾期があることは誰も知つて居りますが、人間にも交尾期があるかどうかは知りませぬが、兎に角人間の生殖作用を行つて其効果の最も能く擧がるのは春氣發動期だといふ事であり、それは歐羅巴の各國に於ても米國などに於ても又南半球の各國に於ても、緯度の高低に依りて多少の遅速はあるが、又南半球と北半球は恰も反對ではあるが、春氣發動期に於て妊娠する者が多いことは同一であります。夫で日本に於ては一二三月に出産が多い、然らば若し、産が原因して女の多死の時があるものならば、冬の山を形成する女

の線が高くならなければならぬ筈であるのに、其反對に、冬は寧ろ女の死亡が少なくて夏に於て多いのでありますから、此現象の原因は直接に妊娠産が影響するのでないといふことは茲に言ひ得て差支ないと思ひます、そこで先刻申ました呼吸器病が全體としては男に多くして女に少ない、それから胃腸病が女に多くして男に少ない、それ等の事實を便りまして主要なりと認める死亡原因の月別死亡比例を算出しました。

各性總死亡並に主要なる死亡原因別死亡の一年平均一日の死亡數千

に付各月平均一日の死亡數 (明治三十二年より同四十一年に至る平均)

死亡原因別	總死亡		一月 二月 三月 四月 五月 六月 七月 八月 九月 十月 十一月 十二月															
	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男
慢性支氣管炎	1269	1453	1303	1489	1315	1496	1350	1431	1377	1464	1327	1414	1285	1372	1303	1390	1261	1348
肺氣管炎	1304	1482	1355	1541	1383	1572	1406	1597	1438	1628	1470	1659	1502	1690	1534	1721	1566	1653
肺支炎	1278	1474	1291	1491	1314	1515	1337	1536	1359	1557	1382	1578	1405	1599	1428	1620	1451	1641
肺管炎	1317	1436	1327	1447	1337	1458	1347	1469	1357	1480	1367	1491	1377	1502	1387	1513	1397	1524
肺支炎	1333	1452	1343	1463	1353	1474	1363	1485	1373	1496	1383	1507	1393	1518	1403	1529	1413	1540
肺管炎	1313	1432	1323	1443	1333	1454	1343	1465	1353	1476	1363	1487	1373	1498	1383	1509	1393	1520
肺支炎	1333	1452	1343	1463	1353	1474	1363	1485	1373	1496	1383	1507	1393	1518	1403	1529	1413	1540
肺管炎	1313	1432	1323	1443	1333	1454	1343	1465	1353	1476	1363	1487	1373	1498	1383	1509	1393	1520
肺支炎	1333	1452	1343	1463	1353	1474	1363	1485	1373	1496	1383	1507	1393	1518	1403	1529	1413	1540
肺管炎	1313	1432	1323	1443	1333	1454	1343	1465	1353	1476	1363	1487	1373	1498	1383	1509	1393	1520
肺支炎	1333	1452	1343	1463	1353	1474	1363	1485	1373	1496	1383	1507	1393	1518	1403	1529	1413	1540
肺管炎	1313	1432	1323	1443	1333	1454	1343	1465	1353	1476	1363	1487	1373	1498	1383	1509	1393	1520
肺支炎	1333	1452	1343	1463	1353	1474	1363	1485	1373	1496	1383	1507	1393	1518	1403	1529	1413	1540
肺管炎	1313	1432	1323	1443	1333	1454	1343	1465	1353	1476	1363	1487	1373	1498	1383	1509	1393	1520
肺支炎	1333	1452	1343	1463	1353	1474	1363	1485	1373	1496	1383	1507	1393	1518	1403	1529	1413	1540
肺管炎	1313	1432	1323	1443	1333	1454	1343	1465	1353	1476	1363	1487	1373	1498	1383	1509	1393	1520
肺支炎	1333	1452	1343	1463	1353	1474	1363	1485	1373	1496	1383	1507	1393	1518	1403	1529	1413	1540
肺管炎	1313	1432	1323	1443	1333	1454	1343	1465	1353	1476	1363	1487	1373	1498	1383	1509	1393	1520
肺支炎	1333	1452	1343	1463	1353	1474	1363	1485	1373	1496	1383	1507	1393	1518	1403	1529	1413	1540
肺管炎	1313	1432	1323	1443	1333	1454	1343	1465	1353	1476	1363	1487	1373	1498	1383	1509	1393	1520
肺支炎	1333	1452	1343	1463	1353	1474	1363	1485	1373	1496	1383	1507	1393	1518	1403	1529	1413	1540
肺管炎	1313	1432	1323	1443	1333	1454	1343	1465	1353	1476	1363	1487	1373	1498	1383	1509	1393	1520
肺支炎	1333	1452	1343	1463	1353	1474	1363	1485	1373	1496	1383	1507	1393	1518	1403	1529	1413	1540
肺管炎	1313	1432	1323	1443	1333	1454	1343	1465	1353	1476	1363	1487	1373	1498	1383	1509	1393	1520
肺支炎	1333	1452	1343	1463	1353	1474	1363	1485	1373	1496	1383	1507	1393	1518	1403	1529	1413	1540
肺管炎	1313	1432	1323	1443	1333	1454	1343	1465	1353	1476	1363	1487	1373	1498	1383	1509	1393	1520
肺支炎	1333	1452	1343	1463	1353	1474	1363	1485	1373	1496	1383	1507	1393	1518	1403	1529	1413	1540
肺管炎	1313	1432	1323	1443	1333	1454	1343	1465	1353	1476	1363	1487	1373	1498	1383	1509	1393	1520
肺支炎	1333	1452	1343	1463	1353	1474	1363	1485	1373	1496	1383	1507	1393	1518	1403	1529	1413	1540
肺管炎	1313	1432	1323	1443	1333	1454	1343	1465	1353	1476	1363	1487	1373	1498	1383	1509	1393	1520
肺支炎	1333	1452	1343	1463	1353	1474	1363	1485	1373	1496	1383	1507	1393	1518	1403	1529	1413	1540
肺管炎	1313	1432	1323	1443	1333	1454	1343	1465	1353	1476	1363	1487	1373	1498	1383	1509	1393	1520
肺支炎	1333	1452	1343	1463	1353	1474	1363	1485	1373	1496	1383	1507	1393	1518	1403	1529	1413	1540
肺管炎	1313	1432	1323	1443	1333	1454	1343	1465	1353	1476	1363	1487	1373	1498	1383	1509	1393	1520
肺支炎	1333	1452	1343	1463	1353	1474	1363	1485	1373	1496	1383	1507	1393	1518	1403	1529	1413	1540
肺管炎	1313	1432	1323	1443	1333	1454	1343	1465	1353	1476	1363	1487	1373	1498	1383	1509	1393	1520
肺支炎	1333	1452	1343	1463	1353	1474	1363	1485	1373	1496	1383	1507	1393	1518	1403	1529	1413	1540
肺管炎	1313	1432	1323	1443	1333	1454	1343	1465	1353	1476	1363	1487	1373	1498	1383	1509	1393	1520
肺支炎	1333	1452	1343	1463	1353	1474	1363	1485	1373	1496	1383	1507	1393	1518	1403	1529	1413	1540
肺管炎	1313	1432	1323	1443	1333	1454	1343	1465	1353	1476	1363	1487	1373	1498	1383	1509	1393	1520
肺支炎	1333	1452	1343	1463	1353	1474	1363	1485	1373	1496	1383	1507	1393	1518	1403	1529	1413	1540
肺管炎	1313	1432	1323	1443	1333	1454	1343	1465	1353	1476	1363	1487	1373	1498	1383	1509	1393	1520
肺支炎	1333	1452	1343	1463	1353	1474	1363	1485	1373	1496	1383	1507	1393	1518	1403	1529	1413	1540
肺管炎	1313	1432	1323	1443	1333	1454	1343	1465	1353	1476	1363	1487	1373	1498	1383	1509	1393	1520
肺支炎	1333	1452	1343	1463	1353	1474	1363	1485	1373	1496	1383	1507	1393	1518	1403	1529	1413	1540
肺管炎	1313	1432	1323	1443	1333	1454	1343	1465	1353	1476	1363	1487	1373	1498	1383	1509	1393	1520
肺支炎	1333	1452	1343	1463	1353	1474	1363	1485	1373	1496	1383	1507	1393	1518	1403	1529	1413	1540
肺管炎	1313	1432	1323	1443	1333	1454	1343	1465	1353	1476	1363	1487	1373	1498	1383	1509	1393	1520
肺支炎	1333	1452	1343	1463	1353	1474	1363	1485	1373	1496	1383	1507	1393	1518	1403	1529	1413	1540
肺管炎	1313	1432	1323	1443	1333	1454	1343	1465	1353	1476	1363	1487	1373	1498	1383	1509	1393	1520
肺支炎	1333	1452	1343	1463	1353	1474	1363	1485	1373	1496	1383	1507	1393	1518	1403	1529	1413	1540
肺管炎	1313	1432	1323	1443	1333	1454	1343	1465	1353	1476	1363	1487	1373	1498	1383	1509	1393	1520
肺支炎	1333	1452	1343	1463	1353	1474	1363	1485	1373	1496	1383	1507	1393	1518	1403	1529	1413	1540
肺管炎	1313	1432	1323	1443	1333	1454	1343	1465	1353	1476	1363	1487	1373	1498	1383	1509	1393	1520
肺支炎	1333	1452	1343	1463	1353	1474	1363	1485	1373	1496	1383	1507	1393	1518	1403	1529	1413	1540
肺管炎	1313	1432	1323	1443	1333	1454	1343	1465	1353	1476	1363	1487	1373	1498	1383	1509	1393	1520
肺支炎	1333	1452	1343	1463	1353	1474	1363	1485	1373	1496	1383	1507	1393	1518	1403	1529	1413	1540
肺管炎	1313	1432	1323	1443	1333	1454	1343	1465	1353	1476	1363	1487	1373	1498	1383	1509	1393	1520
肺支炎	1333	1452	1343	1463	1353	1474	1363	1485	1373	1496	1383	1507	1393	1518	1403	1529	1413	1540
肺管炎	1313	1432	1323	1443	1333	1454	1343	1465	1353	1476	1363	1487	1373	1498	1383	1509	1393	1520
肺支炎	1333	1452																

爾他の産に因する疾患及不慮の疾 女 1071 1113 1055 935 954 841 911 1033 1111 1040 1041 1013

急性氣管支炎の死亡は冬非常に多くして夏になると殆んど無い、又慢性氣管支炎も同じやうに冬多くして夏少ない、それから肺炎及氣管支肺炎を見ましても矢張り冬多くして夏少ない、其の他の呼吸器病なる肋膜炎や肺氣腫や喘息やの集合體でも矢張り冬多くして夏少ない、されば男の多く死亡する疾病である呼吸器疾患は冬死亡するものが多くして夏死亡する者が少ない、然るに胃の疾患並に下痢腸炎では日本に於ては男よりも女の死亡する者が多いと先刻申しました、其胃の疾患を見ますると是は又冬死亡する者が少なくして夏八九月の頃に非常に多く死亡する、更に下痢腸炎を見ますと、是も矢張り冬死亡する者が少なくして夏頗る多く死亡する、他國に於ては寧ろ男の多く死亡する原因であります、日本に於ては女が男よりも多く此下痢腸炎で死亡する、さて斯様に申ますると、殆んど此處に掲げたる月別死亡の男女の相違點が解決し得られたらしく思はれます、何故かと言ふと、夏多く死亡する病である所の胃腸の疾患は女に多くして、冬多く死亡する疾病なる所の呼吸器疾患は男に多い、即ちそれ

が原因をなして、冬の山は男の呼吸器病の爲めに男が高くなり、夏の山は女の胃腸病の爲めに女が高くなるのではないかと云ふことを想像し得らるゝからであります、そこで其想像が當れりや否やを知るは先刻年齢別死亡の際に行ひましたやうに、茲にも除外比較を試みやうと思ひます。

各性月別死亡比例除外比較

明治三十二年より同四十一年に至る十ヶ年平均の事實に依り各病死亡數を除外したる一年平均一日の死亡數に付各月平均一日の死亡數比較

月	呼吸器病死亡數を除外したる月別死亡比例(a)		(b)より更に胃腸病死亡數を除外したる月別死亡比例(b)		(c)より更に結核性疾患死亡數を除外したる月別死亡比例(c)	
	男	女	男	女	男	女
一月	九九五	九七九	一〇一五	一〇〇三	一〇二九	一〇三〇
二月	一〇二三	一〇一五	一〇四七	一〇四五	一〇六五	一〇六六
三月	九六二	九五八	九九〇	九八六	九八五	九九二
四月	八六一	八五九	八八六	八八三	八六三	八六四
五月	八二〇	八三二	八三七	八五二	八〇五	八一
六月	八四七	八五一	八八〇	八五八	八三二	八二九

七月	一〇一五	一〇一九	九八九	九九二	九七八	九七七
八月	一二二四	一二四五	一一六二	一一八一	一一七五	一一八五
九月	一二四〇	一二五八	一二〇〇	一二〇九	一二一六	一二一八
十月	一〇六一	一〇六五	一〇四五	一〇四五	一〇四九	一〇四八
十一月	九七五	九八一	九七八	九八七	九八五	九八一
十二月	九六五	九五〇	九八〇	九七一	九九二	九八七

先づ第一に呼吸器の疾患を男と女との兩方から除外しまして月別死亡比例を取つて見ますと、前表の如くに變化しました、即ち加工せざる以前と比しますと、最高と最低との開きが大きくなつて、同時に冬の山に於て男女の比例が接近して來たけれども、夏の山に於ては未だ女の方が餘程高い、然らば女に多い所の胃腸病を除外して見たらばどうか、そこで胃腸病を又呼吸器病を除外した上に更に除外して殘餘を以て月別死亡比例を取つて見ますと、是は餘程最高最低の開きが狭くなつて來ました、冬の山に於ては男女の比例が殆ど一致して來ましたが、まだ夏に於ては女の山が高い、そこで更に他に重要な原因がありはせぬかと云ふことが考へられますので詮索致しまし

た、何時でも斯様の場合になりますと結核を引合ひに出すやうであります、茲にも矢張り結核を引合ひに出して見なければなりません、何故かと云ふと、結核の月別死亡は餘程特殊でありますから、其最も多き肺結核死亡に就て申しますれば、男の肺結核の死亡は一月二月三月と段々高くなりまして四月五月に頂巔を現じ六月から多少の起伏はあるが漸次下降する所の一つの山が出來ます、其の頂巔は四月五月の花盛りの時であります然るに女の肺結核死亡は一月二月三月四月と漸次上昇致しまして、五月に頂巔に達します、それから六月に少しく下りますが、又上りまして九月まで其高さを保ち十月になりて漸く下降して十二月の最低に達する、斯う云ふ山が出來るのであります、即ち男も女も一つの山が出來る型ではあります、男の方は頂上が尖鋭で而も傾斜が緩やかであります、女の方は頂上の鉢が開いて居りますが傾斜は急峻である、言葉を換へて言ふと男も女も春先きに多く死亡するが、男は夏になると其死亡が少なくなるのに、女は酷暑から殘暑に至るまで肺結核に罹つた者が多く死亡して行くことになる、又之を結核性疾患の總數で見ますと男も夏季に多く死亡するが女

は殊に八、九月に於て他を超越して多く死亡することが知られます、さう云ふ事實が既にあるのでありますから、唯今の除外比較にもう一步進めまして呼吸器病死者と胃腸病とを除外した更に其上に結核死亡を除外して月別死亡の比例を算出したならばどう云ふものが出来るか、第三の加工としてそれを行ひました、其結果は前の谷に於て女が少しく高い、それは五月に男の結核死亡よりも女の結核死亡が抽んで高い、それは現はれたる結核であります、隠れたる結核があるといふことが認められたとすれば此五月の高いだけ未だ女の結核が隠れて居るのではないか、又八月にも何程か女が高い、是も同一の理由であらうと思ふ、而して其影響として十一月十二月に男が高くなるのは比例上の誤差である、此事實を特別の事情を含める破格とすれば其他は此除外に由て男女の比例が殆んど一致しました、されば此日本に固有であつた男女の月別死亡の比例は矢張り日本に於ける女の結核死亡が多くて而して他國に見ざる特別の型を爲すことが最も重大なる原因であつたといふことが明らかに知れました、勿論呼吸器病や胃腸病が男女に特殊の働きあることも原因として注目すべきものであります

が結核の關係が殊に重大であるやうに思はれます、さうすると前に述べた年齢別死亡の場合に於ても又今の月別死亡の場合に於ても、日本の特徴とも云ふべき統計上の事實が見えて居ります、其特徴たる事實の由て來る原因は複雑ではありますが、詮ずる所其重大なる原因は皆日本の女に結核死亡が多いと云ふことに歸さなければなりません、然らば何故に日本の女は結核に罹つて死亡することが多いか、是が當面の重要な問題であると思ひます。

第二十二 日本婦人の健康に関する断案

何故に日本の女が結核に罹つて死亡する者が多いかと云ふ前には、何故に結核に罹るべく左様に日本の女が抵抗力が弱いのであるか、夏の暑さに際しては總ての人が抵抗力を減弱せられるけれども、殊に日本の女が其抵抗力を減弱せられることの著明なのは何故であるか、結核性疾患に罹つた者が夏の暑さに逢ふとバタ／＼死亡する、それは男よりも女に強い、其抵抗力の減弱せられる原因は何であるか、茲まで參りますと私共の有して居る材料では、唯社會生活が男と違ふ爲めであらうと云ふより外に途が

無いのでありますが、若し出来るならばもう一步進んでそれを何程でも解決したいと思つて居ります、それには夏になると果して女の抵抗力が減弱することが強いかどうか、若し強いとすればそれは日本人に固有の事實かどうかと云ふことをもう少しく便りあるべく調べて見なければならぬと思ひます而して其抵抗力の減弱するか否かを確かめるには私は斯ういうことを致しました、それは唯一つの原因の働きに因る死亡の事實を見る、御承知の通り多くの疾病は皆種々なる原因が複雑に錯綜して働いて發するものでありますから研究の對象にならない、私の見たいのはタツタ一つの原因が働くに因て生ずる死亡で、其原因が夏働く場合と冬働く場合とで如何なる結果の差があるかを見やうと思ふのであります、それには先刻來屢問題に上りました産に因する死亡を撰みました、是は即ち産が無ければ起らない死亡で、夏に産のあつた時にそれに因する死亡が多いか、冬に産のあつた時にそれに因する死亡が多いかと云ふことを釋ねて見ましたならばトモすれば、死亡原因と爲るべき産に對するところの抵抗力が何時は強く何時は弱いかと知れるだらうと思ひます。

各地に於ける各季の出産數(生産及死産を合算す)千に付産に因する死亡數

産熱	日本全國				東京市				大阪市				ベルリン市				ウイン市				青森縣				島根縣				鹿兒島縣			
	春	夏	秋	冬	春	夏	秋	冬	春	夏	秋	冬	春	夏	秋	冬	春	夏	秋	冬	春	夏	秋	冬	春	夏	秋	冬	春	夏	秋	冬
産熱	1.07	1.55	1.01	0.96	1.07	1.55	1.01	0.96	1.07	1.55	1.01	0.96	1.07	1.55	1.01	0.96	1.07	1.55	1.01	0.96	1.07	1.55	1.01	0.96	1.07	1.55	1.01	0.96	1.07	1.55	1.01	0.96
其他の因	2.45	3.11	2.88	2.43	2.45	3.11	2.88	2.43	2.45	3.11	2.88	2.43	2.45	3.11	2.88	2.43	2.45	3.11	2.88	2.43	2.45	3.11	2.88	2.43	2.45	3.11	2.88	2.43	2.45	3.11	2.88	2.43
産に因する疾	2.45	3.11	2.88	2.43	2.45	3.11	2.88	2.43	2.45	3.11	2.88	2.43	2.45	3.11	2.88	2.43	2.45	3.11	2.88	2.43	2.45	3.11	2.88	2.43	2.45	3.11	2.88	2.43	2.45	3.11	2.88	2.43
慮及不疾	2.45	3.11	2.88	2.43	2.45	3.11	2.88	2.43	2.45	3.11	2.88	2.43	2.45	3.11	2.88	2.43	2.45	3.11	2.88	2.43	2.45	3.11	2.88	2.43	2.45	3.11	2.88	2.43	2.45	3.11	2.88	2.43
合計	3.52	4.66	4.76	3.39	3.52	4.66	4.76	3.39	3.52	4.66	4.76	3.39	3.52	4.66	4.76	3.39	3.52	4.66	4.76	3.39	3.52	4.66	4.76	3.39	3.52	4.66	4.76	3.39	3.52	4.66	4.76	3.39

備考 日本全國及三縣の事實は自明治三十二年至同四十一年十ヶ年平均東京市及大阪市は自明治三十九年至同四十三年五ヶ年平均ベルリン市は一九〇八—一〇年の平均、ウイン市は一九〇四—〇八年の平均なり、又本表に於て春と稱するは三、四、五月、夏と稱するは六、七、八月、秋と稱するは

九、十、十一月、冬と稱するは十二、一、二月の謂ひなり。

大觀するやうに輯約して見ます、先づ全國に於て生産死産を合せた出産の數千に對して春、夏、秋、冬何れの時に産に因する死亡が多いか、斯う云ふことを見た、茲に春と名付けましたのは三、四、五月、それから六、七、八を夏と致しました、九、十、十一月を秋、十二、一、二月を冬と名付けました、ここで日本では十二月一月二月の冬が最も産の多い時で其次は春、其次は秋、六、七、八月の夏が最も産の少ない時であります、そこで産の場合數に對する産に因する死亡が各季どんなであるか、先づ産褥熱を見ますと一見してお分りになります通り夏の場合が最も多い、秋がそれに次ぎ春がそれに次ぎ冬が最も少ない、即ち産の最も少ない夏に最も多く産褥熱の死亡がある最も産の多い冬に産褥熱死亡の割合が最も少ない、是は餘程可笑しいことではありますが、併し退いて考へて見ますと、さうあつても宜いかとも思ひます、何故かと云ふと、産褥熱は御承知の通りバクテリアの働きに因りて起るところの病である而してバクテリアは概して氣温の高い時期に於て發育、繁殖が旺盛でありますから、冬は

彼の働く力が夏よりも鈍いとも想像せられます、それ故に夏季は冬季よりも産褥熱を發する割合が高くても思ひます、然らばもう一つ産褥熱以外の産に因する死亡それは何んであるかと云ふと産時に於ける出血それには前置胎盤などもありましたやう或は子癩或は産に因する腎炎、蛋白尿、それから所謂難産と云ふやうなことで産に原因したる疾病及不慮の中産褥熱を除きたる總體であります、此疾病及不慮そのものは恐らく暑さ寒さに直接の關係を有たぬものであります、要するに其難産も出血も出産てふ多數現象に對しては四時一様に來たるものと思はなければならぬ、されば其難産や出血やに堪へ得たる者は助かりて死を免れ、堪へ得ざりし者が不幸にして斃れる即ち此害因に對して抵抗力の強い者は助かり、抵抗力の弱い者は死ぬるのであります、それ故に若しも夏の暑さが抵抗力を減弱せしむるものであるならば、同じやうに難産や出血があつても、夏の難産や出血は人を多く死に致し、冬の難産や出血は比較的死を免かるゝ者が多い、夫で全國の比例數を見ますと、夏が最も多く秋之に次ぎ其次が春、それから冬が最も少ない、矢張産褥熱と同様に暑さの高低が關係するもので産の

多い少ないには全く影響して居らない而して産褥熱と其他の疾病不慮とを皆合せて見ますと夏多く秋之に次ぎ、春又之に次ぎ冬が最も少ない其状況が一層明瞭であります、されば之に由て日本の女が暑さに際して其抵抗力を非常に減弱すると言ふて差支ないやうに思はれます、併し是は全國で見たのであつて全國中には尙ほ未だ助産機關や治療機關が備つて居らぬ土地も多々ありますから、今度は特に東京市や大阪市のやうな此等の機關の整備して居る處を見たならばどうかと思ひまして、即ち東京市を見ますと、是は又説明するまでもなく、寧ろ全國で見たよりも夏に於ける産に因する死亡の割合が高い、大阪市はどうかと云ふと、更に東京市よりも一層著名に此現象が見えて居ります、然らば斯かる現象は世界の諸國を通じて同じやうのものであるか否かと云ふことを概観しやうと思ひまして東京市、大阪市に比較するものとして獨逸のベルリン市と奥地利のウイン市の同じ比例數を算出して見ました、ベルリン市は東京市などよりも多産の時が遅れますそれ故に春と冬とが最も産の多い時でありまして秋之に次ぎ夏最も少い、然るに産に因する死亡は産褥熱が大多數を占むるにも拘はらず、

産の多い時即ち春と冬とに於て最も死亡者が多く産の少い夏には最も少ない其状況は一に産の多少に影響して暑氣には無關係の様に見える、恰も日本とは正反對の事態であります、ウイン市はベルリン市程に著明ではありませぬけれども夏最も少ない、ことは同一轍であります、併し是は都會の事實であります、今度は大都會を包有しない或は文化の程度の低いとも見られる邊陲の地を見たいと思ひまして國の北端南端並に、其當時は未だ交通機關が開けて居りませぬ青森縣、島根縣、鹿兒島縣を見ました、是等の縣に於ても、矢張り其關係は同一でありまして、夏最も高き死亡比例を現します、さうすると同じ産であつても夏の産に際しては日本の女が暑さに逢ふて非常に抵抗力を減弱するが爲に、同じ産と云ふ原因の働きに對しても之に抵抗することが弱くて斯様に夏は多く不幸に陥る、然るに冬は其死亡の割合が少ないといふものは日本位の寒さでは未だく、非常に抵抗力を減弱せらるゝ程でないので、日本の女が寒に強いといふ譯ではないらしい、或は仔細に地方別に見たら寒時に抵抗力の減弱せらるる地方があるかも知れませんが、それは他日の詮索に譲りまして、今茲で見た所で

は確かに日本の女が暑氣なる外圍の感作に由りて其抵抗力の減弱せられることは認められます、そうしてそれは外國に見ないものらしくて、先づ日本の女の特性でないかと思はれます、何故に左様な特性が日本の女にあるか、是以上は私共が數の上から解決し能はない所でありまして、醫學者、病理學者等の研究を俟つて初めて決定して貰はなければならぬものと思ひます。

第二十三 餘 談

是は領域を外れた餘談であります、私共が數を觀察して居ります間に或はこんなことでもないかなど、考へることもある、それは此抵抗力の減弱は何時でも營養の不充分である場合若くは健康保維上に不利なる條件のある場合に於て同じ外圍の感作に逢ふても其抵抗力の減弱せらるゝことが早いと聞いて居ります、されば同じやうに健康體と見ゆる者でも常に營養の充實した者又は健康保維に不利なることの無い者と營養の乏しい者又は健康上不利のことある者とは、同じく害因に遭遇しても其害因に侵された方が異なる、又害因に侵されて疾病に罹つたとしてもその結果が同一でない、彼の細民の疾病が非常に經過が短かく而も不幸の轉歸を取ることの多いのも此理に基きます、されば營養の良いものは重態なる疾病に罹つても容易に死なないと聞き及びます、惟ふに、日本の女が夏の暑氣に遭遇すると其抵抗力を著しく減弱するのは、矢張り其生活が男よりも不良である爲めで、或は營養の問題乃至は不良習慣の問題ではないかと思ひます、私の知人が或る時自ら雇使して居る看護婦の食物を調べたことがありまして、其成績を聞きますと其食物中の溫量(カロリー)は甚だ少ないもので獨逸の成人の女の食物のカロリーに比較して其僅に六分の一にしか當らなかつたと申ます、獨逸人の六分の一で日本人は足るのであるかも知れませぬが、又必ずしも美食を推奨するのではありませぬけれども、餘り贅澤な生活をして居るとも思はれない獨逸人に比較して其六分の一しか營養量を攝り得ない、而もそれが看護婦と云ふ日本の女としては跳ね返りの生活をして居る者であるとしたならば、私は少しく心細からざるを得ないのであります、況んや吾々の如き貧弱なる家庭にある者の營養攝取は實に思ひやらるゝ所でありまして、殊に日本人の習慣として男女の營養攝取の状態が異なる

い、彼の細民の疾病が非常に經過が短かく而も不幸の轉歸を取ることの多いのも此理に基きます、されば營養の良いものは重態なる疾病に罹つても容易に死なないと聞き及びます、惟ふに、日本の女が夏の暑氣に遭遇すると其抵抗力を著しく減弱するのは、矢張り其生活が男よりも不良である爲めで、或は營養の問題乃至は不良習慣の問題ではないかと思ひます、私の知人が或る時自ら雇使して居る看護婦の食物を調べたことがありまして、其成績を聞きますと其食物中の溫量(カロリー)は甚だ少ないもので獨逸の成人の女の食物のカロリーに比較して其僅に六分の一にしか當らなかつたと申ます、獨逸人の六分の一で日本人は足るのであるかも知れませぬが、又必ずしも美食を推奨するのではありませぬけれども、餘り贅澤な生活をして居るとも思はれない獨逸人に比較して其六分の一しか營養量を攝り得ない、而もそれが看護婦と云ふ日本の女としては跳ね返りの生活をして居る者であるとしたならば、私は少しく心細からざるを得ないのであります、況んや吾々の如き貧弱なる家庭にある者の營養攝取は實に思ひやらるゝ所でありまして、殊に日本人の習慣として男女の營養攝取の状態が異なる

爲めに一層女の營養攝取が乏しいと思はれます、例へば私の貧弱なる家庭に於ても私は家長でありますから、傲然として毎食二三品の副食物を攝つて居ります、然るに我細君は、前夜の残り物を突ついて満足して居る状態であります（笑聲起る）是は獨り私の家庭ばかりでないと思ひます、此習慣あるに依りて日本の女の營養攝取が甚だ少ない、従て其身體の營養が乏しからうといふことは誰が見ても必らずしもカロリーを數へ無くて又必ずしも身體検査を行はないでも先づ大體に判からうと思ひます、尤もそれが健康である間は何んでもないやうでありますけれども、若しも一朝事に遭ひますと、即ち害因に逼迫せられますといふと、惟ふに細君から先に參つてしまふだらうと思ひます、併しそれも日本の女の美德とか謙徳とか稱揚せられまして、女は萬づ控へ目にするが宜いといふことで、成る可く小さな茶碗で僅かばかり食べて居ることを以て御上品の行爲とせられて居りますが、それで健康を保維し男と併行し得ればよいのでありますが、今申したやうに獨逸人の六分一にしか當らない程の食物を攝つて居ることは決して感服することが出来ませぬ、併し閉鎖されて居つた日本の舊時

代では、それでも濟んで居つたか知れませぬが、今や日本の女は男と同じやうに社會の人として働いて居つて而かも職業の種類も増加して、都會に於ては副業として女の職業が澤山ありますし、田舎に於ては男女殆んど違ひがないやうに農業其他の勞働を營んで居ます、斯かる有様であるにも拘らず、矢張り家庭に閉ぢ籠つた舊時代と同じ食物の攝り方であつたならば、益日本の女の健康が低下して來やせぬかと思ひます、殊に日本の女は西洋の女に比して重大なる任務を有つて居る、それは、子女を哺育しなければならぬ任務を負ふて居るのであります、子女を養ふことは決して輕易な任務ではないと思ひます、私は不幸にして一人も子女を有ちませぬから全く經驗がありませんが、私の友人は斯う云ふことを申して居りました、前の小兒を養ふ時には母親の身體の關係から牛乳で養つたが、今度の小兒は母親の乳で養つた、然るに前の小兒は今の小兒位の時には、牛乳を一日七合宛飲まして居た、所が今の小兒は妻の乳だけで育て、居る、是から考へて見ると、現に自分の妻が牛乳七合以上の營養を攝つて居るか否かと疑はしい、若し妻がそれだけの營養を攝つて居ないとすると妻自身の骨身を

削つて小兒を育て、居ることになると、寔に痛切の觀察であります、既に唯さへ乏しい營養なるが上に更に更に子女を養ふが爲めには自身の骨身を削つて養はなければならぬ、實に日本の女は至大なる任務を負ふて居るものと言はねばならぬ、此任務に對しても吾々はもう少し女を尊重してやる必要があると思はせぬか、それでは先づ以て營養の攝取に就て舊慣を破つてやるのが第一であると思ひます。私は或る時此御話を致しましたら同席の某友人が言はれるに、君の言ふ通り誰の家庭でも其弊は同じことだが、併ながら僕は婢アに美味しい物を食べると言つて金を遣ると、其金を持つて芝居を觀に行つてしまつて美味しい物を食べないで困る、どうか芝居を觀に行かないで美味しい物を食ふやうにしろと言つて呉れないかと言はれたことがあります、兎に角どうかしてももう少し女を尊重してやりたい、幸に女の食物を良くし且其量を多くするやうに習慣を改めることが出来たならば、啻に女の健康が良くなるばかりで無く、其女に依つて生れる子女の健康が良くなつて來ましやうかと思ふ、私共は牽牛花などを作りましても覺えがありますけれども、初め種の時分から悪いもの、或は芽生えの時分に

土が良くなかつたり肥料が能く行かないと、終りまで良い花が咲かないやうであります、されば人類に於ても虚弱なる母親に産まれ且つ育てられたる子女は或は夭折したり、若くは成長しても蒲柳の質たるを免かれぬことがあります、それ故に私は、自分の研究したる事實から推測せる餘談ではありますが、女の營養を進めてやると云ふことは、日本に於ける刻下の衛生上の急務であらうと思ひまして、此事を添へて申上げた次第であります。今此壇を下るに當りて、五時に近き長談義を御聞上げくだされました諸君の御雅量に對し深く敬意を表します。(拍手)

附言 日本女の健康問題に就ては本文に申した以外に工人としての女の健康も、又一部の女に就ては日常の生活が運動不足に過ぐることも、又教育の關係も、又帶や袴やの如き衣服の關係も、數へ上げたならば澤山にあること、は信じますが、私の此論はそれを一々研究するのが目的でありませんから、唯適切に氣附きたる營養の一事をのみ餘談として申たに過ぎません、それ故に日本の女の健康上議すべきことが是に限れりといふ意でないことを御承知ありたいと思ひます。

第二篇 新年の賀辭

大正四年一月

拜啓 諒闇中には候へども先以て高堂御清寧御超歳被遊奉大賀候 扱平素は存ながら御疎音に打過ぎ多罪拜謝に辭なく候

一、御詫旁今茲に改曆に際し過ぐる一年間の卑狀を叙し御高誼に應へ可申候
一、小生宿痼(糖尿病)は依然として去らず候へども病に慣れ候爲か去る元年より二年は軽く二年より三年は更に軽く自覺致候而して目今は糖量三%内外、渴熾んに疲勞條ち臻る等尙且罇の入りたる體なるは同然に候左れば其取扱方は誠に厄介のこと多く候
一、併し幸に上官の寛大なる庇護と同僚の親切なる幫助とに頼り病軀ながら公務に大過無きを得候

一、公務の間に従事致居候本邦人口動態の研究は勿論小生如き薄學謏劣の徒の容易に爲し遂げ得べきことに無之候へども今日までの所本邦人の女の死亡が年齢別に於て將

た月別に於て特徴あること及本邦の小兒死亡に特徴あること等一二點のみは要領を得たりと信居候

一、東京大正博覽會の開催に就き日本結核豫防協會の囑を受け其出品委員と爲り廿三枚の統計圖表を製作し又恩賜財團濟生會の出品九枚、日本花柳病豫防會の出品三枚を製作し其他小生自身出品六枚を製作致候

一、同博覽會の審査官を囑託せられ小生に關係なき出品の審査に従事し又第十四部の報告員と爲り審査報告の整理を擔當致候

一、同博覽會は小生の出品に對し銀賞牌を授與せられ候

一、本年二月北米桑港に開かるべき巴奈馬太平洋萬國博覽會に内閣統計局より出品すべき統計圖表の製作を命ぜられ同僚と共に之に従事し人口の靜態及動態に關するもの十枚を製作致候

一、又同博覽會に出品すべき内務省衛生局の統計圖表二枚、恩賜財團濟生會の同四枚も小生に製作方を囑せられ之を製作致候 春夏の頃は博覽會見物の爲親族等の上京せ

る者多く寔に樂多きことに候へき

一、併し五月に叔母田中こま北海道にて死去し母方の尊屬皆無と爲りたるは悲痛寂莫の感に耐えず候

一、此悲に引代へ養嗣子たる末弟鷄助(郷里越後加茂に醫術開業)六月に一兒を擧げ小生も孫を有つ身の喜びを得候此孫兒を保彦と名け候彦や彦や冀くは邦の彦たれ

一、荆妻は舊の如く頑健に候閑あれば即ち園藝に餘念なく猫額大の小園に雜多の花卉を栽植致居候此年も中菊は可なりの出來に候へき

一、小生の書畫愛玩癖亦舊の如く此年も數十點を蒐集致候就中戴曼公筆富岳詩畫、土岐富景筆鷹、無落款狩野(古法眼?)筆武鑑禪師寒山拾得、鎌倉期以前の寫經等は壞壁を屏ふには過ぎたる逸品と存居候

右卑狀のみ申上他は永陽の時を期し候謹具

恭しく新年を賀し併て高堂の萬福を祈上候

大正五年元旦

副申 例に依り過ぐる一年中の卑状を述べ御疎音の御詫に代へ申候

一、小生宿痼(糖尿病)は依然舊の如く糖量三%内外大渴も疲勞も有之候併し敢て増惡の徴なく候まゝ日々勤務罷任候素より病軀のこと故充分に參らず候へども幸に去年中は病氣の爲め闕勤したること一日も無之候先づ此分ならば未だ自棄するに及ばずと自信致居候

一、小生何の至幸ぞ去秋の御大典に各儀に召さるゝ光榮に浴し候其紫宸殿の御儀に於ては地位の卑きが寧ろ幸と爲り正面に 高御座を拜し唯々尊さに感泣致候是は誠に一門の永く傳ふべき光榮と存候

一、小生の豫てより従事致居候本邦人口統計の研究は去年中其一部分を公表致候(統計集誌、國家學會雜誌、生命保險會社協會會報)併しそは序論と月別死亡との一端に止まり人口統計の大なる内容より見ては眞に九牛の一毛を解したるに過ぎず候僅に指を染めたる身の烏滸なる申條に候へども漸く一事を解けば新なる疑問百出し社會事象の由て來る頗る深遠にして之が研究の際涯なきを覺え候然るに小生如き薄學謏劣の徒

が而も罅の入りたる身を提て當ればとて果して何事かを爲し得んやと自ら憫まるゝ義に候も亦縦しや一端にもせよ之を闡明し得れば其爲さざるに優ること萬々なりと存即ち小生終生の事業として駑馬に鞭ち居候御憫笑被成下度候

一、小生の蒐集癖去年も亦數十點を得候例により、雜駁極まるが中に陣獻章、惲壽平、王原祈、冷吉臣、鄭板橋、馬三峰、夏令儀、林雲達、程赤城、孟涵九、江芸閣等明清人の筆あり又秋月、賴方、洞元、安信、常信、古信等北宗の畫あり滕范古、鶴亭、圭齋、高芙蓉、鼎春嶽、對山、寬一、半香、琴谷、月僊等の畫幅、詩佛、旭莊、磐溪、黄石、天江、淳信、鴻山等の書幅さては和様(加茂流尊圓流等)の朗詠數卷禪僧(江月密巖、月舟、道經、誠拙、丹山、周鑑、南山、奕堂、峨山等)の筆蹟等種々有之候而して是等の多くは廢紙同様の中より發見せる所謂掘出物に御座候殊に京都行に於て入洛の日川上東山の書を歸京の日石川丈山所用の筆筒(傳來頗る明瞭)を掘出し得たるは多福至極と存候

一、荆妻は舊の如く健全薔薇よ薜花よ鶯草よ菊よと小生の蒐集癖同様面白しと思ふ總

てを栽植し小園に四時花を絶たざるを誇と致居候

一、在京の娶女初夏以來健康を害し大に憂慮致候も幸に療養効を奏し晩秋全快致候爲めに乳母に付け候孫兒は其乳や適しけん舊臘入手せる在郷家人一同の寫真中丸々と肥えたる渠が殊に快く相見え候

恭く新年を賀し奉り併て高堂の萬福を祈上候

大正六年元旦

副申 例に依り過ぐる一年中の卑況を述べ御疎音の御詫に代へ申候

一、先以て小生の宿痼(糖尿病)は差したる變化無之候成るべく罹病を忘れることが病に克つ秘訣なる様存候まゝ絶えて糖量も檢せず常人と同様の生活を續け乍病軀の活動を試み居候へ共扱何分遠慮なく襲來する大渴や疲労やに閉口致候昨夏頃より身體の各部に刺す如き疼痛屢來り夜分などは驚き覺むることもある新症狀始り候何にしても罅の入りたる體を保存するは面倒なるものと呆れ申候

一、内務省に保健衛生調査會設置せられ小生も其委員たるの光榮を有し昨夏來諸大家

の驥尾に附して働き居候但限局せる小生の知識は素より多方面なる能はず聊か自信ある一事をのみ固守し縦しや狭小にもせよ之を闡明すれば即ち我任務を盡し得べしと覺

悟罷在候

一、内閣統計局の分課規程改められ新に原表審査庶務の三課を置かれ小生に原表審査二課長を命ぜられ候扱て謫劣の身を以て如何にせば此大任に當り得べきかと私に相惑ひ候へしも幸に上官の寛大なる庇護と同僚の親切なる幫助とあるあり若し夫誠心誠意唯報効を以て念と爲さば庶幾くば大過なきを得んかと存即ち孜々勤務致居候

一、豫てより終生の事業として從事致居候人口統計の研究は遅々として進まず候へども而も研究の序次は唯死亡の細密に入りて夫のみを詮索するに止まる能はず更に關聯せる現象の出生にも婚姻離婚にも手を擴げることの餘義なきに至り候今年は之を如何程まで拾收し得べきか前途の際涯なきに拘らず又寔に樂み多きことに候

一、例の蒐集癖にて去年も亦百點以上を得候就中尤物は無落款孔雀の雙幅に候其他張芷園の竹、吳小舟竹雙幅、隨緣(竹田の別號)の印ある雪景、仙崖和尚狗子佛性畫讚、

牛道禪師筆蹟等は後に傳ふべき値ありと存候又安政元年に畠山徳元四百五十年忌追悼短冊百二十枚入手致候其中に水藩山國共昌、武田正勝、原忠成、尾藩植松茂岳、墨八百八、他阿上人、安藤信正、月の桂子等及當時知名の歌人多く候

一、荆妻は健全にて例の如く園藝に餘念なく満園に雑多の花卉を栽培し其花の濃淡遅速を愛し居候然るに夏の朝夕は鶉鶉の池魚を窺ふあり秋に入りては百舌鳥の來りて鶯や雲雀やを襲ふあり爲めに丸公(犬)をして之を追はしむるなど小園も亦案外多事なることに候

一、在郷の養嗣子鶏助舊臘又一男兒を擧げ候母子健全辰彦と命名致候是にて二孫兒を有つ身と相成候乍憚此爺さん振りを御披露申上候

謹みて新年の御慶申納め併せて

高堂の益す清福を重ねられんことを祈上候

大正七年元旦

副申 例に依りて昨年中の卑狀を陳じ平素御無沙汰の御詫に代へ候

一、先以て小生の宿痾(糖尿病)は徐々に膏盲に入るらしく年一年毎に疲憊の程度も増し大渴も甚しきを加へ候殊に一昨年から覺え初め候身體各部の神経痛頻發致候折々は例の養病秘訣の氣根も歇きて嘆聲を發つこと屢有之候併し此位のことにては未だく敗北したるには無御座日夕熾んに空元氣をつけ病魔に打ち克つに努め居候唯時折病氣はドウかなど、慰問せられ候際其温情に絆だされてツイ弱い音を吐くことも有之候罅の入れる者の痴態御憫笑々々

一、病軀のこと故素より充分の活動は致兼候へども官務は兎も角も大過なきを得候併し顧み候へば如何に鞭うち候ても騫驚の捷からんやうなく佻々踰躑として行く狀の醜さ我ながら焦燥しく被存候されば大過なきを得しは畢竟寛大なる上官と親切なる同僚の賜に候

一、人口統計の研究は益々多方面に涉り候其動態の各般に擴げ候手は之を部分的に先づ關東七府縣より拾收し初め候へども未だ完からず候又月別死亡は略ぼ詮索し了したれども之を記述し盡すに至らず候其他結核死亡も小兒死亡も其細觀すべき材料のみ山

積して我力尙之に及ばず候然れば樂しとも將た苦しとも言ふべく候

一、彼の蒐集癖にて去年も可なりに得候例により尤物二三御披露致候常信の濃彩武者繪(八島の義經ならん)、大雅堂幼時の畫(印文待買坊)、椿年模寫大雅堂飲中八仙歌大幅、逸雲筆福神、雲峰筆春江漁樂圖、守親筆鷹、顧升の春牧、周峻の蘭、探鯨の蝦蟇仙人鐵拐仙人對幅伊川探信合作福祿壽、天山の書幅、稼圃の書卷、雨谷の梅、和亭の花卉(袋戸の一方)茶山翁尺牘などは棄てたものにあらずと自信罷在候乍序小生蒐集癖の主義を茲に記し置候即ち(一)自分さへ面白ければ宜い事、(二)價は小遣の範圍を出でぬ事、(三)一切賣らぬ事に候されば賣らぬか賣つて呉れぬか等の御交渉は今後も眞平御免候

一、荆妻も昨年は春來健康勝れずどうやら小生の仲間になりたるらしく候併し元氣よく例の園藝に餘念なく四季花を絶たざるを樂み居候棕栢竹も斑入の子を生し金陵邊も皆よい芽を出し實生の山菊に新種が出たなどの喜びに引替へ雲雀が遂に斃れた悲みも有之殊に池の浚濼を年々企て、未だに之を決行せぬことが小園の大問題に候

一、郷里も一同無異二孫兒も恙なく成長致候橘黃の頃養嗣子鶏助醫業の閑を偷みて上京新事舊情打ち混せて聞く談に轉た郷思を催し候

恭く新年を賀し併て高堂の萬福を祈上候

大正八年元旦

副申 例に依りて昨年中の卑況を叙し平素御無沙汰の御詫に代へ候

一、先以て小生の宿痼(糖尿病)は矢張漸進致候ものか春には著しく亢ぶり神経痛も疲憊も甚しく不眠さへ襲來致候爲例の養病秘訣の根も盡きて相州湯河原に轉地致候居ること三旬主徴は稍軽減せるも其頃より心窩に厭やな疼みを覺え初め扱は又重症を加へしかと一時は大に悲觀致候併し其後の經過に鑑み是も亦宿痼の一徴なるを知り候て生體のこと故些しは痛いのも仕方がないと諦め爾來復平氣に罷在候

一、先輩諸氏が熱心に唱道し統計界一般に其遂行を渴望して止まざりし國勢調査は愈大正九年に實施せらるゝことゝなり其中央機關として五月に臨時國勢調査局統計官兼内閣統計官に任せられ斯局の事務に鞅掌し得る一員と相成候而して調査局にては調査

課長を統計局にては従前の通り原表審査の二課長を承り候縦しや上官の庇護と同僚の援助とあるにせよ省みれば其一をだに能くすまじき謗劣の身の而も病軀を提げて之に當る其責任の重大なること寔に恐懼の至りに候

一、人口統計就中其死亡統計は小生の最心血を注ぐ所に候即ち一生の事業として縦令小部分にても之を闡明せしめたと存居候然るに世事多くは意の如くならず徒に材料のみ山積して之を研究する時なく纔に研究したるもの亦之を記述する時なく只管に時の到るを相待居候

一、昨年は旅行多き年に候へき即春に養病の爲相州に夏は公用にて山口、愛媛、福岡三縣へ秋は聘せられて朝鮮へ出張致候此旅行中の快事は松山にて圖らずも森盲天外氏と會し一日の談十年の書を讀むに勝るものありしと京城にて工藤壯平氏に伴はれ兩博物館を見創めて朝鮮美術の粹に接したると歸途奈良にて正倉院御物再度の拜觀を爲し博物館をも觀之を朝鮮の所見と比較し言ひ知れぬ感を得しことに候

一、例の蒐集癖去年は甚だ振はず候是近來市價の無暗に高きに反し月給取の餘裕漸く乏きに至れる爲かと存候併し小生は斯くても尙近世の儒家歌人の墨蹟數十點を得我趣味を充たすには足り申候又朝鮮にては一點も得ざりしも總督府より古蹟圖譜を賜はりて是亦滿腹致候

一、去年の一二月は寒氣酷烈なりし爲荆妻の園藝は大打撃を被り候不完全なる温室にては耐寒性の植物さへ保たず多年愛育せる盆栽の枯れたるもの尠からず候併し草花は可なりに出來滿園の紅紫は日夕の勞を慰するに足り殊に山菊の繕はざる野姿は晩秋の興趣を饒にし候

一、秋末流行せる悪性感冒には郷里の孫兒等之に罹り候も幸に軽くすみ當方荆妻の如き全く免れ小生の宿痾を別として一同恙迎年致候

謹で新禧を賀し併て高堂の萬福を禱上候

第一回國勢調査施行の年 元旦

副申 例により昨年中の卑況を叙し平素御無沙汰の御詫に代へ候

一昨年中も引續き臨時國勢調査局並に内閣統計局に勤務致候少壯有爲の士ならば何の

雑作なきことならんも老鴛の小生には此勤務さへ容易ならず年中之に逐はれ喘ぎく
醒醒として努め而も尙不満足なること多く候されば豫て終生の事業思ひ深め居り候人
口動態統計の研究も徒らに材料のみ推積し従事の機なく候若し斯くして今後も経過し
候はば唯奔命に疲るゝのみ一事なすこともなく結局は醉生夢死に終り候はんが日暮れ
途遠き身は今改曆に際し洵に感慨無量に候

一、小生の宿痼(糖尿病)は春來瘡痒てふ一徵候を増し追々廣汎となり候爲三月末相州
湯河原に轉地入浴一箇月纔に癒えて歸京又幾何もなく舊態に返り神経痛も頻發し候に
殆ど根も盡き果て候然るに七月官用にて北海道及樺太に旅行所謂老人の冷水とて直に
健康に影響し樺太往行中時ならぬ寒氣に耐え得て強く腸を害し歸途青森に滞留中折柄
の山脊風に遭ふて彌が上に病患を深くし八月十六日歸京十九日より暴瀉を發し翌朝は
危険状態に陥り候併し幸に笹高橋兩君の同情ある治療効を奏し荆妻は言ふも更らなり
郷里より急行し來れる姉や嗣子や並に親しき友の誰彼が誠意をこめし看護に助けられ
回復致候夫も罅の入りたる身とて経過存外に長く病褥に親むこと四旬を超え候爲に公

務を闕くこと久しく病災とは申ながら恐懼此事に候加之豫て約せる朝鮮にも行き得ず
依囑を空くせしこと實に遺憾に候へき

一、秋初病臥中餘儀なき事情生じ住み馴れし宮村町を立退くこと、相成候爲市外代々
木(前記)に容膝の小廬を求め舊臘轉居致候地は明治神宮内苑を北に距ること約一町半
高燥にして南に展き日當り宜く飲水良に閑靜なるがせめてもの佳點に候素より市内四
通八達の街衢の如くなる能はず候へども幸に院線の代々木驛にも亦京王電車の新町乃
至市電の新宿追分にも程近く候て出入には左まで不便ならず候

一、公務に逐はれ病氣に惱まされ轉居の厄にさへ遭ひながら矢張例の蒐集癖は止めら
れず去年も亦百餘點を得候就中准胝觀音の軸は逸品に候南郭、精里、半齋其他近世諸
儒の書幅も多く候又書畫以外に文暉堂の堆朱深彫亂箱、唐物堆漆筆筒、人形描更紗紙
入等も面白く殊に亡友が愛用せる鐵哉刻士農工商の煙管筒の手に入りしは眞に奇縁に
候

一、荆妻の園藝も轉居の一件にて根柢より破壊せられ候聽て新居の小庭に花壇を經營

致候までは運び來りし鉢植を唯一の眺めと樂み居候

一、昨年は在北米の山本(荆妻の弟)は長女を亡ひ在郷の姉は養女に七人の子女を遺して逝かれ小生の知人白玉樓中に入りし者四十餘人あり誠に悪年に候へき併し拙家は歳晩に在郷の姉一男を擧げ母子健全との吉報あり是にて三人の孫有つ銀婚の翁媪目出度新年を迎ひ申候

恭く新正を賀し併て高堂の清福を祈上候

大正十年元旦

副申 例により御邪魔ながら過ぐる一年間の卑況を叙し平素御無沙汰の御詫に代へ候
一、一月に新潟縣に統計講習會の催しあり出張を命ぜられ候其序を以て歸省し久々に展墓もし親戚故舊とも語り昔ながらの雪裏の御正月をも味ひ滿悦して歸京致候
一、然るに其翌日より在京の婦いね子流行性感冒に罹り病むこと僅に一旬二十八日といふに悲しや二十七歳を一期とし死致候去年の秋志田の姉は養女に七人の子女を遺して逝かれ老が身の之を育むに疲れ居候に今又我が家に三遺兒を生し候されば逝く者

の不幸は素より言ふまでもなく候へども残れる者の悲惨亦實に涙にくるゝ次第に候

一、三月國勢調査の用務にて三重、香川、廣島、愛媛四縣に出張を命ぜられ京都、大阪、兵庫、岡山の沿道府縣にも立寄り候

一、四月滋賀縣に統計講習會開催あり之に出張を命ぜられ歸途名古屋に立寄り候

一、四月二十三日に勳六等に叙し瑞寶章を授與せられ候

一、五月新に國勢院設定せられ内閣統計局は廢止從て内閣統計官は廢官統計局事務は國勢院第一部に於て執ることとなり候小生は兼國勢院統計官に任じ第一部審査課長を命ぜられ候

一、五月國勢調査の用務にて埼玉、栃木二縣に出張踵で長崎、福岡、大分、佐賀、熊本、宮崎の諸縣に出張し佐賀縣開催の統計講習會にも臨み歸途大阪にも立寄り六月半ば過ぎて歸京致候

一、六月より七月にかけ東京府の荏原豊多摩二郡並に神奈川縣に屢出張致候皆何れも國勢調査の用務に候

一、七月下旬矢張國勢調査の用務にて大阪、京都、神戸に出張一旦名古屋に歸り茲にて小川長官を迎ひ其一行に加はり再び京阪神を巡回すべき筈なりしが七月三十一日京都にて講演中將に卒倒せんとし其夜名古屋に行き一日強いて講演をなし其日より旅宿に仆れ遂に長官の一行にも加はり得ず五日歸京爾來平臥約三十日宿痾ある身とは申ながら時しも同僚諸君に依りて行はれたる國勢調査宣傳の大壯舉を褥中にて羨望する落伍者の憂目を見申候

一、併し幸に九月には蠢動し得るに至り候ことゝて代々幡町第九區擔當國勢調査員たる職務を遂行し斯千歳一週の第一回國勢調査に當り當局に名を列するのみならず實際調査にも従事し聊か素志の一端を達し候

一、内務省主催兒童衛生展覽會の委員に擧げられ十一月十八日行啓あらせられたる皇后陛下に咫尺し奉り生死統計に關し説明を甲上ぐるの光榮に浴し候

一、右の如く多事に過ごし候爲夙志の研究は中止し蒐集癖も何の獲るもの無く寔に没趣味極まることに候へき

一、荆妻は又次ぎ／＼に餘儀なくせられたる茅屋の普請に忙殺せられ落附きて園藝も出來ずつまらなき一年なりしと託ち居候

一、是は未來の事に候へども國元後繼の婦は約既に成り候こと故遠からず家庭の闕を補ひ得べく候されば來る春は三孫兒にも良母を迎ひやり我等翁媪もチト志したることあり聽ては寛きたる生活に入り得んかと今より樂み居候

恭く新年を賀し併て高堂の萬福を祈上候

大正十一年 壬戌元旦

副申 例に依り昨年中の卑況を叙し平素御無沙汰の御詫に代へ申候

一、先づ以て小生儀豫てより病軀職に耐えず爲めに退官願差出置候處一月二十六日依願免本官竝兼官の恩命に接し枕簟自隨の身と相成候乍去前後十有七年の官場生活其冠を掛くるに當りてや多少の感無き能はず候へき而して國勢院より即日事務囑託を命ぜられ内務省の囑託は依然存し更に三月十六日に東京市役所より市務の囑託を受け候以上何れも日々出勤するにはあらず事多くは間接なれども矢張統計従事者の一員たるこ

とは小生の以て光榮とする所に候

一、保健衛生調査會委員は退官と共に自然消滅に候へしが七月に改めて仰付られ再び末班を瀆すこと、相成候其用務にて九月に京都府、兵 縣へ十月に島根縣へ出張致候

一、何等の學殖無き統計官吏の古手が教壇に立つが如きは矛盾極れりとして自ら守り居候へしも諸友の勸誘繁きにツイ動されて多年の間に乍些經驗せる所を傳ふるも強ち無用ならずやと思ひ返し一二學校の授業を引受しより夫れから夫と増加し歳末の現在早稻田大學政治經濟科の大學部及専門部、東洋大學の社會事業科、逓信官吏練習所、東京市吏員講習所、東京帝國大學農學部等の統計學授業を擔當し其他協調會社會政策講習所にも又自由學園(女子大學)にも時々罷出候是では費す時間の上より見て殆ど職業的見臺叩きの觀あり退官の趣意立たず如何すべきやと苦慮致居候

一、併し宿痼(糖尿病)は大に佳良にて折々神經痛襲來の外是ぞといふ苦痛なく活動すれば出来る程に健康を復し候實は不圖思ひ立ち候て三月一日以來曉起して明治神宮に參拜することを日課とし風雨寒暑の別なく必ず朝食前に往復約二十餘町を徒歩し清冽

の御手洗水に嗽き少時ながら敬虔の念を持して神前にぬかづくを常とし候斯くて日を経る程に體驗ありてこそ秋の頃より前記の如く効驗著明に相成候

一、例の蒐集癖にて不相變漁り歩き候も近來は獲物甚だ鮮く候併し明人楊心鳳の水郷畫卷、小西皆雲の雪景、張月樵の梅花鶯兒、崎陽諸家の合作、東梧齋寛令の濃彩唐子遊等稍面白く、小野窠の狸一對、道八作寒山拾得、唐物小瓢根附、舊幕時代に大諸侯の用ゐし置時計などは珍品中に加へて然るべきものかと存候其他の諸品雜然紛然當人も其用途を知らざるものさへありてそこに又興趣の饒かなるもの有之候

一、荆妻の園藝は移轉以來未だ恢復せず寧ろ百事を新にする計畫にて土よ苗よ肥料よと苦心致居候されば來ん春よりは南椽に茗を啜りて翁媪紅紫を賞するの佳懷をも得られ可申歟と相樂み居候

一、故園にては亡婦の一周忌過ぎ候二月十日に中蒲原郡笠卷の田村氏の女芳野を迎ひて室を繼がしめ候是にて家庭の闕を補ひ三兒も良母を得て能く懷き長孫保彦は學校に通學する様に相成是亦圓滿に暮し居候

謹て新禧を賀し併て高堂の吉祥を祈上候

大正十二年癸亥元旦

副申 平素は御無沙汰に打過ぎ拜謝仕候此機會に於て一年中の卑況を叙し御詫に代へ申候

一、官を罷めて一身輕しとか私共刀筆の吏たりし者にも其味は同様にて今の氣散じな浪人生活に慣れては重くろしき官邊の取沙汰寔に嫌なことに候

一、國勢院囑託は同院の廢止と共に消滅し内務省囑託保健衛生調査會委員東京市囑託は尙名のみ存し居候も別段に御用なければ罷出もせず至つて吞氣なことに候

一、敢て浪々のたつきに始めた譯でもないが昨春以來の見臺叩き業は其の後又々増加致閉口イヤ開口至極飛んだ事になつたワイと今更後悔前に立たぬ仕義に候誤りて需められ現今授業致居候は火曜の午前大倉高等商業學校、水曜の午前東京市吏員講習所、午後遞信官吏練習所、夕東洋大學、木曜は午前午後とも早稻田大學、金曜の午前日本女子大學校、午後東京帝國大學農學部に候其他既に終了したるもの慶應義塾大學醫學

部、明治學院高等學部の二有之候統計官吏の古手たる自分に何の學殖ありて講壇に立つかと自ら愧ぢながらも弱志にして謝絶し切れずおめく不調法なる辯舌を揮ひ廻り居候併し斯くては退官の本意にも背き候ことゝて追々適任の新人を推薦し老骨は罷下りたきものと存居候

一、大正十年三月一日より相始め候明治神宮への朝詣は此年も四國行の九日間を除き一日も闕かざることを得候今後も繼續致したきものと心得居候

一、是等の御蔭にや健康大に復し一日も業を休みたることさへなく時々神経痛の襲來と例の痒感とで宿痾(糖尿病)の存するを覺える位のこと候

一、平和紀念東京博覽會開設に付統計界に身を寄せる者の一人として自家の小研究を描き略解を加へて出品致候所望外にも銀賞牌を授與せられ候此博覽會見物を兼ね在郷の家族等並に遠地の知友の上京せるもありて洵に樂み多きことに候へき

一、例の蒐集癖此年も亦相應に發展致候多年求めて得ざりし謙堂先生の書、雲泉の竹臺嶺の山水を手にするは渴を醫したるの概あり候雪齋侯の書畫二點、信天翁の蘭、青

浦の米點、杏雨の海族、一蕙の人物等とりくくに面白く廣澤參議の和歌と永春齋陽信の猿は珍らしきものかと獨り悦に入り居候又神戸にて古製の尺時計を入手爾來之を實用に供し居候も妙に候

一、荆妻の園藝は花卉に蔬菜に仲々忙を極め土壤にも肥料にも可なりの苦心致候其甲斐あり猫類大の後園に培はれし雜多の野菜類は更はるく食膳を新にし候又春より初夏にかけては躑躅類の色くさくさなる秋は中菊小菊の香り高さ夏の日盛りも金陵邊石菖に涼を遣り候など何れも一日の疲れを慰むるに足り候殊に今年より桃も柿も實を結び候て我園の初ちさりこそ興趣饒かに候べき

一、郷里にても十月二十七日に婦安産し和彦靜子の二兒を舉げ母子三全人口だけは家門大に賑ひ候是にて私共翁媪も四男一女の孫兒有つ身と相成茲に芽出度迎年致候

攝政殿下には長くも本日の佳辰に御慶事の盛典を舉げさせられ茲に復皇統萬々歳の大志を仰ぎ拜し候こと寔に御同慶の至りに御座候此嘉日に於て併せて貴家の益す御多祥ならんことを祈上候 聊か祝意を表し度 敬具

大正十三年一月二十六日

副申 年々年賀狀に副へて申上候例により此機會に於て過ぐる一年間の卑況を叙し平素御無沙汰の御詫に代へ候

一、小生の宿痼(糖尿病)は依然存し候も苦痛としては時折神経痛の襲來と何にしても疲労し易きとに止り之を往年に比すれば殆ど治癒の感あり候

一、是畢竟大正十年以降風雨寒暑の別なく曉起明治神宮に日參致來れる賜かと存候去年も幸に闕日なきを得候

一、各所よりの囑託は従前の内務省、東京市、濟生會及三共會社の外去年新に統計局を加へ候併し日夕の多忙なるに追はれて何れも力を竭すの餘裕なく遺憾に存居候

一、其多忙は例の見臺叩きが今は本業の如くになりたる爲にて目下は月曜の夕東洋大學、火曜の午前大倉高商、同午後帝大農學部、水曜の午後遞信官吏練習所、木曜は終日早稻田大學、金曜午前女子大學、同午後立教大學の各統計學授業を擔當致居候此他去年は慶應の醫學部にも陸軍及海軍の實業講習にも亦東京市吏員講習所にも出講致候

役人の古手なる非學者が教壇に立つ如き矛盾極まる行爲を何時まで続けねばならぬとやら願くば適任の士を得て老骨は退官當初の志望なる閑日月を樂みたしと存居候

一、併し忙中必ずしも閑事なきに非ず去年も蒐集癖は可なり發揮致候就中得意の收穫は郷里の先儒葵亭松溪兩先生に諸家の寄せたる詩箋歌草數十葉、宣長翁の小幅、二十餘年前岡山の某家にて見覺えある春琴の雙幅、江川坦庵の梅、吳淩明の扇原、侃齋の雪景、村上東州の虎、竹石も凌雲も共に米點山水、大鵬も慈仙も共に墨竹、竹沙の菊明治の初期に餘儀なく南畫を描きたる頃の文麟の竹と椽嶺の蘭等にて皆とりくに面白く候

一、荆妻の園藝は花卉も例に依り雜駁に候小庭の新事業は不相應の大藤棚を築きしことにて是は書齋の夕日除けの設備なれども今年は開花せしめたと望み居候菊作は大切の時期を地震騒ぎに過ぎし自然に任せ候爲ものがじゞ咲きたるが却てあわれに見え候へき

一、九月一日の大地震には拙家も少なからず損所を生じ候爲に大工よ左官よと人手を

煩はし歳末漸く復舊し中塗壁のまゝにて新年を迎ひ候へしが本月十五日の大餘震にて其壁に又龜裂を生じ候

一、幸にも家人一同微傷だに負はず健全に候又郷里にては五孫兒も共に壯健にて家業に勤しみ居候二兒は通學此程其新年試筆を送越し候

恭く新年を賀し併て高堂の萬福を祈上候

大正十四年乙丑 元旦

副申 例に依り昨年中の卑況を述べ平素の御無沙汰の御詫に代へ候

一、何んの彼んのと申ながら又一年見臺を叩きて過ぎし候尤も時の夜分に係り候學校は健康の關係あり御勘辨を被り候も亦新に加はりたるものありて目下は月曜の午前東京帝國大學經濟學部法學部、火曜の午前東京市吏員講習所、午後東京帝國大學農學部水曜の午前大倉高等商業學校、午後遞信官吏練習所、木曜は午前午後とも早稻田大學金曜午前に日本女子大學校に罷出何れも統計學の講釋致居候思へば淺學薄識の身を以て講壇に立つ矛盾さ我ながら烏辭の次第に存候

一、官廳其他の囑託は名のみ依然存し候も勤務は内務省衛生局だけ金曜の午後に参り候

一、十月一日に大厄難に遭ひ眞に危機一髪の間、萬死を免れ候夫は自働車に背後より衝突せられ候ことにて倒るれば萬事休焉なりしに其刹那如何にしてか後ろざまに車の水入口につかまり約二間押され打撲を受けたるだけにて助かり候

一、同朝明治神宮参拜の際拜誦せる御製に『開け行く道に出でて心せよ躓く事のある世なりけり』とありしに思合せ是全く大正十年三月一日以來毎朝日参して闕かさざる誠意を嘉納ましましての御加護に依るものと相信じ居候

一、此遭難當時の驚愕と其前後にくだらなき事に拘り憤慨せる精神衝動が原因なりし由にて宿痾充進し十月末には糖量六%以上を算し例の不明の高熱を發し候へしも今は舊に復し候

一、復舊と申せば震災後のボロ家の修理は随分長びき舊臘漸く落成致候但し家に猶多少の曲れる箇所あり壁も乾くに從て幾分の罅生ずるを免れぬ程度の落成に候

一、蒐集癖は相應に發揮し書畫幅約五十點を獲候中に就て葦葭堂の松下墨客は狩野から南畫に移れる彼の盛時の筆、金谷、熊嶽、米山の山水も妙、海注、鐵翁、佩川の竹も面白く、涼庭の小典には其覇氣が思遣られ、布岳の山水は亡友を偲ぶの縁深きもの眞偽相半する闇齋の畫幅、丸山作樂、古松簡二、大橋一藏、永岡久茂等の獄中の執筆五幅、趙陶齋二幅、京都にて誤殺せられたる家里松濡と南岳との合作等、其他近世儒家の筆蹟多く候

一、荆妻も小生の厄難前一週日の頃庭上にて不慮に足關節を挫き今以て歩行に痛みを覺え不自由致居候其間にも普請の世話をせざるを得ず從て好める園藝も十分ならず候

一、國元にては一同無事五孫兒も達者なる由囁かし賑かなることならんと存候

一、斯くして小生も茲に還暦の歳を迎へ眞の意味の老境に入り候

第三篇 旅行日記

一、湯河原日記（大正八年）

三月二十九日 土曜

朝晴れたれば風少しくあれども出發することにす。

予入浴し居る間におつる夜具包みを作る又彌來りて荷物を停車場に運ぶ。

午前十一時十分東京驛發。おつる阿部憲吉君今井久則君須田由藏君見送らる。

土曜より日曜にかけて湘南に遊ぶ人多しとて新橋品川より子女を伴ひたる乗客少なからず。

國府津より小田原まで電車も混雜せり。小田原にて輕便鐵道滿員の爲め次の列車に乗ることゝす其間朝陽軒といふに憩ふ。湯河原より歸來し東京よりの細君を迎ひて箱根に行かんとする人、十六年前に湯河原に一年有餘入浴し大火傷全く癒へ今日久

々にて再問せんとする人、種々の話を聞く。

四時輕便鐵道にて發す。總て並等なりこは乗客多きが故に特等を廢し乗れるだけ乗せる便宜の計畫に依る。眞鶴にて降客三四人あり。こゝに待てる學生三四人乗車せんとす車掌肯んせず。此降客は小田原發時の豫定なればなりと公平の言面白く感ず。門川にて箱根屋番頭迎ひ居り直に馬車を請ふて發す。

國府津着の頃より曇たる空遂に雨となり霏々として車を打つ湯河原に入りて日全く暮る。

箱根屋に宿したるは七時に垂んとする時なり。娘さんお菊さん下婢おしんさん來り久濶を叙す皆昨年の御馴みなり。行李を解きて整理し先づ一浴す。

豫て成章堂の送れる校正八頁を了し、おつるに顛末を報し、鷄助花房先生牛塚氏へはかきを出す。又一浴して寢ぬ。箱根屋の室は昨年の其室、番頭も下婢も昨年の其人にて何かと居心地よし。

今日の讀書、ゾンバルトの資本主義の精髓なり。

三十日 日曜

朝起窓を開けば箱根屋の周圍總て是櫻花爛熳として咲きも残らず散りも始めぬ光景寔に白雲堆裏に在るが如し。阿部、須田、今井、鷺尾、後藤、水科、田中、宮入、布川、角倉諸氏にハガキを出す。

湯河原の新事を聞く。湯河原俱樂部出來四時興行を絶たず。幼稚園成り入園希望者百數十人ありしも規模少なる爲八十餘人を入れたり藤木橋の橋板を代へたり。上野屋別荘に設けたる小田原の某割烹支店は廢せり。

お菊さん朝倉皇として上京の途に就く。是縁談整ひて東京下谷の姉さん方に行けるものゝ由。箱根屋主人は此程來上京中なりとのこと。

午後成章堂より校正八頁到着直に之を見て返送す。

高橋幸之助、小泉國吉、阪本敦三氏へ禮狀旁ハガキを出す。

黎明會講演集を購ふ。吉野氏の趣意説明を讀む。

本日讀書、ゾンバルトの資本主義の精髓、上篇讀了。

今日は晴天なりしも夕刻より風出て落花繽紛として來る寔に良寛禪師の歌の久方の天きる雪と見まかふは櫻の花の降るなりとの意面白しとも面白し。
今日七回入浴。

三十一日 月曜

晴天なれども風立ちて寒き心地す。

朝より朝鮮にての國勢調査講演筆記を校閲す遅々として進まず、轉た痛切に修辭の不充分なるを嘆嗟す。

花房博士、紀本、加藤、角倉祐二、古田、荻原、奥田の諸氏へハガキ、おつるへ手紙を出す。

成章堂より校正八頁來る直に之を見て返送す。

夜芥子園に就て蘭を習ふ。

今日入浴六回。

四月一日 火曜

麗かなれども氣温猶低し。午後二時五十六度なり。

朝鮮の速記を見る。

朝鮮總督府よりの旅費精算に封入して其記入方を吉田繼衛君に依頼狀を出す。

午前宿より牡丹餅を贈らる。是は一月送りなる上己の馳走なり。下婢曰く此邊にては神武天皇様を御祭しますからと、五月の節句は陽曆に依るものとの事なり。

午後、成章堂より校正八頁來る直に見て返す。これにて四月號は終了なり。高橋清氏に其旨を報じて次號の材料蒐集を頼みやる。

午後、清瀧橋まで散歩す。中西新館の招牌は井上甫水の筆なるを見る。

はやの子かめ頻り飛び廻る。

夜芥子園に就て蘭を學ぶ。

此日讀書、メヨ・スミス經濟統計學なり。

本日入浴七回。

二日 水曜

天氣晴朗、氣溫少しく上れり。

昨夜痒氣強かりし爲安眠を妨げ今日は氣分重し。

朝水科君、阿部君よりハガキ來空谷登者を聞くの思あり。

相田、堤、脇屋、森、陸、濱田、蜂須賀、鈴木繁、今井、調査局兩課へハガキを出す。

午後加藤君、蜂須賀君より手紙來。

夕おつるへ手紙加藤氏、水科氏へハガキ花房先生へもハガキを出す。

本日の新聞に柏木大火の報あり阪本氏、小泉氏無事なれかしと祈る。成るべく米飯を減食せんと思ふ。

本日讀書、黎明會講演集、經濟統計學。

入浴六回。

三日 木曜

空少しく曇れり。

午前、布川君よりハガキ令息軍隊より病を得て歸來せるもの、如く軍閥の時代錯誤を慨せる狀文に現はれたり。寔に氣の毒のこと、言ふべし。

今井久則君より手紙栗本氏も亦當地に來らるべしとのこと、阿部君よりも手紙内務省より辭令を受けたり。

箱根屋主人昨夜歸來せりとて挨拶に來る。

阪本氏小泉氏へ見舞のハガキ、阿部君へ贖するの手紙を出す。

中央美術を求む。廣業追悼號なり。菊澤武次氏が臨終の狀を記せる文悲痛讀むに耐えず。

栗本庸勝君令夫人と共に訪はる。昨日到着中西本店に宿られたりとのこと。新舊の談數刻令夫人は昨冬腹壁切開の手術を受けられたりとのこと。

夕、田中太郎君及おつるより手紙。おつるの手紙には吉田繼衛君の狀を封入せり。おつるへ栗本氏に逢ひたること返事。花房先生へハガキ、愛媛の渡邊巍氏へハガキ禮狀なり。

三月節句なりとて宿より玉子とち蕎麥二個到来。

本日讀書、福田氏及高野氏經濟統計講話、中央美術。

本日入浴六回

四日 金曜

昨夜痒氣に堪えず幾度か覺む。

今朝は曇りて雨氣なり、思ふに痒氣の強きは之が爲ならん。又或は思ふ幾度かカスカラを用ゆるも通利充分ならず爲に腸内容鬱滞しメチニコフの所謂自家中毒を起すにあらざるかと、仍てラクトスターゼを用ゆることを案出す。

おつるにハガキにてラクトスターゼ送り方を申しやる。

牛塚氏へハガキ。

小泉氏より手紙昇級せりとのことなり。

午前栗本氏を中西本店に訪ひ雑談二時間。

歸途、酔狂氏と語る。

朝鮮吉田君へ手紙、柘植會議のこと、講習會のこと。

湯澤三千男君へ手紙、調査會手當の禮なり。

午後栗本氏夫人と共に來訪、相携へて不動瀧及清瀧を見る、栗本氏よりラクトスターゼを貰ふ。

布川君より日々新聞着、直に布川君に慰問狀を發し鶴田軍醫局長に一病夫として警告を發す。

鷺尾君より手紙、創立功勞者に賞與云々。

湯河原案内を求む。

本日讀書、湯河原案内

本日入浴六回。通痢、三回、硬便なり。

五日 土曜

朝小雨、午後より晴れたり。

午前、陸壯三郎君よりハガキ。

鷺尾君へハガキ、賞與のこと。おつるへハガキ、同上受取置くべきこと。
午後濱田君より手紙記入心得の案を添へ来る。仍て此記入心得に付意見八ヶ條を提出す。

加藤君へ手紙、紀本君の手紙を封入す。

堤友久君よりハガキ。

愛媛縣の營業調査諸案を閲讀す。

岡田温氏に賀状を出す。

日の出屋にて菓子類を購ふ。

夜栗本氏を訪ひ、談話二時餘。

本日入浴、四回。通痢、一回。

六日 土曜

晴天なれども雲多し。

朝、室内及靴を整理す。今朝より綿入一枚と爲る。

おつるより手紙、丸負傷しそれより膿毒症を發し命危しとの報なり。飼養七年寔に哀れを覺ふ。直に手紙を認めおつるに返事す。花房先生へハガキを出す。

新聞を見ると津輕伯爵卒去の記事あり、面識ある人として轉た痛悼の情に耐えず。

午後、栗本君夫妻と共に川崎公園大倉別墅等を散歩す。歸途中西にて小談。

花房先生よりハガキ喀痰未だ全く鎮靜せず云々とあり御容態甚だ氣遣はるゝなり冀くは先生の御身に異變あること勿れ。

小泉君より禮狀、松田、鈴木繁二氏より手紙。松田氏の手紙を見て甚だ慨嘆す。濱田氏より統計集誌送來す。

今井榮之君より繪ハガキ來る。

おつるより又手紙。丸遂に死せりと如是畜生發菩提心、西信寺に託せりとのこと
に満足す。八百枝清來訪せりとのこと。杉浦のつな子久留米にて家出せりとのこと。
心に關すること多し。

おつるに返事を出す。

本日気分佳良なり、便通一回軟。

本日入浴、六回。

本日の讀書、タウン社會問題。

七日 月曜

朝細雨霏々午後に至り晴れたり。

後藤君へ手紙、保健衛生調査會備人引拂のこと囑託員解囑の事並に我心事及花房先生容態のことなり、蜂須賀、濱田、加藤、鈴木諸氏への謝状を同封す。

花房先生へハガキ。

紀本君へハガキ、統計局長へ挨拶状のことを記す。

午後、栗本氏夫妻來訪、玉露を馳走す、共に携へて觀音山より坊主山に至り迂回して藤木橋に出づ。

あつるより手紙、佐川くら上京婦人科病に罹れりとのこと。杉浦のつな歸京せりとのこと。

朝あつるよりの小包到着。梨子、ばなし、ラクトスターゼ入りあり、直に受取の返事を出す。

阿部君より手紙引移りのこと丸のこと。

布川君よりハガキ、令息遂に逝去。

稻葉信吉よりハガキ。

あつるへ返事磐瀬雄一君へ紹介状及丸斃死の届書を同封し、憲吉君への手紙も入る。

布川君へ弔辭、明朝香典小爲替封入して投函すべし。

津輕伯爵家へ弔辭。

本日晝飯よりラクトスターゼを服用す。

本日入浴五回、便通一回軟。

本日讀書、タウン社會問題。

八日 火曜

晴天なれども風強し残花吹飛。

鶏助より手紙、近く降雪ありきと。

おつるより、羊羹小包到着早速之を味ふ。

床次内務大臣へ弔詞を呈す。

郵便局に行き、民友社の新時代叢書豫約十二圓振替貯金を送り、床次、布川兩氏への香典三圓宛小爲替を組む。

午後、中西に栗本君を訪ふ不在、見附に行く途中栗本君に邂逅し相携へて宮下に行き五所神社に詣し楠及銀杏の大樹を見、金比羅に詣つ。

おさとさんより手紙、郷里の山行のことを叙せり。

水科君より手紙、近く歸省し佛事を營むとのこと。

安藤久次郎君よりハガキ上京の由。

花房先生へハガキ、十國峠のこと走湯詣のこと。

おつるへハガキ、羊羹受取のこと。

おさとさんへハガキ。

夜、栗本君を訪ひ統計談を爲す。パンを贈らる。

此日、入浴六回、便通二回、軟。

本日讀書、タウン社會問題。

九日 水曜

晴天にして風靜かなり。

朝、栗本君來訪、湯場を見せる、蓋し湯河原に於ては箱根屋の温泉を第一と爲すなり。

おつるより菓子到着。

おつるへハガキ、菓子到着のこと。花房子爵家不幸のこと。

花房先生へハガキ。

新聞によりて花房子爵未亡人の死亡を知り、子爵家へ弔詞を呈す。
午後、栗本君夫妻と共に頓狂庵に至る。

酔狂の店にてハガキ入箱三個を購入。

陸君よりハガキ二枚着。安東君のことなど。

高橋清君より手紙。治療編輯のこと。

陸君へハガキ。

安東久次郎君へハガキ。

本日入浴、六回。便通二回、軟。

本日讀書、タウン社會問題、金槐集。

十日 木曜

朝來細雨濛々午後に至りて漸く強く鳴雷さへ聞ゆ。

おつるより手紙、或は出かけざるべしとのこと。

脇屋君より手紙。

森數樹君より小包菓子を贈り来る。

花房先生へハガキ。

森君へハガキ、禮狀。

宮入君へ手紙、保健調査の關係を申送る、蛔蟲と尿との關係、國民新聞を切抜き送る。

宿より飴を贈らる。

紀本君より手紙、統計局長への禮狀寫同封。

おつるへ手紙、我歸期を二十日頃とし數日にも来て如何と申やる。

本日入浴、六回。便通二回、軟。

本日讀書、タウン社會問題。

十一日 金曜

曉來氣壓大に下り、驟雨屢來る。

おつるより手紙、裕のこと、清水氏病氣のこと。

阿部君より豆と煎餅の小包到着。

おつるへハガキの返事。

阿部君へハガキ、禮狀なり。

花房先生へハガキ。

午後、鶏助より手紙。小柳善七氏より手紙。

栗本君を訪ふ。今日、熱海に行き歸りたりとのこと。

折柄、黒澤英輝氏の來訪せるに遇ふ。栗本君夫妻は明後十三日歸京とのことなり。

おつるへ手紙、栗本氏歸京に就て我感想を書く。

牛塚氏へ手紙、賞與の禮狀と轉地期日延期のこと。

北豊吉氏へ手紙、學校衛生講習會のこと。

夜、栗本君來訪、煎餅と豆とを貰ひて歸る。

本日入浴、六回。便通三回、軟。

本日讀書、タウン社會問題(了)、クレイ、サンヂカリズムと勞働。

十二日 土曜

晴天なれども氣温甚だ低し。

朝來何とはなしに落附かず、強て端座すれども尙心甚だ安らかならず。

朝鮮の速記を閲讀すれども遅々として進まず。

花房先生へハガキ。

黒澤英輝氏にハガキ、行春や君の姿をちらと見て。

朝新聞を見る杉山衛生局長關東廳事務總長に轉任の報なり、其後任は誰か物色す。

塚本、山田。

午後酔狂方にて楊子入など二三點を購ふ。

森數樹君より手紙、京地の事情を報じ來る。

伊藤寅之助君よりハガキ、單純の見舞なり。

角倉祐二君よりも同様。

布川君より手紙、葬儀の模様など報じ來る。

黎明講演集第二を購ふ。

五時頃小田原より電話、後藤鷲尾兩君五時の輕便にて來訪せらるべしと大に歡迎の

準備を爲さしむ。

次て又電話五時も乗れぬ故行くことを見合はずと誠に落膽す。

鷺尾、後藤兩君へハガキを出し氣の毒のことせりと詫ぶ。

夜、栗本君來訪愈々明日出發とのこと。

本日入浴、七回。便通二行、軟。

本日讀書 サンヂカリズム、黎明講演集第二。

十三日 日曜

晴天にして氣溫稍順に復す。

栗本君を送るべく中西に行く、昨夜木村助三郎、石井萬次郎二氏到着、石井氏は半夜東京より電話あり今朝一番にて倉皇大阪に趣ける由、木村氏と暫く話し、栗本氏夫妻木村氏送る。

越智勝見、今朝次郎氏より手紙。

午後、鷺尾後藤兩氏よりとて果物の籠を送り來る中に名刺あり。江の島に行くこと、

直に昨日來の顛末を記して禮狀を出す。

醉狂方にてハガキ入を購ひ、溫泉談を爲す。

おつるより手紙明十四日來るべしと。

花房先生よりハガキ、横山親造氏よりハガキ。

今朝おつるにハガキ、昨日來の顛末。花房先生へ同様。蜂須賀、濱田兩君連名にて同様出す。

今日意重くして何事も成らず。

本日入浴五回、便通三回。

本日讀書、湯河原案内

十四日 月曜

曇、氣溫稍復す夜に入り小雨。

本日はおつる到着する筈とて朝より心落付かず。

花房先生へハガキ、妻の到着すべきこと。

伊藤寅之助君、紀本君へハガキ。

午後吉川正則君より手紙。

午後おつる到着す談盡さず。

おしんに土産を遣はす。

憲吉君にハガキ、留守宅へハガキ。

本日出浴、六回。便通、二回軟。

本日讀書、サンヂカリズム、讀了。獨逸の職業組織。

十五日 火曜

曇、時々細雨、夕刻より本降りと爲る。

牛塚局長より手紙、充分静養せよとのこと。

鷺尾君より手紙土曜日の顛末を細叙す。

花房先生へハガキ。

おつるは、よごれもの、洗濯す。敷布等を小包と爲し東京留守宅に送る。

午後、後藤君より手紙土曜日の顛末を叙し花房先生の容態を告げ來る。

北豊吉君より手紙學校衛生講演會のことなり。

中尾房藏君より手紙別紙未着

政岡亨君よりハガキ、見舞なり。

政岡氏へハガキ、禮狀。

阿部君に手紙、治療材料のこと、留守中のこと。

本日出浴、五回。便通二回。

讀書、美術畫報、廣業に關する記事。

十六日 水曜

曇、午後終に晴る。

宮入君より手紙、保健調査會のこと、鯨研究のこと、而して予の養病に就て三要を示してくれらる。

松田泰次郎氏より手紙、見舞狀なり。

三共會社より、治療薬報、材料小包及開封到着。
阿部君に手紙、薬服材料送付を乞ふこと。

花房先生へハガキ。

高橋清君にハガキ。

仙臺にて水科君よりハガキ。

蜂須賀君よりハガキ。

午後おつると共に、川崎公園養生園より池見山の一部を散歩す。

夜又散歩し、瀬戸醉狂にて糸まきを求め、伊藤屋前にて鐘詰を購ふ。

今日、入浴五回。便通四回、軟。

本日讀書、唐詩選。

十七日 木曜

曇天。

おつる昨夜來、足疼しといふ。

今井久則君より手紙。

花房先生へハガキ

布川君より「日本及日本人」到着直に其告白を讀む。

布川君へハガキ。

栗本君よりハガキ歸途米神附近にて奇禍を買はんとせしといふ。危い哉。

加藤銀藏君より手紙、内務省へ移轉者の狀を報ず。

三共より治療薬報材料到着す。

夕、廣部橋まで散歩す。

同宿者、長島榮壽老人と語る。伏見稻荷の行者にして其子は京城バゴタ公園茶店の
經營者なりといふ。工藤壯平氏に紹介の名刺を與ふ。

本日、入浴五回。便通二回。

本日讀書、日本及日本人、唐詩選。

十八日 金曜

そのおもかけ

三八〇

晴れて温かなり。

おつる足痛稍軽しといふ。

花房先生へハガキ。

栗本君へハガキ、昨日の返事なり。

午後おつると共に観音山上に行きて蕨を取る。

おみよさんより手紙、留守宅無事を報ず。くらの手紙を封入せり。くらの手紙は禮状なり。

高橋清君より原稿到着。

小泉君より手紙、阪本氏の消息を報ず。

成章堂よりハガキ、原稿督促。

此夕、外人外妾等の入浴の無作法なるを語る。

夜にかけて治療薬報の原稿を編す。

本日入浴、六回。便通三行。

本日讀書せず。

十九日 土曜

陰晴定まらず、時々小雨來、風あり。

朝、夜來の原稿を纏め發送す約十八頁分なり。

おつる朝來、足痛強し、是昨日の山行に因るならん。

高橋清君より材料到達す。

午後又原稿を纏め夜に入り八頁分送る。

花房先生へハガキ。

おみよさんへハガキ。

本日入浴、四回。便通二回。

積木を購ひ來り、之を試む。

二十日 日曜

晴れたれども氣温尙低し。

おつる足痛や、軽きも今日は活動せざることにす。

鷲尾後藤兩君に手紙、花房先生の現状より推して統計界の將來を付度し志を述べ。

花房先生へハガキ。

新聞に依りて栗本君依頼免官を知る。直に見舞状を出す惟ふに諭せられたるものならん。

人口靜態統計に關する神奈川縣の現状に就て新聞切抜を添へ濱田君に注意を促すべく手紙を出す。

蜂須賀君より手紙。大正六年人口動態統計官報掲載の件なり直に材料送付を申遣はす。

中尾房藏君に手紙、別紙未着のこと。

おみやさんより手紙、伊關君の手紙二通を封入す。伊關君の手紙は講習會のことなり。

相濟會委員長として後藤君より見舞状着す。

夕、見附迄散歩。

本日入浴、五回 便通二回。

本日讀書、人種差別説。

二十一日 月曜

晴たれども時々雲徂徠す。

朝鮮の速記を閲す。

憲吉君より治療藥報の材料到着す。

直に治療藥報の編輯に着手し夕刻までに十四頁分を纏め之を郵送す、是にて全部終了なり。

花房先生へハガキ。

夕刻思ひかけず布川靜淵君令夫人と共に來湯、階下に宿られ、新舊の談時の移るを知らず、特に令息三郎君の顛末に就ては聞けば聞くほど慘の又慘たるを覺ふ。

布川君と連名にて花房先生、田中君、後藤君にハガキを出す。花房先生は號外なり

本日入浴、五回。便通二回。
讀書せず。

二十二日 火曜

朝より雨、夜に入りて益す強く風さへ加りて暴れたり。
田中太郎君より手紙、病氣の見舞を兼ねて布川君のことを報じ来る。花房先生へハガキ。阿部君へハガキ出す。
おつる今日は足痛よろしからず。

終日布川君と語る。

夜布川君を紹介すべく陸君に手紙を認む。

本日入浴五回。便通二回。

讀書せず。

二十三日 水曜

晴天にして穏かなり。

統計局より書留郵便着朝鮮總督府よりの書状を封入す。

朝鮮よりの書状は昨年の旅費追給なり。

午前布川君夫妻を案内して不動瀧清瀧を見る。

午後又同行して権現山より養生園川崎公園を見る。

栗本君より手紙、退官のこと並に鐵道院囑託として今後鐵道衛生に盡瘁すべしといふこと。

おみよさんより手紙、留守宅無事、中に潮氏及清水の手紙を封入す。

潮氏は衛生局長心得たることの挨拶。

清水は病狀を記し大陸君の禮狀を封入す。

花房先生へハガキ。

おつるより内藤あき等へハガキ。

留守居中村のかみさんへハガキ。

田中太郎君へ手紙、志を述ぶ。

本日入浴五回。便通一回。
讀書なし。

二十四日 木曜

晴、夕より風立ちたり。

今朝布川君夫妻歸京の途に就かる。惜別の情なき能はず。

花房先生へハガキ。

おみよさんへハガキ。

高橋清君より手紙及原稿来る。ユゴール實驗集二頁増加のことなり。直にハガキにて次號に廻されたしと言ひ送る。原稿はレミジン治験なり。

成章堂より校正八頁来る。直に着手二時の便に出す。

須田由藏君よりハガキ。

後藤君より手紙、局状及局長の意を傳へ来る。

今井榮之君よりハガキ。

蜂須賀君より大正六年動態概數を送り来る。

憲吉君よりハガキ。

動態梗概を記述し夜に入半は成る。

本日入浴、五回。便通二回。

讀書せず。

二十五日 金曜

好晴。

朝より人口動態統計梗概を記述す。十二時過ぎ終了。直に發送す。

蜂須賀今井二氏宛記述に就て手紙を出す。

おみよさんよりハガキ、留守宅無事。

岐阜星野君より手紙、直に返事を出す。

花房先生へハガキ、人口動態に關する件なり。

布川君より手紙、安着の報なり。